筑波大学附属図書館特別展

オリエントの歴史と文化

―古代学の形成と展開―

エジプト新王国第19王朝・アブシンベル大神殿至聖所神像

（ホメロス）『イリアス・アンブロジアーナ』（ファクシミリ版）

筑波大学

University of Tsukuba

筑波大学附属図書館特別展

オリエントの歴史と文化

－古代学の形成と展開－

会　期　　平成16年10月25日(月)～11月5日(金)

会　場　　筑波大学附属図書館　中央図書館貴重書展示室

主　催　　筑波大学大学院人文社会科学研究科
　　筑波大学附属図書館

ご　挨　拶

平成16年4月から全国の国立大学が国立大学法人に移行し、本学も、国立大学法人筑波大学として新たなスタートを切りました。附属図書館としましても、本学の教育研究へのサービスの充実を図るとともに、所蔵資料や教育研究活動の成果等を広く公開して学術研究の進展や生涯学習の向上に寄与し、学内外に一層貢献できるよう、今後とも努力していく所存です。

さて、当館では、平成7年度に中央図書館に貴重書展示室を設置して以来、毎年、本学の蔵書の中から特に貴重なものを選び、本学の教員、大学院生の多大な協力を得て附属図書館特別展を開催して参りました。今回の附属図書館特別展「オリエントの歴史と文化－古代学の形成と展開－」でちょうど10回目の節目の回を迎えます。

今回の展示は、東京教育大学以来の伝統ある本学のオリエント学における研究成果にもとづくものです。目まぐるしく価値観の変動する現代であればこそ、古代学の礎が形成され発展を遂げてきた過程を、附属図書館が所蔵する貴重なオリエント学の関係資料の展示によってご覧いただき、文明の源流に思いを馳せることは、ご関係の研究者の方々ばかりでなく、広く一般の方々にとっても大変に意義深いことと存じます。

平成16年 10月

筑波大学附属図書館長　植 松　貞 夫

古代オリエント学関係図書の展示に寄せて

筑波大学における古代オリエント学は、東京教育大学の時代を含め、半世紀以上の誇るべき蓄積を有する。日本オリエント学会の創立は1954年であるが、同時に東京教育大学ではオリエント学の関係文献の系統的な収集が始まり、以後、数十年にわたって基本文献や関係図書の購入を継続する一方、文献学や言語学の分野において優れた人材を輩出している。

その中心であった杉勇教授は、古代オリエント文字の解読と研究成果を三笠宮崇仁殿下とともに編集した『古代オリエント集』（筑摩世界文学大系1）という名著を1978年に刊行している。これを手にとってみると、聖書以前の3000年にわたる古代オリエントの人々の営みを人類の文化的遺産として、時空を超えて再現することがいかに苦難を伴う作業であったかを知らされる。

粘土板に記されたメソポタミアの楔形文字やエジプトの象形文字は、人類の記憶からはまったく忘れられ、「失われた文字」であった。文字が存在したとすれば、それは往古の時代にあっても人と人の意思伝達の手段であることに変りはなく、そこに住む人々の営みがあり、楽しみや苦しみ、悲しみが表現されていることになる。つまり、わたしたちは文字を通じて歴史を知ることができる。しかし、人類の記憶から消滅してしまった「失われた文字」が、人類が蓄積してきた言語とは全く異なる文法や規則によって成り立っているとすれば、さらには神話と実話が入り混じっているとすれば、「失われた文明」を再現し、人類の遺産として取り戻すことは容易なことではない。今回の展示文献の多くはこうした文字史料の解読作業の苦闘の歴史を伝えている。文献学を中心に、考古学や言語学の蓄積を動員しつつ、「失われた文明」の再現のために、研究者の力を結集してゆく真摯な姿は、学問や研究とは何かを改めて語りかけてくるようである。

今回の展示にも含まれる「死海文書」の初来日に尽力された本学の池田裕名誉教授は、その著書（『死海文書Q&A』）のなかで、「死海文書」に間近に触れた感動をこう書かれている。「――私は毎日これらの巻物に触れ、右から左へ、上から下へ、くり返し眺めておりました。そうしながら、羊皮紙の艶、色、縫い目、書かれている文字の美しさ、羊皮紙の匂いを目に焼きつけ、からだたっぷりに染み込ませることができたのは、本当に幸せでした――」。こうした「幸せ」を味わうことのできる研究者は稀であり、また、オリエント学の豊饒な蓄積がなければ味わうことのできない「幸せ」である。

大学院人文社会科学研究科長　波多野　澄　雄

目　　次

附属図書館長ご挨拶……植　松　貞　夫……3
古代オリエント学関係図書の展示に寄せて……波多野　澄　雄……5
目次……7

筑波大学の古代オリエント学関係図書……山　田　重　郎……9
展示目録……10・11

第１部　総説：山　田　重　郎……13

アッシリア学

展示書目　No.1-15……14～21
楔形文字の解読過程……有　賀　　望……22
旧約聖書と周辺オリエント世界……杉　江　拓　磨……24
考古学からみたウガリト文字成立の背景……長谷川　敦　章……26

第２部　総説：池　田　　潤……29

Ⅰ）旧約聖書

展示書目　No.16-20……30・31

Ⅱ）ユダヤ教

展示書目　No.21-23……32
死海文書と旧約聖書……池　田　　裕……33
オリエント諸語の系統図【その１，その２】……池　田　　潤……34・36
オリエント学と東京教育大学・筑波大学（言語編）……池　田　　潤……35

第３部　総説：秋　山　　学……37

Ⅰ）エジプト

展示書目　No.24-29……38～40
古代エジプト文明の発掘史および解読史の黎明と発展……山　中　美　知……41
古代エジプトの神殿に残る図像資料とその研究について……深　谷　雅　嗣……43
象形文字の表音性：ヒエログリフ解読の鍵……永　井　正　勝……45

Ⅱ）ペルシア

展示書目　No.30……47
インド・ヨーロッパ語族の系統図……秋　山　　学……47
ゾロアスター教の聖典写本伝承……後　藤　信　介……48

Ⅲ）ギリシア・ラテン

展示書目　No.31-34……51～54

Ⅳ）シリア

展示書目　No.35-37……55～57

Ⅴ）オリエント教父

展示書目　No.38……58
オリエント世界のキリスト教会について……秋　山　　学……59

地図……60・61
年表……62・63
索引……65

筑波大学の古代オリエント学関係図書

山　田　重　郎

筑波大学が所蔵する古代オリエント学関係図書は、東京教育大学において文部省の助成を受けて行われた研究プロジェクトに端を発している。1953年に開始された「西洋古代文化の没落過程の研究」と題するこのプロジェクト（「共同研究・機関研究」）の代表者であった下村寅太郎は、研究費による初期の蔵書購入について次のように記している。「その研究は全部図書の購入に当てられたが、個々の著作でなく、叢書、大部の辞書類に制約されていたのが、我々には却って多年の宿望が遂げられるものとして幸運だった。古代オリエント学、ギリシャ古典、科学史・美術史の基本図書、中世の教父全集（パトロロギア・オリエンタリスを含む）等々の大冊を揃えることが出来た」（下村寅太郎「杉勇さん追憶」『風に響む回想：杉勇教授』［西澤龍生他編］1991年 16頁）。以後、テーマとメンバーを変えながら実質的に30年間継続したこのプロジェクトの中心メンバーの一人が杉勇であった。日本の古代オリエント学の草分け的存在として知られる杉の研究室は、特に古代オリエント学に関する文献を集中的に購入し続けた。こうして収集された図書は、1975年に始まった東京教育大学から筑波大学への図書移送の際、一部が学外に流失したものの、筑波大学の古代オリエント学関係図書の基礎となったと言ってよい。

東京教育大学文学部には、古代オリエント学の関連分野に関わる教授として、前述の西洋史の杉勇に加え、セム語学と旧約学の碩学として知られる関根正雄がいた。また、考古学の増田精一は、東京教育大学イラン先史遺跡調査団を組織して発掘調査を行い、成果をあげた(1971-77年)。古代オリエントに関わる各分野で多くの研究者を育てたこの東京教育大学の伝統は、筑波大学への移転後も形を変えて継続した。開学以来、現在に至るまで、筑波大学には、古代オリエント学に関係する各分野に研究者がおり、研究・教育に従事してきた。過去には、古代イスラエル史と旧約聖書学の石田友雄と池田裕、セム語学の津村俊夫、オリエント美術史の相馬隆、西アジア考古学の増田精一、岩崎卓也、三宅裕、現職では、西アジア考古学の川西宏幸と常木晃、セム語学の池田潤、オリエント地域のキリスト教研究の秋山学、そしてアッシリア学と古代イスラエル史の私である。筑波大学時代に入って、中央図書館には、これらの分野を中心に多数の学術雑誌を含む古代オリエント学関係図書が随時補われてきた。古代オリエント学研究のための専門学部を大学に持つ伝統が育たなかった我が国において、筑波大学における古代オリエント学はユニークな伝統をもち、極めて稀な発展を見て、なお継続している分野なのである。

展　示　目　録

第1部　アッシリア学（総説　山田重郎）

1. Layard, A. H., *Discoveries in the Ruins of Nineveh and Babylon*, London, 1853. **H120-l33**
（解説：伊藤早苗）
2. Smith, G., *Assyrian Discoveries*, London, 1875. **H120-s7**（解説：伊藤早苗）
3. Delitzsch, F., *Babel und Bibel: Ein Vortrag*, Leipzig, 1903. **H220-d2**（解説：杉江拓磨）
4. Koldewey, R., *The Excavations at Babylon* (translated by A. S. Johns), London, 1914. **H120-k2**
（解説：山田重郎）
5. Langdon, S., *The Babylonian Epic of Creation*, Oxford, 1923. **F800-l10**（解説：岡田晴子）
6. Bergmann, E., *Codex Ḫammurabi, textus primigenius*, edition tertia, Roma, 1953. **L290-*1**
（解説：有賀望）
7. 原田慶吉『楔形文字法の研究』弘文堂　1949. **ム230-36**（解説：岡田晴子）
8. Woolley, C. L., *Ur Excavations, vol. II: The Royal Cemetery*, Oxford, 1934. **H120-w22**
（解説：長谷川敦章）
9. Thureau-Dangin, F., *Les cylinders de Goudéa, découverts par Ernest de Sarzec à Tello*
(Texte Cunéiformes du Louvre 8), Paris, 1925. **H170-l1**（解説：山田重郎）
10. Landsberger, B., *Materialien zum sumerische Lexikon, Band I: Die Serie ana ittišu*, Roma,
1937. **E100-l95**（解説：二ノ宮崇司）
11. Dossin, G., *Lettres, Archives Royales de Mari* 1 (Textes Cunéiformes du Louvre 22), Paris,
1946. **H170-l1-22-1**（解説：有賀望）
12. Schaeffer, C. F.-A., *Ugaritica: Études relatives aux découvertes de Ras Shamra*, I, Paris,
1939. **H170-h29**（解説：長谷川敦章）
13. Smith, S., *The Statue of Idri-mi*, London, 1949. **H120-s36**（解説：杉江拓磨）
14. Mallowan, M. E. L., *Nimrud and its Remains*, vols. I-II and folding maps, plans and sections,
London, 1966. **H220-m17**（解説：長谷川敦章）
15. Hawkins, D., *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*, vol. I, Part 1-3, Berlin ; New York,
2000. **227.6-H45**（解説：山田重郎）

第2部　旧約聖書・ユダヤ教（総説　池田潤）

Ⅰ）旧約聖書

16. *The Leningrad Codex*, facsimile edition, **193.1-F46**（解説：池田潤）
17. *The Aleppo Codex*, facsimile edition, Jerusalem, 1976. **193.1-Ma31**（解説：池田潤）
18. *Biblia Rabbinica*, facsimile edition, Jerusalem, 1972. **193.1-I11**（解説：池田潤）
19. *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Stuttgart, 1977. **193.1-Ki79**（解説：池田潤）
20. *The Dead Sea Scrolls electronic reference library*, Oxford ; Leiden, 1997. **193.02-L62-1**
（電子資料）（解説：池田潤）

Ⅱ）ユダヤ教

21. *The Dead Sea Scrolls of the Hebrew University*, Jerusalem, 1955. **H120-s18, H120-s19**
（解説：池田潤）
22. *Mischnacodex Kaufmann*, faksimile-ausg., 2vols, Jerusalem, 1968. **199-Mi51**（解説：池田潤）
23. *Babylonian Talmud*, limited facsimile edition of 400 copies, Jerusalem, 1971. **199-B12**
（解説：池田潤）

第3部　エジプト／ペルシア／ギリシア・ラテン／シリア／オリエント教父（総説　秋山学）

Ⅰ）エジプト

24. Champollion, J.-F., *Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens, ou, Recherches sur les éléments premiers de cette écriture sacrée, sur leurs diverses combinaisons, et sur les rapports de ce système avec les autres méthodes graphiques égyptiennes,* Paris, 1827. **894.2-C32**（解説：山中美知）
25. Lepsius, C.R., *Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien : nach den Zeichnungen der von Seiner Majestät dem Koenige von Preussen Friedrich Wilhelm IV nach diesen Ländern gesendeten und in den Jahren 1842-1845 ausgeführten wissenschaftlichen Expedition auf Befehl seiner Majestät.* 12Bde. Berlin, 1849-59. **H120-l38**（解説：山中美知）
26. 'The Finding of Tut-Ankh-Amen's Tomb.' **H120-e**（解説：深谷雅嗣）
27. Erman, A., *Neuaegyptische Grammatik,* 2. Aufl., Leipzig, 1933. **E700-e2**（解説：永井正勝）
28. Gardiner, A. H., *Egyptian Grammar : Being introduction to the study of hieroglyphs,* London, 1957. **E700-g7**（解説：永井正勝）
29. Polotsky, H. J., *Etude syntax Copte,* Cairo, 1944. **E700-p2**（解説：永井正勝）

Ⅱ）ペルシア

30. *Codices Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis* ; Vol. 1, 8-12. Copenhagen, 1931-44. **E680-c6**（解説：後藤信介）

Ⅲ）ギリシア・ラテン

31. *Bibliorum Codex Sinaiticus Petropolitanus,* facsimile edition, 4Bde. Hildesheim, 1969. **193-Ti7**（解説：吉村知恵子）
32. *Ilias Ambrosiana :* Cod. F. 205 P. Inf. Bibliothecae Ambrosianae Mediolanensis, facsimile edition, Berna, 1953. **F400-h24**（解説：秋山学）
33. Lowe, E.A., *Codices Latini antiquiores : a palaeographical guide to Latin manuscripts prior to the ninth century* ; Pt. 3, 6, 7. Oxford, 1938, 1953, 1956. **H100-l5**（解説：秋山学）
34. *Clavis Patrum Latinorum,* (Sacris Erudiri), 2nd ed., Steenbrugis, 1961. **190.31-D54**
    Clavis Patrum Graecorum, 5 vols. (Sacris Erudiri), Turnhout, 1974-1987. **190.3-G31**
    （解説：秋山学）

Ⅳ）シリア

35. Quatremere, Stephanus M., Payne Smith, R., *Thesaurus Syriacus,* 2vols. Oxford, 1879-1901. **E100-s121**（解説：秋山学）
36. Bedjan, P., *Acta martyrum et sanctorum,* 7 vols. Parisiis, 1890-1897. **C160-*5**（解説：秋山学）
37. Graffin, R., *Patrologia syriaca,* 3 vols. Parisiis, 1894. **C600-g10**
    Graffin, R., Nau, F. N., *Patrologia Orientalis,* 27 vols. Paris, 1900-. **C150-p3-PO-1/27**
    （解説：秋山学）

Ⅴ）オリエント教父

38. Chabot,J.B., Guidi, I., *Corpus scriptorum Christianorum Orientalium* (CSCO), vol. 1, 2. 1903-. **C150-c5**（解説：秋山学）

計38点

第 1 部

総　説

山　田　重　郎

イラク、シリア、トルコなど中東各地から出土する楔形文字文書を研究する学問がアッシリア学である。楔形文字は、メソポタミア南部のシュメール人の都市ウルクで紀元前3100年頃に成立し、しだいに周辺地域に伝播していった。その過程で―漢字が日本語を書くために用いられ、そこから仮名が考案されたように―楔形文字システムも様々に形を変えながら中東各地の異なる言語を書くために用いられた。それには、最古のメソポタミア文明の担い手であったシュメール人の言語であるシュメール語（言語系統不明）、前2000年以降の中東地域において国際公用語になったアッカド語（セム系）をはじめとして、ヒッタイト語（インド・ヨーロッパ系）、ウガリト語（セム系）、古代ペルシア語（インド・ヨーロッパ系）などが含まれる。

こうした楔形文字文書の研究は、古代ペルシア語楔形文字の解読に始まり、19世紀半ばの英仏によるアッシリアの考古遺物の発見と楔形文字アッカド語の解読により本格化した（1、2および「楔形文字の解読過程」参照）。19世紀末から20世紀初頭にかけては、ドイツによるバビロン発掘が行なわれ（4）、古代メソポタミア文明と旧約聖書の関係が熱心に論じられた（3および「旧約聖書と周辺オリエント世界」参照）。特に著名なバビロニア起源の文字遺産として「ハンムラビ法典」（6）と「バビロニア創造伝説」（5）を挙げることができる。わが国では、1949年に原田慶吉が楔形文字で書かれた法について、本格的な研究書をあらわした（7）。

バビロンとアッシリア諸都市の繁栄に先だって、紀元前3千年紀のメソポタミアに花開いたシュメール人の文明も、20世紀に入って南メソポタミア各地の発掘により、しだいに明らかになった。ウルの王墓の発掘（8）は、その代表例である。各地でのシュメール語粘土板の発見は、シュメール語の研究を促進した。ラガシュの王グデアの残した長大な円筒碑文（9）やシュメール語・アッカド語辞書文書（10）の発見は、シュメール語研究の進展に大きく貢献した。

新たな遺跡調査と文字資料の発見によってメソポタミア周辺の未知の都市文明も明らかにされてきた。その代表的な例が、ヒッタイトの首都ハットゥシャ、ユーフラテス中流域のマリ（11）、北西シリアのウガリト（12および「ウガリト：考古学的調査とその文字資料」参照）とアララハ（13）における調査と発見である。

その後も今日にいたるまで、各地での発掘は新たなデータをもたらし続け、文書研究の進展もまた止むことがない。1950年代のイギリスによるニムルド発掘（14）とアッシリア学の関連分野に数えられる象形文字ルウィ語碑文の近年における集成、編纂（15）は、学史に残る調査・研究の例に数えられる。

1 A. H. Layard, *Discoveries in the Ruins of Nineveh and Babylon : With Travels in Armenia, Kurdistan and the Desert,* London, 1853. 23.1×14.9cm (H120-l33)

『ニネヴェとバビロンの遺跡における発見：アルメニア、クルディスタン、砂漠での旅行』

19世紀半ば、メソポタミア古代遺跡の本格的調査の幕開けとなる記念碑的発掘調査を指揮したイギリス人レヤードの著作。1849年から1851年まで、大英博物館の出資によりレヤードが2度目に実施したニネヴェのクユンジク、ニムルド、バビロンなどの発掘を報告している。レヤード自身によって描かれた200以上の豊富なイラストを使い、発見された宮殿の浮彫や彫刻を中心として、遺物や遺構を紹介する。また詳細な地図と旅行記は、当時の西アジアについての民俗学的な情報を提供する。

オーステン・ヘンリー・レヤード卿

Layard, Austen Henry, Sir （1817-1894）

イギリスの考古学者、作家、外交官。フランス人貴族の子としてパリで生まれ、フィレンツェ、スイス、イギリスなどで少年期を過ごした。ロンドンで弁護士事務官として法律を学んでいたが、1839年セイロン（現スリランカ）へ向け大陸横断の旅に出発した。1842年コンスタンティノープル（現イスタンブール）へ戻り、そこでイギリス大使によって秘密外交任務に雇われた。1845年からイギリス大使の財政支援を得て、ニムルド、ニネヴェ、コルサバード、バビロン、ニップルなどを発掘。これらの遺物はロンドンへ送られ、現在、大英博物館メソポタミア・コレクションの中心を成している。

1851年レヤードはロンドンに戻り発掘報告や旅行記を出版し、これによって名声を得て政治活動に乗り出した。駐マドリード公使や駐コンスタンティノープル大使等を歴任した後、政界を引退してヴェネツィアに移り絵画の研究に没頭した。1894年ロンドンで死去。（S. I.）

2 G. Smith, *Assyrian Discoveries*, London, 1875. 22.7×15.5cm (H120-s7)

『アッシリアの発見』

1873-74年にG・スミス自身が行った新アッシリアの王都ニネヴェとニムルドの発掘を受け、それまでのアッシリア遺跡の発掘と粘土板文書の解読による研究成果を報告する。特に、メソポタミアの洪水物語を記した一連の粘土板文書や古代イスラエルの王名の研究など、旧約聖書の記述と比較されるメソポタミアの文書資料は、当時の西欧世界で広く注目を集めた。

ジョージ・スミス Smith, George （1840-1876）

イギリスのアッシリア学者。ロンドンで生まれ、銀行で働く傍ら、大英博物館で楔形文字研究に没頭した。それがローリンソンの目に留まり、1867年大英博物館アッシリア部門の研究者になった。1873年から2年間、デイリー・テレグラフ社と大英博物館の出資によりニネヴェとニムルドを発掘した。1876年ニネヴェの「アッシュル・バニパル図書館」を発掘するため再びロンドンを出発するが、途中で熱病にかかり、同年アレッポで死去した。メソポタミアの洪水物語や創世神話の研究など、アッシリア学黎明期の研究者として高く評価されている。（S. I.）

3 Friedrich Delitzsch, *Babel und Bibel: Ein Vortrag*, Leipzig, 1903. 21.3×15.0cm (H220-d2)

『バベルと聖書（ビーベル）　第一講』

ドイツにおける草創期のアッシリア学を主導したフリードリヒ・デリッチ（1850-1922）が1902年1月13日に皇帝ヴィルヘルム2世（1859-1941）の臨席のもと、ベルリンで行った講義を出版したもの。内容はメソポタミア文化と旧約聖書を生み出したイスラエル文化との比較論であり、旧約聖書でバビロンを指す「バベル」とドイツ語で聖書を意味する「ビーベル」との語呂合わせを題名に盛り込んでいる。第一講で旧約聖書におけるメソポタミア文化からの影響を力説したデリッチは、さらに第二講と第三講の中でイスラエル文化に対するメソポタミア文化の優越や古代イスラエル宗教の後進性を主張したために、広くユダヤ、キリスト両教界から激しい批判を招いていく。その間にアッシリア学者や神学者、さらには皇帝をも巻き込んで繰り広げられた議論の応酬は「バベル－ビーベル論争」として長く記憶されることとなる。

展示箇所は、ハンムラビ時代のバビロニアに由来する粘土板文書の中にイスラエルの唯一神ヤーヴェの名が見られるとし、そこからこの神のバビロニア起源を唱えているところ。（T. S.）

4 R. Koldewey, *The Excavations at Babylon* (translated by A. S. Johns), London, 1914. 24.2×16.1cm (H120-k2)

『バビロンの発掘』

ドイツ語原本（1912年）の英訳。19世紀末から20世紀初頭にかけてのメソポタミアにおける代表的発掘となったドイツによるバビロン発掘のうち、1899年から1912年までに得られた成果を報告する。新バビロニア時代の遺構を中心に、発掘地域や市壁、門、宮殿、神殿、ジッグラト、橋などの建築遺構、および美術品、粘土板などの出土品を体系的に報告、分析した。

R・コルデウェイ　Koldewey, Robert（1855-1925）

ドイツの考古学者。メソポタミア、シリア、ギリシア、イタリアなどで発掘活動に従事した。1899年から1917年までのバビロン発掘を通じて、新バビロニア時代（前626-539年）の注目すべき遺物と楔形文字粘土板文書を発掘した。とりわけ、行進道路、イシュタル門、ジッグラトの基礎（いわゆる「バベルの塔」）はよく知られている。泥レンガを堆積物と峻別する方法を開発するなど、緻密な発掘方法の開発者としても高く評価された。(S. Y.)

5 Stephen Langdon, *The Babylonian Epic of Creation*, Oxford, 1923. 23.2×15.0cm (F800-l10)

『バビロニアの創世叙事詩』

ニネヴェのアッシュルバニパル図書館で発見されたバビロニア起源の詩文による創世物語。通常冒頭の語句から「エヌマ・エリシュ（上で・・した時）」と呼ばれ、G. スミスによる初公刊以来、注目と研究の的になった。マルドゥク神が戦いに勝利して神々の頂点に立ち、天地を創造する経緯が７枚の粘土板に記されている。本書は高名な古代オリエントの神話研究者であるS. ラングドン（1876-1937）がL. W. キングの出版（1902）以降新たに発見された粘土板も含めて、厳密な再検証を経た翻字、翻訳に言語学的、比較神話学的注釈を加えて出版したもの。

マルドゥク神

紀元前三千年紀には低地位の神であったが、ハンムラビ王（前18世紀）の時代以降、バビロニアの勢力拡大に伴い王都バビロンの主神としてメソポタミア各地で信仰され、紀元前二千年紀末頃にはメソポタミアの最高神エンリルの後継者として認識されるようになった。マルドゥク神の地位向上は「エヌマ・エリシュ」により神学理論的に正当化されたと考えられる。
(H. O.)

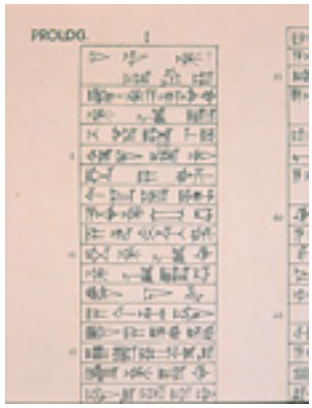
6 Eugen Bergmann, *Codex Hammurabi, textus primigenius*, edition tertia, Roma, 1953. 35.0×27.0cm (L290-*1)

『ハンムラビ法典』

バビロンの王ハンムラビによって作成された、前文、条項（計282条）、末文から成るハンムラビ法典の手写である。ハンムラビ法典は、特にルーブル美術館所蔵のハンムラビ法典碑が有名である。この法典碑は、フランスの考古学者J. ドゥ・モルガンの指揮の下、イランのスサで発掘された。本来メソポタミアの、恐らくシッパルに据えられていた法典碑がイランで出土したのは、イシン第二王朝時代（前1157-1026頃）に、エラムの王シュトゥルク・ナッフンテ1世がメソポタミアを侵略し、法典碑を含めた数々の戦利品をイランへと持ち帰ったためであった。法典碑はその一部分がエラム人によって削り取られてしまったが、ハンムラビ法典は長い間メソポタミアの人々の間で語り継がれ、その写しが取られたため、多くの断片が様々な地域から出土しており、現在ではほぼ全文が復元可能な状態である。本書には、ルーブル美術館所蔵の法典碑と、いくつかの断片が収録されている。

ハンムラビ法典は、各条項が「もし人が～したなら」で始まる決疑法と、「目には目を」で有名な同害復讐法がその特徴とされる。より古い法典の発見により、現在では世界最古の法典の肩書きは失われたものの、構成や規模の面から考えても、古代メソポタミア史上最高の法典として、その重要性は疑いようもない。

もっとも、古代の史料中にハンムラビ法典に言及した判例が存在せず、また、いわゆる法典としては法的欠陥が多いため、現在では法規集として解釈される場合が多い。



ハンムラビ　Hammurabi（前1792-1750頃）

バビロン第一王朝の第六代目の王。「ハンムラビ法典」の存在により、その名を広く知られている。ハンムラビは治世の前半を国内の安定に、後半を国外への遠征に費やし、シュメール人による最後の国家であるウル第三王朝（前2100-2000）の崩壊後、群雄割拠状態にあったメソポタミアの全土を再統一した。この偉業により、それまでメソポタミア南部の一地方都市に過ぎなかったバビロンは、以後バビロン第一王朝が崩壊した後も、メソポタミアの政治的・宗教的センターとして重要な役割を果たし続けることになった。(N. A.)

7 原田慶吉　『楔形文字法の研究』　弘文堂 1949. 21.7×15.2cm (ム230-36)

『楔形文字法の研究』

ローマ法研究の大家としても知られる著者（1903-1950）が、比較法制史の観点から行った古代メソポタミアの法（楔形文字法）に関する研究成果の集成で、日本初の本格的なメソポタミア法制史研究書．第一部「序章」では楔形文字法制全体の概略が述べられ、第二部「比較法的研究」では古代オリエントをはじめギリシャ、ローマ、インド、古代ゲルマン、近代ヨーロッパから中国、日本に至る法制が75項目の視点から比較研究されている。

第三部「翻訳」は古代オリエントの重要な5つの法規集（「シュメール法典」「ハンムラピ法典」「アッシリヤ法書」「ヒッタイト法」「新バビロニア法典草案」）の良訳として、その後の日本におけるオリエント研究の発展の基礎を築いた。(H. O.)

8 C. L. Woolley, *Ur Excavations, vol. II: The Royal Cemetery, a report on the predynastic and Sargonid graves excavated between 1926 and 1931, text and plates*, Oxford, 1934. 33.1×25.2cm (H120-w22)

『ウルの発掘 第2巻“王墓”』

1922年から1934年にかけて、大英博物館とペンシルバニア大学博物館の援助のもと、イギリス人考古学者ウーリーの指揮によりテル・アル・ムカイアル(古代名ウル)で発掘調査が行われた。その成果は、10巻からなる調査報告書としてまとめられた。本書は、1926年から1931年にかけて調査がなされた「王墓」と目された埋葬遺構に関する報告書である。

ウルは長径1.2km、短径0.7kmの楕円形を呈した城壁に囲まれた市域を有し、その中央北寄りの地域にはウルのテメノス神域が存在した。初期王朝時代第3期に帰属する「王墓」は、テメノス神域の南東部に位置している。

「王墓」は16基確認されているが、100基以上検出されている他の埋葬施設とは異なり、煉瓦や石材を用いた部屋構造をしている。全ての「王墓」から、被葬者に殉死した者の遺骨が大量に出土している。また副葬品としては、黄金製の容器、冑、燭台、短剣、貴石類をはじめ、竪琴、貝を象嵌したゲーム板、「ウルのスタンダード」と呼ばれる貝やラピス・ラズリで象嵌された木製の箱が出土しており、これらの副葬品から当時の手工業技術の高さを窺い知ることができる。

当該遺構の被葬者が実在の支配者であったかどうかは、発掘当時から議論されていた。被葬者のうち名前を確認出来るものが、シュメール王名表に記載されていないことや、殉死者の多さから被葬者は実際の王ではなく、祭儀の主体者であるとの説もあるが、マリ出土の奉献碑文に言及されている王名との比較から、現在では当該遺構の被葬者は、実在した支配者であるとの説が有力である。

ウル

ウル(テル・アル・ムカイアル)は、イラクのユーフラテス河の東岸に位置する。1854年イギリス人のテイラーによって、古代のウルであることが確認され、旧約聖書の創世記に言及されている「カルデア人のウル」との関係も指摘された。テイラーの調査後、ホールの小規模な発掘調査を経て、1922年から12年に渡って継続されたウーリーの発掘調査によってその全貌が明らかにされている。

当該遺跡では、紀元前5千年紀のウバイド期から紀元前1千年紀中葉の新バビロニア時代までの文化層の堆積が確認されている。初期王朝時代とウル第3王朝時代に特に繁栄を極めた。テメノス神域は周囲を城壁でかこまれ、約350×200mの長方形を呈していた。神域の主な構築物はウル第3王朝時代に築造されているが、その後イシン・ラルサ時代、古バビロニア時代、カッシート時代、新バビロニア時代、ペルシア時代の各時代に修復がなされている。その中でも神域の北西部に位置する、月神ナンナルに捧げられたジッグラトは、現存するなかでも最も遺存状態の良いものとして著名である。

ウーリー, チャールズ・レナード

Woolley, Charles Leonard, Sir（1880-1960）

オックスフォード大学を卒業後、アーサー・エヴァンスのもとでアシュモレアン博物館に勤務する。ヌビアやイタリアでの発掘の後、1907年の大英博物館によるカルケミシュの発掘調査を皮切りに、フィールドを中東に移す。1914年におこなった、カルケミシュ調査の同僚であり、アラビアのロレンスことT.E.ロレンスとのシナイ半島での踏査は有名である。その後、第１次世界大戦ではイギリス陸軍の諜報部員として働き、一時はトルコの戦争捕虜になるものの、戦後は再び考古学者として発掘活動を再開する。ウーリーによる、エジプトのテル・エル・アマルナ、イラクのウバイドやウル、トルコのアル・ミナ、テル・アチャナなどの遺跡の調査成果は、古代オリエント学の学史のなかで、燦然と輝きを放っている。(A. H.)

9 F. Thureau-Dangin, *Les cylinders de Goudéa, découverts par Ernest de Sarzec à Tello* (Textes Cunéiformes du Louvre 8), Paris, 1925. 29.5×20.8cm (H170-l1)

『グデアの円筒』

19世紀末メソポタミア南部、テルロー（古代のギルス）で、フランス隊によって発見された2点の粘土製円筒(高さ約50cm、直径約20cm)に刻まれたラガシュ王グデア(前21世紀)のシュメール語碑文。フランスを代表するアッシリア学者F. テュロー・ダンジャンによる手写。グデアによる神殿建設と宗教的敬虔を記した長大な詩文作品である。シュメール語文学を代表する作品であり、シュメール語文法研究のための中心的資料のひとつとなった。

ラガシュの王グデア(前21世紀)

ラガシュは、ラガシュ（現アル・ヒバ）、ギルス(現テルロー)、ニナ・シララ(現ズルグル)の3つの中心都市からなるシュメール国家であった。1877年以来の発掘によりギルスとラガシュから紀元前三千年紀後半の彫像、碑文、粘土板が多数出土し、初期シュメール文明の存在が決定的な形で確認された。前21世紀にシュメール都市ラガシュの王であったグデアは、本書に手写された円筒のほか、碑文が刻まれた数十点の石製の彫像を残した。(S. Y.)

10 B. Landsberger, *Materialien zum sumerischen Lexikon*, Band I: *Die Serie ana ittišu*, Roma, 1937. 32.0×23.5cm (E100-l95)

『シュメール語辞書資料，第1巻：シリーズ *ana ittišu*』

シュメール語の語彙と文法をアッカド語で解説した古文書を集成したシリーズ『シュメール語辞書資料（Materialien zum sumerischen Lexikon；後のMaterials for Sumerian Lexicon)』の第1巻。オーストリア生まれのアッシリア学者B. ランズバーガー(1890-1968)によって開始され、1985年の第17巻の刊行をもってシリーズとして一通り完結したこの事業は、シュメール語の語彙と文法の研究に大きく貢献した。

語彙文書は、動物、魚、木材、石、食べ物といった日常用語だけでなく、行政や経済の専門用語をも含む。文法テキストは、シュメール語を習う書記の為の文法書である。第1巻は *ana ittišu*（「特定の適切な注意」）ではじまり、以下の様な形式を持つ語彙・文法テキストの出版である。

シュメール語

メソポタミアの楔形文字文書において存在が確認されている最古の言語。言語系統は不明だが、これまでのシュメール語研究により理解は格段に深まった。しかし、動詞組織などに解明されていない部分も少なくない。

シュメール語は前二千年紀初頃に話し言葉としては絶滅し、セム系言語であるアッカド語がメソポタミアの国際共通語となった。しかし、シュメール語はその後も書記の間で、社会的ステータスの高い文化言語として文学作品、宗教文書、科学文書を書くために使用され、まさに、中世ヨーロッパにおけるラテン語と似たような立場にあった。(T. N.)

（最初の一部紹介）

シュメール語	アッカド語	訳
1．ki.KI.KI.KAL.bi.še3	a-na it-it-šu	「特定の適切な注意」
2．ki.iskim.bi.še3	a-na it-it-šu	〃
3．ki.KI.KI.KAL.bi.še3	a-na it-it-šu	〃
4．in.da.gal2	i-ba-aš2-ši	「存在している」

11 Georges Dossin, *Lettres, Archives Royales de Mari 1* (Textes Cunéiformes du Louvre 22), Paris, 1946. 31.8×21.2cm (H170-l1-22-1)

『マリ王室文書，第1巻：書簡』

ユーフラテス川中流域の遺跡テル・ハリリ（古代名マリ）から出土した、楔形文字粘土板の出版シリーズ『マリ王室文書』の第1巻。楔形文字の手写は、フランスのアッシリア学者G. ドサンによるものである。本書には、主としてマリの王ヤスマフ・アッドゥが、彼の父であるアッシリア王シャムシ・アダド1世（前1813-1781頃）や、兄であるエカルラトゥムの王イシュメ・ダガンと交わした書簡が収録されている。この時代、メソポタミア北部はシャムシ・アダドの支配下にあった。彼はハブル川上流域の都市シュバト・エンリルに座を構え、ティグリス川流域をイシュメ・ダガンに、ユーフラテス川流域をヤスマフ・アッドゥに治めさせていた。従って、これらの書簡群は、紀元前二千年紀前半のメソポタミア北部の情勢を知る上で重要な史料となっている。また、いくつかの書簡の中でシャムシ・アダドがヤスマフ・アッドゥに示した教えは、当時の「君主論」としても興味深い。

マリ

1933年、高名な考古学者A. パロ（1901-80）の指揮の下、フランス隊によって発掘が開始された。マリ（テル・ハリリ遺跡）は、初期王朝時代（前2500-2350）から居住跡が認められるが、より重要なのは古バビロニア時代（前2000-1600）の王宮跡である。ここからは楔形文字の記された粘土板が2万点以上出土している。

マリは紀元前二千年紀前半がその盛期である。特にアッシリア王シャムシ・アダド１世の王朝が衰退して後、ジムリ・リム（前1775-1761頃）がマリ王であった時代には、マリは独立した国家の首都としての地位を回復し、ハンムラビ（前1792-1750頃）の支配するバビロンとも肩を並べる列強のひとつであった。

今日の紀元前二千年紀前半のメソポタミアの国際関係史は、マリ王室文書を中心に研究が進められており、マリの発見は20世紀の考古学史上、最大の出来事のひとつといってよい。

(N. A.)

12 C. F.-A. Schaeffer, *Ugaritica: Études relatives aux découvertes de Ras Shamra* I (Mission de Ras Shamra tome III), (Bibliothèque archeologique et historique 31), Paris, 1939. 27.7×22.9cm (H170-h29)

『ウガリティカ』

現在のシリア北西部、地中海に面する遺跡ミネト・エル・ベイダで、偶然にも石室構造を有する埋葬施設が発見されたのは、1928年のことであった。それを受けて、翌年からフランス人考古学者シェイファーによってこのミネト・エル・ベイダと、内陸にあるラス・シャムラの調査が本格的に開始された。そして、1933年からは、ラス・シャムラに調査の主体は移行している。以後、1970年までに、計34シーズンにわたり発掘調査が行なわれた。シェイファーによる発掘成果とその分析及び研究は、全7巻からなる『ウガリティカ』シリーズによって報告されており、本書はその記念すべき第1巻として、1929年から1939年までの調査成果がまとめられている。

ラス・シャムラからは、ミケーネやキプロスそしてエジプトから搬入された遺物が出土しており、当該遺跡が後期青銅器時代の紀元前２千年紀後半に最も繁栄を極めたことが、明らかになった。また、一方で種々の言語で記された粘土板文書が発見されている。その文書類が解読されたことで、ラス・シャムラがマリやアマルナ、ボアズキョイで出土した粘土板文書に言及されているウガリトの首都であることが判明した。

ラス・シャムラの調査成果の中で最も注目を集めたのが、楔形文字によるアルファベットの使用である。それまで知られていた楔形文字は、音節文字として使用されていたのに対し、ラス・シャムラ出土の粘土板文書に記された楔形文字は、1文字が1音価を表す。ラス・シャムラでは、楔形アルファベットで表記されたウガリト語によって、行政文書、経済文書、さらには、文学、神話、宗教儀礼など多岐にわたる文書類が記されている。

ウガリト

ウガリト(ラス・シャムラ)は、シリアの地中海沿岸部、ラタキア市街から北に約10kmに位置する。またウガリト近辺を流れるナハル・エル・フィッディの河口付近には、港湾都市マハドゥ(ミネト・エル・ベイダ)が所在する。ウガリトは国家の名でもあり、現在のラタキア県とほぼ同じ面積(約2000km²)を領有しており、ラス・シャムラはその首都である。この国家は東地中海世界とメソポタミア世界を繋ぐ要衝として、紀元前2千年紀後半に隆盛を極めた。　首都であるウガリトは約20haを有し、新石器時代から後期青銅器時代堆積層が確認されている。後期青銅器時代の遺構が最も良くのこり、北東部のアクロポリスには、バアル神、ダガン神の神殿が、また西部では王宮および居住区が検出された。居住区の一角には文書庫が確認されており、多数の粘土板文書が出土した。さらには王宮の城門は、切石を持ち送り状に積み上げており、当時の建築技術の高さを窺い知ることができる。

ウガリトは、シェイファーの後も、アンリ・ド・コンテンソン、ジャン・マルガロン、マルガリト・ヨンによって継続して調査されている。ラス・シャムラは、シリア沿岸部に位置する遺跡のなかでも、現在まだ調査が継続して行われている遺跡であり、極めてその重要性が高いのである。

シェイファー, クロード・フレデリク-アルマン

Schaeffer, Claude F.-A. (1898-1982)

1898年、ドイツ占領下のアルザスに生まれる。ストラスブルグ大学で考古学を修めたあと、ストラスブルグ博物館に勤務する。彼はフランス中部のグローゼ(Glozel)遺跡出土とされるフェニキア文字碑文を贋作と見抜いた。そのことが、ルネ・デュッソー(René Dussaud)の目にとまり、彼のフィールドであるシリアでの研究に携わることになる。

1929年から本格的に開始したラス・シャムラ（ウガリト）の発掘の間、第2次世界大戦中は、ロンドンで暗号解読の仕事に従事するも、戦後は考古学者としての活動を再開している。

彼の戦後の調査でラス・シャムラと同様に注目されるのが、キプロス東岸に位置するエンコミの調査である。彼は、戦前、既に発見していたエンコミを、本格的に1946年から調査し、その調査は1971年まで行われた。

ラス・シャムラとエンコミで彼が行った調査・研究は、後期青銅器時代の、ギリシャ世界をも含めた、古代オリエント世界でも最も華やかな時代の研究の礎になった。(A. H.)

13 Sidney Smith, *The Statue of Idri-mi* (Occasional Publications of the British Institute of Archaeology in Ankara 1), London, 1949. 28.4×22.4cm (H120-s36)

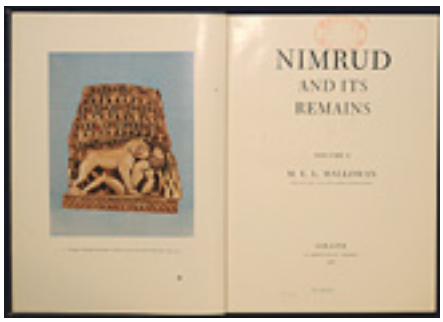
『イドリミ像』

紀元前15世紀前半のアララハ王イドリミの石像（高さ約103センチ）に刻まれた104行からなる碑文を写真・手写・翻字・翻訳により公刊したもの。この碑文は1人称でイドリミ王の波乱に富んだ生涯を回顧している。それによると、もともと彼はアレッポの王族の出身であったが、この町を襲った「災い」（詳細不明）を逃れてシリア各地を流浪し、やがてアピルと呼ばれる無頼漢の群れに擁立されて挙兵、アララハを中心とするムキシュの地を支配下におさめ、ミタンニ（その頃メソポタミア北部に興隆したフリ人の王国）に服属する代わりにその地方の領有を認めさせることで、名実ともに王になったという。亡命生活に入ってから王位に就くまでの曲折に満ちた経緯の描写の詳細さは他の碑文に例を見ず、間違いなく古代オリエント世界における自伝文学の傑作に数えられる。しかし、実はイドリミの子ニクメパが父の死後に作らせた偽作であるとする見方が有力である。

アララハ

オロンテス川東岸、現在のトルコとシリアの国境付近に位置するテル・アチャナと同定される遺跡。1937-39、46-49年にレナード・ウーリー（1880-1960）の指揮のもとに発掘が行われ、紀元前三千年紀半ばから紀元前1200年頃にまで及ぶ計17の層が確認されている。そのうち第7層（前17世紀頃）と第4層（前15世紀頃）からは500余点にのぼる楔形文字粘土板文書が発見された。主に契約書や住民登録簿、食料支給記録からなるこれらの文書は紀元前2千年紀のシリアにおける社会・経済事情を解明する上で逸すべからざる史料をなす。（T. S.）

14 M. E. L. Mallowan, *Nimrud and its Remains*, vols. I-II and folding maps, plans and sections, London, 1966. 31.6×23.0cm (H220-m17)



『ニムルドとその遺跡』

本書は、イギリス人考古学者マロワンの総指揮のもと、1949年から1963年にかけてニムルドで行われた発掘の調査報告書である。マロワンによるニムルドでの調査は、紀元前１千年紀の新アッシリア帝国期の遺構に集中している。

マロワンによって調査された主要な遺構は、遺跡南西部に位置するアクロポリスに「北西宮殿」、「代官の館」、「焼失宮殿」、「ナブー神殿」などがある。しかし最大の成果といえるのは、遺跡南東部に位置する「シャルマネセル（3世）の要塞」の検出である。本報告書では、当該遺構が3つの中庭と武器庫と思われる倉庫とから構成されていると報告している。

出土遺物には、土器、石製容器、青銅製品や粘土板文書、楔形文字の刻まれた王像などがあるが、最も注目すべきは大量に出土した象牙製品である。これらは極めて精巧に彫刻されており、当時の文化の一端を我々に垣間見せてくれる。

本報告書では、以上のような遺構、遺物が体系的にそして詳細に分析されており、その成果は該期の考古学的、文献学的研究に多大な貢献をした。

ニムルド

ニムルドは、現在イラク北部、モスルの南東約35kmのチグリス河東岸に位置する。当該遺跡は約360haを測り、その南西には7.5kmに及ぶ城壁に囲まれたアクロポリスを有する。

ニムルドはハラフ期やウバイド期など先史時代の生活痕跡も確認されているが、紀元前13世紀にアッシリアの重要な拠点となり、紀元前9世紀に新アッシリア帝国の首都カルフとされ、栄華を極めた。旧約聖書の創世記にカラフとして言及されていることからも、その繁栄を窺い知ることができる。紀元前612-4年に東方のメディアや南方のバビロニアによって破壊され廃墟と化すが、ヘレニズム期にも小規模な居住があったことが確認されている。

19世紀中葉から本格的な発掘調査が開始され、1845年に始まる一連のレヤードによる発掘調査を嚆矢とし、1879年のラッサムの調査まで継続された。しかし、その後2回の世界大戦をはさみ発掘調査は中断され、マロワンの発掘調査は戦後のニムルド調査の大きな画期となった。その後、1990年のムザヒム(Muzahim Mahmud)の調査を経て現在に至っている。

マロワン，マックス・エドガー・ルシアン
Mallowan, Max Edgar Lucien（1904-1978）

オックスフォード大学で文学博士を取得後、1925年から1930年までウーリーの下でウルの発掘に従事する。その後、ニネヴェやアルパチアで発掘調査を行った後、フィールドをシリアに移し、ハブール、バリーフ川流域の踏査などを、精力的に行う。シャガル・バザルでのアッシリア王シャムシ・アダドの粘土板発見や中期青銅器時代の標式遺物であるハブール土器の設定、テル・ブラクでの「ナラム・シン神殿」の調査は、古代オリエント学に多大な影響を与えており、その功績は極めて大きい。ニムルドの調査では1949年から1957年まで現場で指揮を執っていたが、当調査がマロワンの大規模な発掘調査としては最後となった。なお、彼の妻はウルの発掘で知り合ったミステリー作家アガサ・クリスティーである。（A. H.）

15 D. Hawkins, *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*, vol. I: *Inscriptions of the Iron Age*, Part 1-3, Berlin ; New York, 2000. 31.6×23.9cm (227.6-H45)

『ルウィ語象形文字碑文集成，第1巻：鉄器時代』

ヒッタイト王国滅亡後、ヒッタイト系住民によりトルコ東部、北シリア、北メソポタミア各地に形成された新ヒッタイト系国家と呼ばれる多数の中小国の君侯が残したルウィ語象形文字文書の集成。前1200-700年に由来し、石製記念碑、金属板、印章などに刻まれた250点を越えるこれら碑文は、ロンドン大学のデイヴィッド・ホーキンスにより体系的に研究され、写真、手写、翻字、翻訳に詳細な言語学的、歴史地理学的注釈がつけられ、この１巻（３冊組）に集成、出版された。

ルウィ語象形文字

19世紀には、今日ルウィ語象形文字として知られている象形文字で書かれた石碑がシリア北部やアナトリアに見られることが欧米の研究者に指摘され、すでに旧約聖書の「ヘテ人(ヒッタイト人)」との関係が推測されていた。今日までの研究により、ルウィ語象形文字碑文はかなり正確に理解されるようになった。

ヒッタイト王国では、主としてヒッタイト語をメソポタミア起源の楔形文字で粘土板に書くことで多くの記録が残される一方、石碑や印章にはヒッタイト語に近似したインド・ヨーロッパ語であるルウィ語が象形文字で記された。ヒッタイト王国滅亡後、楔形文字ヒッタイト語を書く伝統は廃れたが、新ヒッタイト系国家において建設記念碑を中心としてルウィ語象形文字碑文が多数書かれた。（S. Y.）

楔形文字の解読過程

有　賀　　望

はじめに

21世紀を生きる私たちが、遥か往古のメソポタミアの歴史を知ることができるのは、文字が存在したからである。音による言葉は瞬間的に消滅するのに対して、文字による言葉は時代と空間を越えることができるのである。しかし、余りにも長い時代を超えた文字は最早使用されることもなく、その文字に対する知識すら失われてしまった。楔形文字はこうした「失われた文字」であった。ここでは、この失われた文字の解読という偉業の過程を一瞥したい。

楔形文字の発見

楔形文字の解読過程は、ドイツのギムナジウムの教師G.F. グローテフェント（1775-1853）と、イギリスの東インド会社将校にして、学者であり陸上競技選手としても知られるH.C. ローリンソン（1810-95）の両名を除いて語ることはできない。しかし、この両者に帰せられる解読の偉業は、数多くの先行研究の集大成に拠って初めて可能になったのである。17世紀以降、西洋は多くの有能な人材を中東へと送り込んだ。彼らの成果は二人の天才に為すべきことをさせるに十分な土壌を提供したのである。

楔形文字の存在は、ポルトガル人A. グヴェアによる記述（1611年）を嚆矢に、中東の駐在員や旅行者らによって西洋社会へと紹介されるようになったが、当初はそれが文字であるのか装飾であるのか明らかではなかった。今日「楔形文字」を指す用語となっているcuneiformを、ラテン語のcuneus（楔）とforma（形）から作り出し、ペルシアに関する書物（1700年）で発表したイギリスのT. ハイドもまた、これが装飾であると考えたひとりであった。楔形文字が明確に文字であると認識した人物の中で重要なのは、デンマークのC. ニーブールである。彼はペルセポリスに旅行した際に楔形文字を手写し、これを公刊した（1778年）。ニーブールの手写はそれまでのものと比べて極めて正確であり、彼の手写がその後の楔形文字解読の基礎となった。

解読の前段階

ひとたび材料が揃えば、あとは解読するのみであったが、これが容易なことではなかった。なぜならば文字の解読には、その文字がアルファベットであるのか、漢字のような表語文字であるのかという問題と、その文字で記述された言語が何語であるのかという問題が並存するからである。前者の問題に関して、ペルセポリスの碑文には三種類の異なる文字が存在することがニーブールによって既に指摘されていた。このうち文字数の最も少ない文字（42字）を彼は賢明にもアルファベットであると考えたのである。彼はまた、楔形文字が左から右へと読まれることも見抜いた。その後、ドイツのO.G. テュクセンはこの文字を使用した文にしばしば現れる、上から下へ書かれる一本の楔が語と語を分ける境界記号であることに気が付いた（1789年）。

一方、この42字の文字で記された言語が何語であるのかという問題に関して、デンマークのF. ミュンターが、ペルセポリスの遺跡を紀元前5、6世紀のアケメネス朝ペルシア時代のものであるとしたことは極めて重要であった（1789年）。というのも、彼の考察が正しければこの文字は古代ペルシア語を記したものであり、言語としての古代ペルシア語の知識は、ペルシア語で書かれたゾロアスター教の聖典であるアヴェスタを中東で学んだフランスのA. デュペロンによって西洋にもたらされていたからである。

解読の方法論

さて、グローテフェントの登場の前に、失われた文字の解読の方法論をここで明らかにしようと思う。文字の解読は、ヒエログリフにおけるのと同様に、まずは固有名詞から行われるべきである。これはかのG.W. ライプニッツが1714年の書簡中で明らかにしたことであるが、固有名詞であれば何語であれ、ほぼ同様の音を持つはずだからである。これによりいくつかの文字が明らかになれば、次は一般語彙を、そしてその語彙の文法的変化を考察するのが、文字の解読の王道である。

解読の第一歩

錯綜した個々の情報を結びつけ、楔形文字解読の確実な一歩を踏み出したのが、G.F. グローテフェントであった。彼もやはりペルセポリスの楔形文字のうち字数の最も少ない文字を選び、これが左から右へと書かれ、アルファベットであり、古代ペルシア語であるという前提から開始した。更に彼は、フランスのA.I.S. ドゥ・サシが明らかにしたササン朝ペルシアの碑文の形式を参考にした。それは王の名と称号を記す際のおきまりの形式で、「[人名]、大王、王の王、[人名]王の子（[ ]内は固有名詞）」というようなものであったが、グローテフェントは、ササン朝の王が古代の形式を踏襲しており、この形式はアケメネス朝の碑文においても同様であると考えたのである。果たして、彼はニーブールの手写の中に固有名詞に続いて繰り返し現れる「王」と思われる単語を見出したのである。

グローテフェントの慧眼はこれに留まらない。彼はいくつかの碑文を考察する中で、「X　大王　王の王　Zの子」と「Y 大王　王の王　X王の子」という二つの碑文に着目した。彼はここからひとつの系図を導き出した。すなわち「Zの子X王、X王の子Y王」という系図である。

グローテフェントは、Zに王号がつかないことから、X王が王朝の創始者であると考えた。ここで彼がギリシア語の教師であったことが幸いした。彼はペルシア王の系譜をヘロドトスから知ることができたのである。王朝の創始を考慮すると、XとYの可能性があるのはそれぞれ、①キュロスとカンビュセス、②ダレイオス1世とクセルクセス1世、③ダレイオス2世とアルタクセルクセス2世、の三通りの系譜であった。グローテフェントは、XとYの頭文字が異字であることから頭文字が同じ文字である①は除外し、XY共に7文字であることから、明らかに名前の長さが違う③は除外し、組み合わせは②であることを突き止めた。これによりいくつかの文字と音価の同定が行われ、ここにペルシア語楔形文字解読の足掛かりが築かれた。それはやはり固有名詞からであったのである。余談になるが、グローテフェントのこの解読の成果は1802年、ゲッティンゲン学士院に論文として提出されたものの、彼が一介のギムナジウム教師であったため、その功績は20年もの間正当に評価されないままであった。

ペルシア語楔形文字からアッカド語楔形文字へ

グローテフェントの後、他の研究者によって楔形文字の解読は更に進められた。中でもH.C. ローリンソンは特筆すべき人物である。グローテフェントがペルシア語楔形文字解読の一歩を踏み出した人物であるとすれば、ローリンソンはペルシア語楔形文字解読の完了をもたらした人物であった。ローリンソンの業績で重要なものは、イランのベヒストゥーンの断崖にある碑文の手写と翻訳である。この断崖に刻まれた碑文は400行に及ぶ長文であり、ローリンソンは正に命懸けで崖によじ登り、これを写し取ったのである。彼以前に翻訳された碑文がせいぜい数行のものであることを考えれば、このように長大な文章の翻訳を可能にした彼の解釈力は、正に天性のものというより他にない。1846年以降数年にかけて発表されたローリンソンの研究により、ペルシア語楔形文字の解読は完了したのである。

ペルシア語楔形文字の解読は終了したものの、ペルセポリスやベヒストゥーンの碑文は前述の通り、三種類の文字で記されていた。すなわち、あと二種類の文字の解読が残っていたのである。第二の文字は文字数が113文字のもので、今日これはエラム語楔形文字と判明している。ここでは、文字数が優に500を超える一番難解な第三の文字に着目したい。なぜなら、この文字こそがメソポタミアで二千年もの間使用され続けたアッカド語楔形文字であり、この文字の解読なくして楔形文字の解読を語ることはできないからである。

アッカド語楔形文字は、ベヒストゥーン碑文におけるごとくペルシア語楔形文字との対訳が存在していたため、定石通り、対応する固有名詞の読み方から解読が試みられた。しかしアッカド語楔形文字の場合、固有名詞で明らかになった音価を他の箇所で現れる同じ文字に当てはめるという、他の文字の解読において効果的であった作業は用をなさなかった。そもそも同じ固有名詞であっても、箇所によって文字数が異なっている場合さえあった。問題はアッカド語楔形文字の難解な表記方法にあったのである。

アイルランド人E. ヒンクスは、アッカド語楔形文字が表音文字と表語文字を併用していることを指摘した(1847年)。また彼は、人名や神名の前にそれぞれある楔が一貫して記述されていることを指摘した。これは後に「限定符」と呼ばれるが、ペルシア語楔形文字のように語と語が境界記号で区分されていないアッカド語楔形文字を解読する一助となった。更に彼は、同一の文字が表音文字としても、表語文字としても、限定符としても使用されていることを指摘した。また上述のローリンソンが、ひとつの文字が何通りもの音価を保持していることを指摘した（1851年)。ドイツのユダヤ人J. オッペールはひとつの文字が何通りもの語に対応していることを指摘した（1855年)。例えば、「神」という語を表す文字は「空」という語を表す文字でもあり、またan、ilといった音価を持つ文字であり、更に神名の前に書かれる限定符でもありえたのである。この文字の解読のためには、これら全ての可能性を洗い出さねばならず、これは極めて困難な作業であった。

この難解な文字の解読は、しかし、漸次的に進められた。特筆すべきは、古代人が作成した辞書テクストの発見であろう。これは、イギリスのA.H. レヤードがニネヴェの発掘で発見したアッシュル・バニパル図書館から出土したもので（1845年)、ある文字が保持する音価とその文字に対応する語を記したものである。1857年、ローリンソン、ヒンクス、オッペール、そしてイギリス人H.F. タルボットの四名は、別々にティグラト・ピレセル１世の碑文の翻訳を試み、イギリス王立アジア協会の審査の下に比較したところ、彼らの翻訳は大筋で一致しており、ここにアッカド語楔形文字の解読の完了が宣言されたのである。

おわりに

上記の他にも楔形文字を使用する言語は多い。ただ、それらはアッカド語楔形文字と同じ文字を使用しており、問題はむしろ言語の解明にある。例外としてウガリト語楔形文字が存在するが、この解読過程は別の執筆者に委ねられる。いずれにせよ、ペルシア語楔形文字に始まりアッカド語楔形文字へと至る楔形文字の解読により、私たちは膨大なメソポタミア史の史料を入手した。私たちは「失われた文字」の解読により「失われた歴史」を取り戻したのである。

旧約聖書と周辺オリエント世界

杉江　拓磨

旧約聖書は歴史書か？

かつてある著名な神学者が「旧約聖書は歴史の書である」と言ったそうです。旧約聖書が、自らたどった歴史の中に神からの語りかけを聞きとろうとしたイスラエルの民の絶えざる探究の産物であるというかぎりにおいて、その言葉は正しいでしょう。しかし、その叙述が神とのあるべき関係をめぐる思索によって縁どられているために、過去の出来事を極力正確かつ客観的に跡づけようとする、今日われわれの考えるような意味での歴史書ではないということもまた、事実として受け入れなければなりません。

では、われわれは旧約聖書の記述を単なる宗教的な信条の吐露と見なして、これに史的信憑性を認めるべきではないのでしょうか。それとも、その史実性は無条件に信じるべきであって、これに疑いを投げかけることなどあってはならないのでしょうか。こうした問いに対してはいずれも、はっきり否と答えることができます。というのも、旧約聖書が描く古代イスラエルの歴史については、聖書のほかにもイスラエルをとり囲む周辺のオリエント世界から証言を得ることができるからです。

本稿では以下、旧約聖書が伝えるイスラエルの歴史を――紙幅の都合上、バビロン捕囚までに限定して――簡単にたどりながら、ところどころでこれに関連するオリエント世界の史料を紹介していくことにしましょう。

族長時代

旧約聖書冒頭の創世記によれば、牧羊者のアブラハムはカルデア（メソポタミア南部）からカナンの地（パレスチナ）へやって来て、その子イサク、孫のヤコブと3代にわたりカナン内外を放浪します。そして、カナンの地を飢饉が襲うと、ヨセフをはじめとするヤコブの子らはエジプトに逃れていきました。

このいわゆる「族長」たちの時代については、聖書の叙述が民話めいていることも手伝って、歴史的な位置づけが難しく、彼らに触れた史料の存在は知られていません。しかし、創世記15：2－3でアブラハムが僕のエリエゼルを相続人に指名しているように、子のない者が老後の面倒を見てもらう条件で養子を迎えて遺産を相続させるという慣習は、メソポタミアのヌジ文書（前15－14世紀）やシリアのエマル文書（前13世紀）からも知られており、族長たちの物語が歴史から完全に遊離したおとぎ話でないことを物語っています。また、エジプトのパピルス・アナスタシVI（前13世紀末頃）は、食料や牧草を求めてエドム（死海南方の地域）から牧羊者がエジプトに避難してきたことを伝えており、創世記が語るヤコブの子らのエジプト寄留にとって1つの類例を提供するものといえるでしょう。

出エジプトからダビデ・ソロモン時代まで

再び聖書によれば、エジプトに渡ったヤコブの子孫は数を増し、イスラエルの12部族をなすにいたりますが、苛酷な強制労働によって虐げられるようになりました。そこで、モーセの指導のもとイスラエルの民はエジプトを脱出します。シナイ山で神と契約を結んだ（出エジプト記、レビ記）後、40年間荒野を放浪した民はカナンの地にたどり着き（民数記、申命記）、モーセの後継者ヨシュアの指揮下にその地方を征服して、定着します（ヨシュア記）。定着生活に入ったイスラエルの民はたびたび外敵からの脅威にさらされるものの、「士師」と呼ばれる指導者が随時現れ、危機を乗り切ります（士師記）。しかし、やがて「海の民」の一派でカナン南西部に定着したペリシテ人が台頭するに及んで、イスラエルもサウルを初の王に擁立して、これに対抗しますが、その戦いのさなかに彼が敗死してしまいます（サムエル記上）。代わって王となったサウルの武将ダビデは優れた手腕を発揮して、ペリシテをはじめとする周辺諸民族を服従させ、その子ソロモンとの2代にわたってイスラエルに最盛期が訪れました（サムエル記下、列王記上1－11章）。

このように波乱に富んだイスラエルの形成・成長期とも呼ぶべき時代については、残念ながらオリエント世界の史料はほとんど沈黙しています。というのも、紀元前2千年紀末から1千年紀初めにかけてのこの時期は、メソポタミアやエジプトといった周辺の諸国の勢力が衰えて、そもそも残された史料自体が乏しい時代だからです。とはいえ、その乏しい中でもエジプトのファラオ、メルエンプタハ（在位前1213-1204）の碑文の中には「イスラエルは荒らされ、その種はない」という一節が見られ、その頃イスラエルがエジプトにとって一定の重要性を帯びた敵に数えられていたことを証言しています。

なお、やや時代が下りますが、イスラエル最北の遺跡ダンから発見された紀元前9世紀後半のアラム語碑文の断片には、ユダ王国の呼称として「ダビデの家」という表現が含まれており、ダビデ本人に直接触れたものではないにせよ、彼の実在を裏づける聖書以外の史料が知られています。

王国分裂からバビロン捕囚へ

さて、聖書の記述に戻ると、ソロモンの死後、王国はダビデの子孫を王に戴く南のユダ王国とダビデ家の支配を脱した北のイスラエル王国とに二分されて、シリアのアラムに、後にはメソポタミアの大国アッシリアに圧迫されるようになります。そうした危機の中、エリヤやイザヤに代表される預言者たちが神への信頼と悔い改めを同胞に説きますが、空しく、先に北王国がアッシリアに

よって、残った南王国もアッシリアに代わりメソポタミアに興ったバビロニアによって滅ぼされ、イスラエルの民は国家を失い、その少なからざる人々がバビロニアに捕囚として連れ去られていきました（列王記上12－22章、列王記下）。

この頃のイスラエル史に関しては、周辺オリエント世界からの史料がそれまでの時代に比べて急増します。例えば、列王記上14：25－26（歴代誌下12：2－8も参照）にはファラオ、シシャク（在位前945-924）が分裂後間もないユダ王国に侵攻したことが記されていますが、エジプトのカルナク神殿の壁面には、このとき征服したものとしてユダのみならず北王国領内の町々も含む地名の一覧が残されています。また、列王記下3章が伝えるモアブ（死海東方の地域）の王メシャによるイスラエルからの解放闘争については、彼が刻ませた「メシャ碑文」（前9世紀半ば頃）というモアブ側からの史料が存在します。北王国で革命を起こして王位に就いたイエフ（列王記下9－10章参照）は、アッシリア王シャルマネセル3世（在位前858-823）に貢物を納める姿が図入りで、当時アッシリアの首都があったニムルド出土の「黒色オベリスク」に記録されています。それから北王国滅亡後ほどなくアッシリア王センナケリブ（在位前704-681）がユダに攻め上って砦の町々を攻略し、ヒゼキヤ王のいるエルサレムも包囲したことが列王記下18－19章に報じられていますが、その際に砦の町の1つラキシュを征服したときの模様は、新都ニネヴェの宮殿を飾った「ラキシュ・レリーフ」が詳しく図示しています。さらに、センナケリブの碑文は「ユダ人ヒゼキヤ」を「エルサレムに籠の鳥のように閉じ込めた」と明記しています。

旧約聖書の独自性

以上、基本的に旧約聖書の記述に合致するような史料を見てきましたが、最後に聖書と齟齬するような史料の例もとり上げることにしましょう。パレスチナ南方のクンティレト・アジュルドとヒルベト・エル・コムで発見された「ヤーヴェとそのアシェラ」による祝福を祈願する紀元前8世紀の銘文がそれです。

ヤーヴェは、邦訳聖書では機械的に「主」と訳されていますが、イスラエルの唯一神の名であり、一方のアシェラはカナンで崇敬を集めていた嵐神バアルの妻に当たる女神です（列王記上18：19ほか）。旧約聖書ではバアルやアシェラを礼拝することはヤーヴェに対する「悪」とされ、ヤーヴェを礼拝するかそれら異教の神々を礼拝するかという二者択一が問題にされています（例えば士師記3：7、列王記上18：1－40）。ところが、これらの銘文は、実際にはアシェラをヤーヴェの配偶神にするといったような混交がその頃のヤーヴェ崇拝に見られたことを物語っています。さらに、紀元前14－13世紀に栄えたシリアの地中海岸の都市ウガリトからは数々のバアル賛歌が発見されていますが、その中には旧約聖書の詩編を髣髴とさせるものも含まれており、それらの賛歌がヤーヴェ崇拝のために受容されたことを示しています。

そうした現実にもかかわらず、旧約聖書はヤーヴェへの崇拝と他の神々へのそれを相容れないものとして描くわけですが、まさにここにこそ聖書記者たちの切実な関心を読みとるべきでしょう。つまり、先ほど見たような民族の衰亡という絶望的な状況の中にも神のはたらきを見失うまいとして、聖書記者たちはイスラエルの歴史を唯一の神であるヤーヴェからの背きとそれに対する裁きの歴史として理解したわけですが、彼らにとってイスラエルが神の怒りを招いた最大の罪悪とは、他の神々に代表されるヤーヴェ以外のものにより頼んだこと（たとえヤーヴェと合わせて頼るにしても）にほかならなかったのです。

このように、周辺オリエント世界からの発見は、単純に旧約聖書の記述の真偽を確かめるだけにとどまらず、その記述の底に流れるメッセージを浮き上がらせるためにも役立ってくれるのです。

考古学からみたウガリト文字成立の背景

長谷川　敦章

シェイファー(C. F.-A. Schaeffer)が、ミネト・エル・ベイダの調査に続いて次の調査地として選んだのは、近接するラス・シャムラ(Ras Shamra)であった。彼は、遺跡北東の最も高い地点でバアル神の神殿を検出し、続いてそこから東へ20m程の地点の調査を開始した。その結果、再び建築遺構が検出され、その一部屋から数十枚の粘土板文書が発見されたのである[1]。それは、1929年5月14日、ラス・シャムラでの調査開始から僅か5日目の大発見であった。

さらに、文書が検出された遺構に隣接した地点からは、74点の青銅製品が出土している。それらには、短剣、槍先、精巧な装飾を施した鼎などがあるが、注目すべきは、楔形文字の銘が刻まれた斧の発見であった[2]。

ところで、楔形文字が刻まれた粘土板の発見は、当時さほど驚くべき事ではなかった。実際、楔形文字で記されたアッカド語の解読作業は、既に19世紀中葉から行われていたからである。しかし、新たにラス・シャムラから出土した粘土板文書の検討がなされた結果、そこに刻まれていたのは、アッカド語を表記する楔形文字ではなく、全く未知の楔形文字であることが判明したのである。

このラス・シャムラ出土粘土板に刻まれた文字の解読は、ヴィロロー(C. Virolleaud)、バウエル(H. Bauer)、ドルム(H. Dhorme)らによって行われた。最初に解読を試みたのは、フランス人のアッシリア学者ヴィロローである。彼は、出土した粘土板文書をシェイファーから委ねられると、48枚の粘土板を模写し、即座に雑誌『シリア』に公表した[3]。

ヴィロローは、この文字がアルファベットであること、また書かれた言語がセム語であることという大前提を設けて解読作業を開始した。即ちアッカド語を記す楔形文字が約600字あるのに対して、これらの文字が30文字を越えないことから、この文字体系が既知の音節文字ではなく、アルファベットであると仮定したのである。さらに、文書中に記された文字が、3, 4個ずつ短い縦線で区切られている事から、殆どの語が3〜4字で形成されるとし、記されている言語はギリシャ語の類ではなく、ヘブライ語やフェニキア語などのセム語と仮定したのである。

ヴィロローは、斧に刻まれた [4]の6文字が、出土した粘土板の1行目にも書かれていることに着目した[5]。即ちこの粘土板の1行目には、 という文字を先頭に置いて、短い縦線の後に斧に刻まれた6文字が書かれていた( )。この粘土板文書が「アルファベットで記されたセム語の書簡」と仮定すると、多くのセム語の書簡と同様に、1字目の は前置詞"to"に相当するセム語の *l* の可能性が高い[6]。そこで、 を単一子音 *l* と暫定的に同定して、それを手がかりに解読を開始した。

次に彼は、粘土板文書から を含む全ての語を抽出した。その中から、多くのセム語で「王」を示し、かつ、*l* を含む語である*mlk*に相当するものを検索し、 が*mlk*であると考えた。3つめの作業として、多くのセム語で複数語尾に*m*が用いられることに着目し、*mlk*の第1字が再び語末に現れる*mlkm* ( )[7]の語末の*m*を、複数語尾と考え、 の音価が*m*であることの傍証とした。

次に名前に *l* を含む著名なカナンの神、「バアル」*bʿl* を、 に見いだした。さらに、*l* を第2字に有し、第1、第3字が同じである3文字語 に着目した。セム語ではこの綴り方は稀なため、唯一頻繁に使われる語である「3」*šlš*と推定し、第1、第3文字の音価を同定した[8]。このようにヴィロローは、*l* を機軸に他の文字の音価を決定していった。

一方で、ドイツ人セム語学者バウエルは、1930年4月22日にヴィロローの筆写を入手し、5日間で20文字の音価を同定した[9]。バウエルの解読方法は、第１次世界大戦時に暗号解読に従事していた経験を生かした、統計学的なものであった。やはり彼も、この言語はセム語であるという前提に立ち、語が接頭辞と接尾辞とで形成されていると仮定した。

彼の手法は、ラス・シャムラ出土粘土板文書の接頭辞、接尾辞、一文字で語となりうる単語(一文字語)[10]と、既知のセム語であるヘブライ語、フェニキア語の接頭辞、接尾辞、一文字語との比較である。まず、粘土板文書から該当する文字を全て抽出し、接頭辞、接尾辞、一文字語の全てにあらわれる、 と の2字を抽出した。そして、既知のセム語で接頭辞、接尾辞、一文字語の全てにあらわれる音価の*w, k, m*の3つのうち、kを可能性が低いとして、 と のどちらかが、*w*もしくは*m*のいずれかを示すと考えた。この解読方法に改良を加え、彼は一週間もたたないうちに、実に3/4の楔形文字の音価を暫定的に決定した。

ドルムは、エルサレムで研究をしていたフランス人のオリエント学者である。ドルムの解読は当初難航していたが、バウエルの成果をうけて、自分の研究成果に多少の修正を加えた。その後、バウエルと文通を行うことによって飛躍的に解読が進んだのである。

こうして、ラス・シャムラ出土粘土板文書の解読は、バウエルとドルムの研究により大きく前進したものの、最終的な決定打を出したのはヴィロローであった。1930年8月20日に、ラス・シャムラ第2次発掘調査で出土した粘土板文書を手に入れると、既に同定していた音価が正しい事を追認し、未知の文字の音価の同定作業を行った。彼は成果を手紙で、ルーヴル博物館古代オリエント部門の責任者、ドュッソー(R. Dussaud)に伝えると、その内容はパリの学士院で朗読された。そして、同年10月24日

にはヴィロロー本人によって解読の成果が披露された[11]。それとほぼ同時に、バウエルは解読成果を出版し[12]、またドルムも成果を雑誌『ルヴュ・ビブリーク』に発表している[13]。こうして 1929年に発見された未知の楔形文字は、僅か1年半あまりで解読がほぼ終了し、ウガリト文字と呼ばれるようになった[14]。ラス・シャムラはフランス隊が現在も発掘を継続しており、1,900枚を越えるウガリト文字粘土板が出土している[15]。

以上のような経緯で解読されたウガリト文字であるが、その最古の史料としては紀元前14世紀のウガリト国王ニクマド3世の治世期のものが確認されている[16]。ウガリト文字の使用の開始については、明確な史料がなく未だ詳らかではないが、少なくとも紀元前14世紀には広範に使用されていたことが窺える[17]。

ウガリト王国が栄えた後期青銅器時代には、国際的な公用語としてアッカド語が、古典語としてシュメール語が存在しており、ウガリトの書記官達もそれらの言語を、音節を示す楔形文字によって粘土板に記す訓練を受けていた。また、ラス・シャムラ出土の粘土板には、シュメール、アッカド、フリ、ウガリト各語の対訳語彙集があり、この語彙集ではウガリト語も音節文字で記されている[18]。つまり、ウガリトの書記官は母国語を表記するための、新たな文字体系は必要なかったのである。

では、なぜウガリト文字が登場したのであろうか。それは、もう一つの文字の伝統によるところが大きい。音節文字としての楔形文字の伝統がある一方、原カナン文字にみられる線形アルファベットの伝統もまた、ウガリトの南方で存在していた。この文字は、ワディ・エル・ホル(Wadi el-Ḥol)で発見された紀元前1900年頃のものが、最古の例にあたると考えられている[19]。

つまりウガリトの書記官は、紀元前2千年紀には流布していた原カナン文字を知るに至り、30に満たない文字数で言語を表記するシステムに魅力を感じたのであろう。すなわち、シュメール語以来の楔形文字を刻む伝統を持つ書記官が、アルファベット文字体系を粘土板上に記すために考案されたのがウガリト文字であると現在では考えられている[20]。

わずか30個の楔形文字からなるアルファベット文字体系をもつウガリト文字は、フェニキア線文字アルファベットとともに、原カナン文字のアルファベットとしての系譜をひいているのである。

こうして誕生したウガリト文字で記された言語は、北西セム語に属するウガリト語とその方言が殆どであるが、少数ながらアッカド語や非セム系で言語系統の不明なフリ語なども記されている。また、ウガリト文字が記された史料は、ウガリト王国内に存在する港湾都市ミネト・エル・ベイダや、王の離宮ラス・イブン・ハニ(Ras ibn Hani)、領域最南端域にあるテル・スカス(Tell Sukas)で検出され、さらに南方では、テル・ネビ・メンド(Tell Nebi Mend, 古代名カデシュ)、カミド・エル・ロズ(Kamid el-Loz, 古代名クミドゥ)、サラファンド(Srafand, 古代名サレプタ)、ガリラヤ湖の東方のタボル(Tabor)山近郊、テル・タアナク(Tell Ta ʻanak)、そして死海の東方ベテ・シェメシュ(Beth Shemesh)でも出土している[21]。また、遠隔地では、キプロス南岸の都市ハラ・スルタン・テケ(Hala Sultan Tekke)にも出土例がある。

ところで、ウガリト文字の粘土板文書がキプロスから出土していることからも明らかなように、ウガリトとアラシア(現キプロス)とは極めて緊密な関係にあった。後期青銅器時代に入り青銅器生産が向上すると、アラシア産の銅の交易は東地中海規模で行われる。それは、エジプトのレクミラ墓の壁画[22]や、トルコ の地中海沿岸のウル・ブルン(Ulu Burun)やゲリドニア・ブルヌ(Gelidonya Burunu)沖で発見された沈没船の積み荷からも明らかである[23]。アラシア産の銅は、四隅が突出した50×30cm程の鋳塊として流通していたが、その鋳型は先述したウガリト王国内のラス・イブン・ハニからのみ出土しており[24]、銅の交易でウガリト国が果たした役割は極めて重要であったと考えられる。ウガリト王国は東地中海を舞台に活躍する交易船の寄港地であり、またメソポタミアと地中海とを結ぶ要衝でもあるため、ミケーネ、エジプト、キプロス、パレスチナ、メソポタミアなど様々な文化が交錯する地であった。それは各地から搬入された土器などの考古学資料や、様々な言語、文字で記された粘土板文書[25]の存在からも明らかである。

こうした多様な文化の坩堝から生まれたウガリト文字は、紀元前 12世紀初頭、ウガリト王国の崩壊とともに歴史からその姿を消した。

注】

1）この遺構は、現在“Masion/Bibliothèque du Grand-Prêter”と呼ばれ、文書庫であると解釈されている。Saadé, G., *Ougarit:Métropole Cananéenne, Lattaquié,* 1978, Yon, M., “Repartiotion et Contextetes de la céramique Mycenaean d′Ougarit”, Yon, M, V., Karageorghis, and N., Hirschfed, eds., *Céramiques Myceaneannes, Ras Shamra-Ougarit XIII,* Paris, 2000, etc..

2）Schaeffer, C., F.-A., “Les Fouilles de Minet-el-Beida et de Ras Shamra, (Campagne du Printemps 1929)”, *Syria* 10, 1929, pp.294-296.

3）Virolleaud, C., “Les Inscriptions Cunéiformes de Ras Shamra”, *Syria* 10, 1929, pp.304-310.

4）“rb khnm”「大祭司」の意。Lete, G. del Olmo and J. Sanmartín, *A Dictionary of the Ugaritic Language in the Alphabetic Tradition,* Part two [l-z], Leiden, Boston, 2003, p. 433”khn(I)”.

5）Virolleaud 1929, Pl.LXXI, no. 18.

6）ヘブライ語の ל 、アラビア語の ل に相当する。

7）Virolleaud 1929, Pl.LXX, no. 17, l. 11.

8）現在は、ウガリト語の「3」の音価は tlṯ である。Lete and Sanmartín 2003.

9）バウエルは6月4日付のドイツのフォス新聞に成果を公表した。そこで少なくとも20字を正確に解読したと主張したが、後の研究によりこの時点では17文字の音価のみが正しかったこと判明している。
Gordon, C. H., *Forgotten Scripts: How they were deciphered and their impact on contemporary culture,* New York, 1968, 津村俊夫訳 1979 『古代文字の謎－オリエント諸語の解読－』 社会思想社　240頁.

10）たとえば、ヘブライ語では ב “in”, ל “to”, מ “from”, ו “and”などであり、前置詞や接続詞などにみられる。

11）Virolleaud, C., “Le Déchiffrement des Tablettes Alphabétiques de Ras-Shamra”, *Syria* 12, 1931, pp.15-23.

12）Bauer, H., *Die Entzifferung der Keilschrift-alphabets von Ras shamra,* Halle, 1930として出版された。

13）Dhorme, É., “Un nouvel alphabet sémitique”, *Revue Biblique* 39, 1930, pp. 571-77.

14）解読過程の詳細に関しては、津村 1979 150-161頁; Craigie, P. C., *Ugarit and the Old Testament,* Grand Rapid, 1983, pp.12-22; 津村俊夫 2001「ウガリト文字」『言語学大辞典』（別巻　世界文字辞典）129-130頁を参照.

15）1995年にウガリト文字史料の集成集(KTU第2版)が出版されている。これには1384の公刊テキスト、529の未公刊テキスト、34の判読不可能な断片テキストが掲載されている。Dietrich, M., O. Loretz and J. Sanmartín, *The Cuneiform Alphabetic Texts from Ugarit, Ras ibn Hani and other Places,* KTU : second, enlarged edition, Münster, 1995.

16）KTU 41., 1.6, Dietrich, Loretz and Sanmartín 1995.

17）Millard 1979, p. 613.

18）Schaeffer, C. F.-A., *Ugaritica V,* Paris, 1968, p.230.

19）Naveh, J., *Early History of the Alphabet : An Introduction to West Semitic Epigraphy and Palaeography,* second revised edition, Jersalem, Leiden, 1987, 津村俊夫他訳 2000『初期アルファベットの歴史』230-231頁.

20）Millard, A. R., “The Ugaritic and Canaanite Alphabets-Some Notes”, *Ugarit Forschungen* 11, 1979, pp.613-616; 津村 2001, 130頁.

21）これらウガリトの南方で見つかっている粘土板には、ウガリト文字と同じ字体であるが、文字数（音素数）が少ない「短い楔形アルファベット」が刻まれている。Millard 1979, p.614.

22）Davies, N. de G., *The Tomb of Rekh- Mi-Re at Thebes,* New York, 1973.

23）Bass, G., *Shipwrecks in the Bodrum Museum of Underwater Archaeology,* Ankara, 1996, pp. 25-35; ibid pp.60-79.

24）Bounni, A., É. and J., Lagarce, *Ras ibn Hani, I, Le Palais nord du Bronze Récent, Fouilles 1979-1995, Synthèse Préliminaire,* Beyrouth, 1998, p. 142.

25）現在では、音節文字としての楔形文字で記された、シュメール語、アッカド語、フリ語、ヒッタイト語、楔形文字アルファベットで記されたウガリト語、フリ語、アッカド語、ヒエログリフで書かれたエジプト語、ヒッタイト象形文字で書かれたヒッタイト語、独自の文字で書かれたキプロス・ミノア語、そしてフェニキア語の文書が確認されている。Pardee, D., “Ugarit Inscription”, E. M. Meyers, ed. *The Oxford Encyclopedia of Archaeology in the Near East,* vol. 5, New York, Oxford, 1997, pp.264-266.

第 2 部

総　説

池　田　　潤

第２部で展示するのは古代オリエント世界の中でユダヤ人が書き残した文献である。今回の展示品の中では日本においても世界的にも最も知名度の高い文献であろう。便宜上、Ⅰ）旧約聖書（16-20）、Ⅱ）ユダヤ教（21-23）に分けてあるが、ユダヤ教においては両者の間に連続性がある。

Ⅰはいずれもユダヤ教のミクラ（聖書）である。16、17、20はユダヤ教徒の書記が筆写した写本（写真版）で、18と19は活版印刷されたミクラである。旧約聖書と呼ぶとキリスト教の経典というイメージが強くなり、Ⅱ（ユダヤ教）との間に断絶があるような印象を受けるが、それは誤った印象である。

ミクラはヘレニズム時代以前のユダヤ教の所産である。この時期のユダヤ教は神殿を中心として祭司（特に大祭司のツァドク家）が主導する宗教であった。前２世紀にハスモン家がツァドク家に代わって大祭司職に就くようになると、この体制がゆらぎ、数多くの新宗派が興った。そのひとつがパリサイ派である。パリサイ派は祭司と民衆の間に上下関係はないと主張し、大衆の間で圧倒的な人気を博した。彼らは祭司が独占してきた成文のミクラに対し、口伝の律法を重視した。当初は後者を口承で伝えることにこだわったが、紀元１世紀から２世紀にかけて口伝律法の編纂がおこなわれ、3世紀初頭に1冊の口伝集が完成した。これがミシュナ（22）である。こうして、ミクラとミシュナを経典とするラビのユダヤ教が成立し、今日に至っている。タルムード（23）はミシュナの注解である。

古くからの祭司たちは、ハスモン家によって大祭司職を追われ、パリサイ派の人気にも押されて、荒野に逃れた。その一派が結成したのがクムラン教団だと考えられる。彼らの書き残したミクラ（20）とそれ以外の文書（21）は死海文書と呼ばれる。詳しくは、「死海文書と旧約聖書」を参照されたい。

キリスト教もこの流れの中で成立したユダヤ教の新興宗派のひとつである。ラビのユダヤ教がミクラに加えてミシュナを経典としたのに対し、キリスト教は福音書やパウロ書簡を経典に取り込んでいった。新約聖書中で言及される「聖書」はユダヤ教の伝統に則してミクラを指すが、キリスト教徒は後に福音書やパウロ書簡を「新約」聖書、ミクラを「旧約」聖書と呼び替えた。こうして、ミクラはキリスト教文化圏において（新旧約）「聖書」の一部分とみなされるようになったのである。

なお、筑波大学には東京教育大学以来、「旧約」聖書学の伝統がある。その一端を「オリエント学と東京教育大学・筑波大学（言語編）」で紹介する。

16 David Noel Freedman, *The Leningrad Codex: A Facsimile Edition*, Grand Rapids, Mich., 1998. 33.6×28.7cm (193.1-F46)

ヘブライ語聖書全体が現存する最古の写本。サンクトペテルブルグ（旧レニングラード）のロシア国立図書館所蔵（アブラハム・フィルコビッチ・コレクション）。

奥付によると、この写本はアアロン・ベン・モーセ・ベン・アシェルが書いた手本から1008年にカイロでサムエル・ベン・ヤコブという書記によって書き写されたという。15世紀にダマスカスのカライ派シナゴーグに寄贈され、19世紀になってクリミアのカライ派のゲニザから発見された。発見したのはアブラハム・フィルコビッチというカライ派の商人・写本蒐集家であった。フィルコビッチはこの写本を購入し、サンクトペテルブルグ帝国図書館に売却した。1990年にペレストロイカの一環として外国人による撮影が許可され、待望の復刻版（本書）の出版が実現した。（Ｊ．Ｉ.）

17 Moshe H. Goshen-Gottstein, *The Aleppo Codex*, facsimile edition, Jerusalem, 1976. 45.5×35.5cm (193.1-Ma31)

この写本は10世紀前半に書かれ、エルサレムからカイロを経て14世紀末にアレッポに渡った。写本の奥付によると、アアロン・ベン・モーセ・ベン・アシェルが自ら書いた写本ではないが、彼が母音記号とマソラ注釈を付けたという。母音記号には細心の注意が払われ、多くの学者によって写本の手本とみなされていた。20世紀前半まで全文が良好に保存されていたが、1947年の反ユダヤ暴動の際に破損し、約1/4（創世記1:1から申命記28:26まで、および雅歌3:12から最後まで）が失われた。現在はエルサレムのイスラエル博物館に保管され、1976年に復刻版（本書）が出版されている。

ベン・アシェル家

８世紀後半から10世紀中ごろにかけて5代にわたってティベリアで活躍したマソラ学者の家系。モーセ・ベン・アシェル（第４代）が書いたカイロ・コデックスと、その息子アアロン・ベン・モーセ・ベン・アシェル（第５代）が母音記号とマソラ注釈を付けたアレッポ・コデックスを通して、彼らの研究成果をうかがうことができる。また、アアロン・ベン・モーセ・ベン・アシェルが書いた手本から1008年に書き写されたと言われるレニングラード・コデックスもベン・アシェル家の伝統を受け継ぐ写本と言える。（Ｊ．Ｉ.）

18 *Biblia Rabbinica*, facsimile edition, Jerusalem, 1972. 30.4×23.0cm (193.1-I11)

Biblia Rabbinica（ヘブライ語でミクラオート・グドロート）はヘブライ語聖書の印刷版で、ヘブライ語本文（中央の右欄）、アラム語訳（中央の左欄）、マソラ注釈（ヘブライ語本文の欄外）、著名なラビの注解（外周）を1冊に収める。

第1版（マソラ注釈なし）は1516-17年にヴェネツィアで出版されたが、20世紀にいたるまで決定版聖書として普及したのはヤコブ・ベン・ハイムによる第2版（本書の原版）である。さまざまな写本からマソラ注釈を丹念に集めて、収録した点が重要である。1906年にドイツでBiblia Hebraicaが出版された際に底本となったのもこのBiblia Rabbinica第2版であった。ダニエル・ボンベルグが印刷したため、ボンベルグ版聖書とも呼ばれる。本書はこのBiblia Rabbinica第2版の復刻版である。（Ｊ．Ｉ.）

19 K. Elliger, W. Rudolph, *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Stuttgart, 1977. 23.1×14.9cm (193.1-Ki79)

Biblia Hebraicaはシュトゥットガルトを本拠とするドイツ聖書協会が発行する印刷版ヘブライ語聖書である。「明らかな誤り、書記のミスや傷がない」校訂版ヘブライ語テキストを確立し、研究と教育に役立てるというR. キッテル（1853-1929）の方針に従い、1906年に第1版、1909年に第2版が出版された。キッテルのBiblia Hebraicaという意味で、BHKと略称される。キッテルの死後、BHKの全面改訂版が出ている。底本をレニングラード・コデックスに変え、A. アルト、O. アイスフェルト、P. カーレが全面改訂をおこなった。これが、国際的に高い評価を受けたBHK第3版（1930）である。

本書は、Biblia Hebraicaの第4版にあたる。底本は第3版と同じであるが、BHKが「明らかな誤り」を読み替えることに積極的だったのに対し、「なるべく書記の書き間違いを取り除かない」という正反対の編集方針をとった。違いを強調するために、Biblia Hebraica Stuttgartensia（略称：BHS）という新名称が採用された。現在、BHSは校訂版ヘブライ語聖書の決定版であり、ヘブライ語聖書の研究にとって不可欠のツールとなっている。（J．I.）

20 Timothy H. Lim, Philip S. Alexander, *The Dead Sea Scrolls electronic reference library*, Oxford, 1997. (193.02-L62-1) (電子資料)

死海文書（コラム参照）が最初に発見されたのは1947年である。1950年代に出土品の調査と公刊を担当する国際チームが発足したが、公刊は順調に進まず、未出版の文書に関する情報は門外不出となっていた。1991年になって、イスラエル考古局はようやく文書の写真を公開することを決め、1993年にBrill社からマイクロフィッシュ版の写真が出版された。本資料はその電子版である。3枚のCD（データCD2枚、セットアップCD1枚）とマニュアルからなり、2,700点の画像（300 dpi）を収録する。各画像は文献表、聖書引用索引、画像間のクロスレファレンスを収めるデータベースにリンクしており、各画像に関するさまざまな情報をクリックひとつで引き出すことができる。さらに、画像はズーム（1-300%）や回転（90度単位）が可能で、ブライトネスやコントラストの調整もできる。これらの機能を活用すると、マイクロフィッシュ版では判読できない文字まで読み取ることもできる。

イガエル・ヤディン Yadin, Yigael（1917-1984）

イスラエルの考古学者で軍人。1917年にエリエゼル・スケーニクの息子としてエルサレムに生まれた。1933年に自衛組織ハガナーに加わり、1940年代に同組織で主導的役割を果たした。イスラエル独立後、1949年から1954年まで国防軍の参謀長を務め、常備軍を再編し、国民皆兵制や予備役制を確立した。

除隊後は考古学の研究に没頭し、1955年に死海文書の研究で博士号を取得した。1955年からヘブライ大学で教鞭をとり、1963年に教授に就任。1970年には同大学考古学研究所の所長となった。ハツォル、ユダの荒野、マサダなどの大規模な発掘をてがけるとともに、発掘技術の進歩や出土品の整理・出版の組織化にも寄与した。

1976年までは政界に入ることを拒み続けていたが、同年に政党を結成して国会議員となった。この政党は1977年に連立政権に加わり、ヤディンは副総理に任命された。1981年に政界から引退し、研究生活に戻った。（J．I.）

21 E. L. Sukenik, *The Dead Sea Scrolls of the Hebrew University*, Jerusalem, 1955. 33.3×23.8cm (H120-s18), (H120-s19)

本書はエリエゼル・スケーニクが1947年にヘブライ大学のために購入した「イザヤ書断片」「戦いの巻物」「感謝の詩編」という3つの巻物の内容を写真入りで公表した書物である。スケーニクは購入した3つの巻物の解読と研究に没頭し、巻物のファクシミリ、翻字、注解からなる書物を書き進めていたが、病のために志なかばで他界した。彼の死後、ヘブライ大学は学長B. マザールを委員長とする遺稿出版委員会を組織した。N. アヴィガドがY. ヤディン（いずれも同委員会の委員）の助言をうけつつ遺稿を整理するかたちで、本書は速やかに出版された。スケーニクが最初に巻物を目にした時期の日記も抄録されており、スケーニクの興奮や揺れ動く心理をリアルに伝えている点も注目に値する。

エリエゼル・スケーニク　Eliezer Lipa Sukenik　(1889-1953)
イスラエルの考古学者。ポーランドに生まれ、1912年にパレスチナに移住。1914年から教育に従事し、1920-30年代にヘブライ大学の考古調査に参画。1935年にヘブライ大学講師、1938年に同教授（考古学）となる。数多くの発掘を指揮するかたわら、同大学のユダヤ古代遺物博物館の館長も勤めた。1947年に死海文書の購入に関与し、余生を死海文書の研究に捧げた。（Ｊ．Ｉ.）

22 *Mischnacodex Kaufmann*, faksimile-ausg., 2vols., Jerusalem, 1968. 30.5×23.8cm (199-Mi51)

ユダヤ教の伝承によると、モーセはシナイ山で成文律法（トーラー・シェビフタヴ）と口伝律法（トーラー・シェベアルペー）を授かったという。前者がいわゆるモーセ五書である。後者は成文律法の意味を解き明かす教えとして、千年以上にわたって口頭で伝えられた。口伝律法の編纂を本格的に始めたのはラビ・アキバ（50頃-135）で、紀元3世紀初頭にラビ・ユダ・ハナスィ（2-3世紀）がミシュナという口伝集を完成させた。
テーマ別に種子篇（ゼライーム）、祭日篇（モエード）、婦人篇（ナシーム）、損害篇（ネズィキン）、聖物篇（コダシーム）、清潔篇（トホロート）に分かれ、これらがさらに全63項に下位区分される。これらのテーマに沿って、ミシュナはハラハーとハガダーを伝授する。ハラハーはヘブライ語で「歩み」を意味し、ユダヤ人としてどう生きるべきかを具体的に定めた法規のことである。他方、ハガダーは「語り」を意味し、法規以外の教え（教訓、説話、たとえ話等）を指す。
本書はハンガリー科学アカデミー図書館所蔵のミシュナの写本（カウフマン・コレクションA. 50）を復刻した世界的にも貴重な資料である。（Ｊ．Ｉ.）

23 *Babylonian Talmud*, limited facsimile edition of 400 copies, Jerusalem, 1971. 34.7×25.0cm (199-B12)

「タルムード」はヘブライ語の「学ぶ」という動詞から派生した語で、ユダヤ賢者の知を結集した大著を指す。紀元5～6世紀にバビロニアで編纂された『バビロニア・タルムード』と紀元4世紀にイスラエルの地で編纂された『パレスチナ・タルムード』とがあるが、単にタルムードという場合は前者（全20数冊）を指す。
タルムードの各章はまずミシュナ（ヘブライ語）を引用し、これにアラム語で注解（ゲマラ「完成」）を付ける形式で展開する。16世紀にダニエル・ボンベルグがヴェネツィアで印刷版のタルムードを刊行した際に、『バビロニア・タルムード』についてはゲマラを中央に配置し、その周囲を後代の注釈で囲むレイアウトをとった。以後、このレイアウトはほとんどすべての印刷版タルムードで踏襲されたが、本書の原本はそれ以前に書かれたためボンベルグ版とはレイアウトが異なる。本書は1342年にソロモン・ベン・サムソンという人物によっておそらくフランスで書かれた写本の復刻版（限定400部）である。全文が現存するタルムード写本は他に存在しないため、非常に貴重な資料と言える。現物は、ミュンヘンにあるバイエルン国立図書館に所蔵されている。
（Ｊ．Ｉ.）

死海文書と旧約聖書

(池田裕『死海文書Q&A』ミルトス，2000からの抜粋)

Q　そもそも死海文書とは何ですか？

A　死海文書とは、死海北西部にあるワディ・クムランの洞穴で発見された大小800種以上の古い文書の総称です。

Q　死海文書はいつ発見されたのですか？ワディ・クムランの11の洞穴の文書は同じときに発見されたのですか?

A　死海文書は一度に発見されたわけではありません。最初の洞穴――これは第一洞穴と呼ばれます――での発見があったのは、1947年から48年にかけてのことでしたが、最後の第11洞穴から文書が発見されたのは1956年でした。

Q　死海文書を大別するとどのようになりますか?

A　800種を超える死海文書全体は、内容的に大きく4つに分類することができます。

まず最初に、全体の約4分の1が聖書の写本です。次は、外典あるいは偽典と呼ばれる書物で、全体の3分の1を占めます。第3は、聖書の注解書。第4は、これらの文書を書き残した、いわゆるクムラン宗団の教えとその共同体の規則、儀礼などで、これは全体のおよそ4分の1を占めます。

Q　死海文書はいつごろ書かれたのですか?

A　文書により違いますが、全体としては紀元前2、3世紀から紀元１世紀にかけて書かれたものです。

Q　死海文書の聖書写本には、旧約聖書も新約聖書も含まれますか?

A　旧約聖書だけです。(一部に、小さなギリシア語断片に記された文字と新約聖書の福音書の言葉との比較を試みようとする学者もいますが、明確な根拠に欠け、今後の発見に期待しなければなりません。)

現在の旧約聖書は39の書物から成っていますが、死海文書はエステル記を除く、旧約聖書の全ての書物の写本ないし断片を含んでいます。すなわち、38の書物です。写本の数は全部で200を超えます。

ここで注意しなければならないのは、旧約聖書とか新約聖書という呼び名はキリスト教が成立してからのもので、死海文書が生まれた時代にはまだそのような名前はありませんでした。ユダヤ教では、今日に至るまで「旧約聖書」という言葉を用いずに、ヘブライ語で「ミクラ」あるいは「タナフ」と呼んでいます。

Q　死海文書は全部ヘブライ語で書かれているのですか?

A　全部ではありません。ヘブライ語で書かれているのは死海文書全体の90パーセント弱。確かに多いのですが、アラム語で書かれたものが10パーセントあり、ごく一部がギリシア語で書かれています。

Q　エリエゼル・スケーニクの情熱とは？

A　1947年も終わりに近い11月のことでした。スケーニクはエルサレムのアルメニア人の古物商から、初期のヘブライ文字で書かれた写本断片を見せられました。彼はそれを見た瞬間、ヘブライ大学のために購入しようと決めました。

しかし、そのためにはベツレヘムに住む所有者のアラブ商人と交渉しなければなりません。パレスチナの政治情勢は、国連の分割案をめぐる投票を直前にして非常に緊迫していました。周囲の人びとは反対したのですが、スケーニクは出かけていきました。

写本は間違いなく前1世紀のものでした。それまで知られていた最古のヘブライ語聖書の写本より1千年も古いものであることが分かりました。驚くべき発見でした。

交渉は成立し、スケーニクは3つの巻物をヘブライ大学のために購入しました。

Q　スケーニク教授は、聖マルコ修道院にある巻物のことを知っていましたか?

A　彼は、3つの巻物を買った段階ではまだ知りませんでした。ですから、その後で、同じヘブライ大学図書館の職員から聖マルコ修道院にある古い巻物の話を聞いたときには大変びっくりしました。行動的な教授はすぐに聖マルコ修道院に電話して、サムエル大主教との交渉を計りました。

1948年1月、聖マルコ修道院の教区民であるキラズという人物が、スケーニクに巻物を見せる手はずを整えました。スケーニクが見たのは、まず、大きくて保存状態が非常によいイザヤ書写本、いわゆる「イザヤ書大写本」です。さらに、後に「ハバクク書注解」、「共同体の規則」、「外典創世記」の名で呼ばれることになる３つの巻物でした。

スケーニクはヘブライ大学で購入の意思があることを伝え、代金として4030ドルを提示しましたが、話は結局まとまりませんでした。スケーニクの落胆は大変なものでした。

Q　スケーニクが購入に失敗した後、4つの巻物はその後どうしました？

A　スケーニクが入手に失敗した聖マルコ修道院の4つの巻物は、エルサレム旧市街北面のヘロデ門を出たサラハ・ディン通りにあるアメリカ・オリエント学研究所の学者たちの手で研究されました。イザヤ書大写本が紀元前1～2世紀にまで遡ることなど、「死海文書」の評判は世界中に広まりました。

なお、このエルサレムのアメリカ・オリエント学研究所は現在、Ｗ・Ｆ・オルブライト研究所と呼ばれています。オルブライトは当時のアメリカにおける優れたオリエント学研究者であり、死海文書の発見が「現代における最も重要な発見である」ことをいち早く見抜いた学者の一人です。

Ｑ　どうでしたか？結果的に、イザヤ書大写本は、従来のヘブライ語テキストの読みと変わりませんでしたか?

Ａ　スケーニクがヘブライ大学のために購入したイザヤ書断片の読みは、従来のヘブライ語テキスト（マソラ本文）のそれとほとんど一致しましたが、このイザヤ書大写本の場合、細かな点での異読が目立ちました。そして、ちょっとしたテキストの読み替えが言葉や文章に微妙な変化をもたらします。

Ｑ　サムエル大主教は、大事なイザヤ書を手放したくなかったでしょうね?

Ａ　ところが、サムエル大主教は教会のための資金が必要になり、それを売るつもりでした。こうして、大主教は、イザヤ書など4つの巻物を持ってアメリカへ渡りました。しかし、買い手はなかなか見つかりませんでした。

1954年6月1日、大主教はついに新聞広告を出しました。そして、1ヵ月後、大主教はニューヨークのホテルでS・エスタリッジなる人物と会い、25万ドルで巻物を売却することに成功しました。巻物はアメリカのある蒐集家の手に渡ったはずでした。ところが、翌1955年、4つの巻物はアメリカではなくイスラエル国内にあると報道されたのです。

Ｑ　アメリカに落ち着いたはずの巻物がイスラエルに戻っていたのですか。驚きですね。どうしたのでしょう？

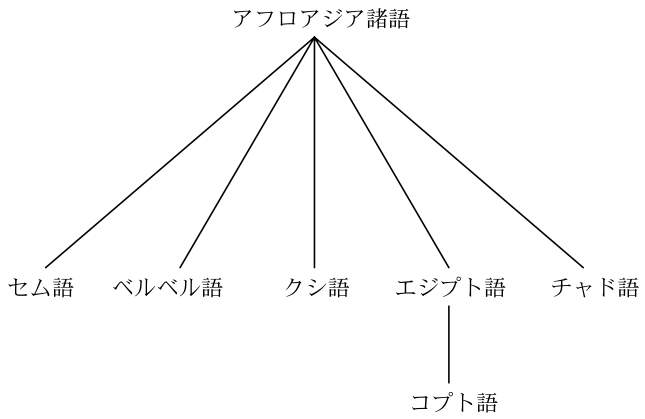
Ａ　実は、イガエル・ヤディン教授がアメリカに行ったとき、巻物の新聞広告に目をとめ、購入の決意を固めて奔走したのでした。彼は自分が前面に出るとまとまる話もまとまらないと思って、代理の人びとに交渉を頼んだのです。

父親のスケーニクはすでに2年前に亡くなっていましたが、彼の悲願であった4つの巻物は最後にはイスラエルに戻ってきたのでした。

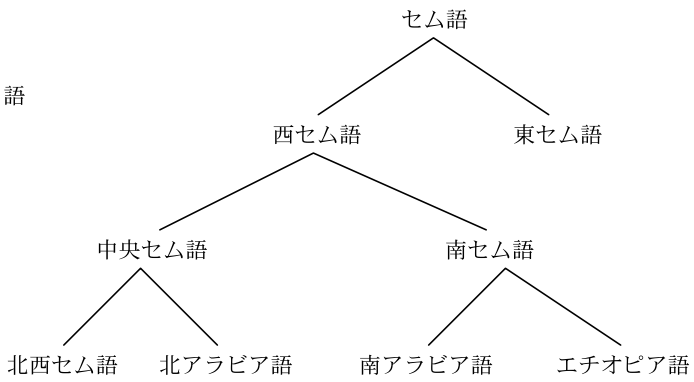
Ｑ　死海文書は今日どこに保管されているのでしょう?

Ａ　イザヤ書大写本、共同体の規則など第1洞穴で見つかった7つの巻物や神殿の巻物などの主要なものは、エルサレムにあるイスラエル博物館に保管、展示されていますが、多くの巻物断片はエルサレムの旧市街に面したロックフェラー博物館に保管されています。銅の巻物および20点ほどの巻物断片はアンマン博物館に保管、展示されています。

オリエント諸語の系統図【その１】（【その２】へ続く）



【図１】アフロアジア諸語



【図２】セム語族

オリエント学と東京教育大学・筑波大学

（言語編）[1)]

池　田　　潤

1982年以来、筑波大学一般・応用言語学研究室から『言語学論叢』という学術誌が刊行されている。発刊の辞によると、これは「東京教育大学文学部において、言語学の研究発表誌に用いられていた名称」を拝借して始まったという。東京教育大学の蔵書を収めた中央図書館1階の紀要コーナーに行くと、1959年に創刊され、第15号で終刊となった旧『言語学論叢』を閲覧することができる。そこには著名な言語学者の論文が収録されており、あらためて『言語学論叢』という看板の重さを思わずにはいられない。本学とゆかりの深い先生方の名前も見られ、新旧『言語学論叢』の連続性のようなものも感じさせる。

この連続性はセム語学の分野にも顕著である。東京教育大学～筑波大学は半世紀にわたりヘブライ語を専門とするセム語学者を輩出しつづけた日本で唯一の大学だからである。アラビア語の専門家は大阪外国語大学（1940-）と東京外国語大学（1961-）を中心に養成されてきたが、ヘブライ語の専門家を養成する講座はわが国には存在しない。その中にあって、東京教育大学～筑波大学で1954年以来（途中10年間の中断を経て）現在に至るまで、ヘブライ語をはじめとする古代オリエント諸言語の研究･教育が続けられてきたことは特筆に価する。

そこで、この小稿では東京教育大学～筑波大学における古代オリエント言語研究の半世紀を振り返ってみたい。

■関根時代（1954-1975）

東京教育大学から筑波大学にいたるセム語学の伝統（以下、筑波学派と呼ぶ）は関根正雄先生（2000年9月に他界）が東京教育大学文学部言語学科に着任した1954年に始まる。関根先生は東京大学文学部言語学科を卒業後、5年ほどドイツで旧約聖書学を学び、着任の時点では日本におけるヘブライ語研究の第一人者となっていた。それは、1941年に（おそらく、日本人として初めて）海外の学術誌にヘブライ語に関する論文を発表していることや、1958年に日本聖書学研究所の所長となっていることからも明らかである。

関根先生は、東京教育大学に着任してから1975年に定年退官されるまでの間、聖書学や神学を学外で講じる一方、セム語学を展開する場として『言語学論叢』（以下、『論叢』と省略）を選んだようである。『論叢』には「文法における心理と論理」（第1号）、「時間の言語的表出」（第3号）、「古典ヘブライ語ＢＧＤＫＰＴの音韻音的解釈」（第6号）、「北西セム語をめぐる最近の諸問題」（第11号）という4本の論文が発表されている。そこには関根先生のセム語研究に対するひとつの姿勢が現れている。それは、非西洋的な視点でセム語を分析することにより、セム語研究における西洋的伝統を超克するという姿勢である。関根先生の弟子たちがイスラエルやユダヤ系の大学に留学しているのも、この姿勢と無関係ではないと思われる。

関根先生の弟子と呼べるのは筆者の知る限り村岡崇光氏、笈川博一氏、守屋彰夫氏、塚本明廣氏の4名である。村岡氏はイスラエルに留学し、聖書ヘブライ語の「強調」構文を論じた学位論文をヘブライ大学に出して、Ph.D.を授与されている。その後、マンチェスター大学講師、メルボルン大学教授、ライデン大学教授を歴任し、現在もライデンを拠点に国際的に活躍している。笈川氏もイスラエルに渡り、ヘブライ大学で古代エジプト語とコプト語を学んだ。現在は杏林大学教授（中東学）だが、他大学でエジプト語やヘブライ語も講じる。守屋氏は米国ヒブル・ユニオン・カレッジにアラム語に関する学位論文を提出してPh.D.を取得し、現在は東京女子大学で聖書学を教えている。塚本氏は佐賀大学で教鞭をとり、古代エジプト語とセム語の専門家として活躍している。彼らのうち、『論叢』に論文を発表しているのは村岡氏だけであるが、他の3名の名前も名簿等に登場する。

■津村時代（1974-1990）

筑波大学が開学したのは1973年のことである。関根先生は筑波に移らず、1975年に定年を迎えるまで東京教育大学（1978年廃学）に残られた。関根先生の後継として村岡氏を呼び戻す計画もあったと聞くが、実現には至らず、ちょうど米国から帰国した津村俊夫先生が関根先生の推薦を受けて筑波大学でセム語学を教えることとなった。

津村先生は一橋大学商学部を卒業後、米国の神学校に留学し、そこからブランダイス大学の博士課程に進学した。当時、ブランダイス大学ではウガリト語の世界的権威であるサイラス・ゴードン先生（2001年3月に他界）が教鞭をとっており、津村先生はゴードン先生のもとでウガリト語と比較セム語学を修め、Ph.D.を取得していた。そのため、筑波にはヘブライ語を古代オリエント的背景のなかで捉えるという新たな伝統が成立した。筆者は津村先生のもとで人文学類から文芸・言語研究科まで学んだが、その間、津村先生からヘブライ語だけでなく、ウガリト語、アラム語、アッカド語、および比較セム語学を学ぶ機会に恵まれた。

津村先生は『論叢』には寄稿していない。そもそも日本語ではほとんど論文を書かない方だったが、『文藝言語研究』言語篇に4本の論文を書いている。「ヘブル語語彙研究に対するウガリト学の貢献について」（第1巻）、「ウガリト語研究(1)：ウガリト語のprimae waw動詞ＷＬＤについて」（第6巻）、「ウガリト語研究(2)：ウガリト語における連声（Sandhi）について」（第7巻）、「ウガリト語

研究(3)：ケレト叙事詩のプロローグについて」（第9巻）の4本である。

津村先生のもとでセム語学の薫陶を受け、中間論文を書いたのは依田泉氏、竹内茂夫氏と筆者の3名である。依田氏（常磐大学）は、その後、広島大学を経て米国エール大学に留学し、シュメール語に関する学位論文によりPh.D.を取得している。竹内氏（京都産業大学）は一貫して聖書ヘブル語の研究を続け、1999年にライデン大学文学部の客員研究員として村岡氏のもとで研鑽を積んできた。筆者は中間論文提出後、イスラエルに渡り、テル・アビブ大学でアッカド語の研究をおこない、Ph.D.を取得した。

この3名は『論叢』に次の論文を発表している。池田潤「＜Waw-Conversive現象＞理解のための作業仮説：談話文法の視点から」（第5号）、竹内茂夫「聖書ヘブル語における『独立不定形』と定動詞の語順」（第9号）、依田泉「Terms Expressing "Guarantee" in Neo-Sumerian Texts from Nippur」（特別号）、竹内茂夫「聖書ヘブル語のいわゆる目的語の標識´etから見た能格的階層の普遍性」（特別号）、池田潤「エマルのアッカド語における格標示」（特別号）。このリストは、ヘブライ語を中心として古代オリエントの諸言語を研究する学派が筑波に育ったというひとつの証である。

■筑波学派の現在

津村先生は1990年3月に筑波大学をお辞めになった。その後、しばし筑波のセム語学は途絶えたが、筆者が2000年4月に筑波大学に着任し、セム語学の筑波学派を引き継ぐこととなった。ヘブライ語を中心としてセム語研究をおこなうという筑波学派の伝統を守り、非西洋的な視点でセム語を分析するという関根先生の姿勢と、ヘブライ語を古代オリエント的背景のなかで捉えるという津村先生の方針を次の世代に伝えてゆく責任を感じている。さらに、一般言語学に根ざしたセム語研究を実践することにより、過去において独自の世界に閉じこもりがちだったセム語学をより開かれた研究分野へと変えてゆければと願っている。

詳しく述べる紙面の余裕はないが、上記の方向でセム語研究を続ければ、世界的に意義ある学的貢献をかならず果たすことができると筆者は信じて疑わない。現在、筑波には古代オリエントの言語に興味をもつ大学院生が全国から少しずつ集まってきている。彼らが筑波から世界に羽ばたく若き研究者となる日が楽しみである。

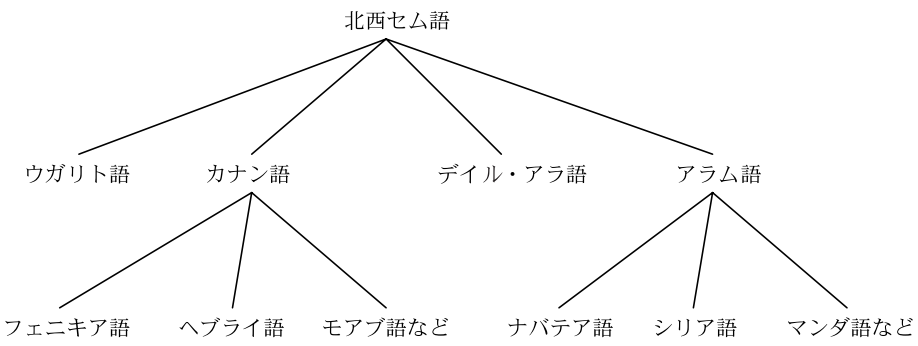
【参考文献】

Jun Ikeda, "Linguistic Studies: Approaching the ANE Languages from the Oriental Mind," *Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan* 36 (2001), 129-146.

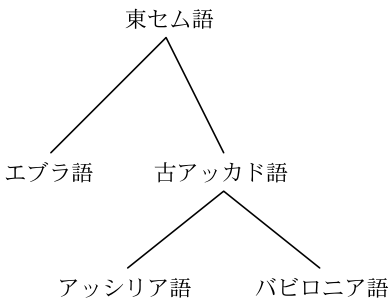
http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/ippan/（筑波大学一般言語学研究室のウェブサイト）

1） 本稿は、『言語学論叢』第20号（2001）pp. 19-22所収の「セム語学の筑波学派 ： 言語学論叢に見る古代オリエント言語研究の半世紀」を更新し、本冊子用に書き換えたものである。

オリエント諸語の系統図【その２】（【その１】より続く）



【図３】北西セム語



【図４】東セム語

第 3 部

総　説

秋　山　　学

第３部で展示される蔵書は、さまざまな領域に及んでいる。それらは以下のような小部門に分割され、順に

Ⅰ）エジプト　　Ⅱ）ペルシア　　Ⅲ）ギリシア・ラテン　　Ⅳ）シリア

となる。Ⅴ）オリエント教父は、これら諸地域における文化遺産を集約する位置にある。

まずⅠ）エジプト部門では、象形文字の解読史（24）とともに、考古学的発掘の成果（25、26）が明らかにされる。古代エジプト語は古代末期にコプト語へと変質し、さらにコプト文化は紀元後、Ⅴ）に含まれるコプト教父たちへと継承されてゆく。エジプト象形文字の解読に際しては、古代エジプト語の末裔であるコプト語の研究が不可欠であったため、その後のエジプト語学の発展を跡づける資料（27、28）とともに、コプト語の古典的研究書（29）もこのⅠ）エジプト部門に含めた。

次にⅡ）ペルシア部門では、ゾロアスター教の聖典写本の蔵書が紹介される（30）。紀元後226年に興ったササン朝ペルシアでは、このゾロアスター教が国教とされたが、ローマ帝国との対抗意識から、同朝では、キリスト教の異端とされたネストリオス派教会を保護する政策がしばらく採られた。このため、シリア語で残るネストリオス派の神学文献はⅤ）のうちに含まれるが、時代背景としてはこのⅡ）とも関連する。

Ⅲ）ギリシア・ラテン部門は、いわゆる「西洋古典文学」とされるギリシア・ローマの古典作品と、紀元後次第に量を増したキリスト教文献との双方を含む。写本の成立年代から、まず旧約聖書のギリシア語訳と新約聖書のギリシア語原典を併せ収めた「シナイ写本」（31）が、次いで大叙事詩人ホメロスの『イリアス』テキストを彩色画とともに収めた「イリアス・アンブロジアーナ」（32）が紹介される。ラテン語資料としては、紀元後800年までに筆写された古典・キリスト教双方の全写本のサンプル資料（33）が展示される。続いてギリシア・ラテン教父の古典的研究資料（34）が紹介されるが、彼らはⅤ）のオリエント教父たちと共通する位置にある。

Ⅳ）シリア部門では、まず大辞典（35）、続いて初代キリスト教会の殉教者たちに関する伝記的資料集（36）、それにキリスト教オリエント学の基盤として発展してきたシリア教父の作品全集（37）が展示される。この第3部で取り上げられるのは紀元後のキリスト教的シリアであり、同地域における前史は、第1部のアッシリア関係資料から明らかにされよう。またシリア語はヘブル語に近く、第2部で挙げられた諸資料からの連続でも捉えられる。シリア教父たちはⅤ）の中軸を担う人々でもある。

Ⅴ）オリエント教父部門では、上述のように紀元後の世界にあって、アッシリア、エジプト、エチオピアなどの古典的伝承文化を、その連続性のうちにキリスト教的立場から総括した教父たちの作品全集（38）が展示される。そのほか、ここにはアルメニア語やグルジア語、それにアラビア語で遺された文献も含まれる。オリエント世界の古代文化が、中世に向かってより広範な地域へと伝播してゆく次第が感じられよう。

24 Champollion, J.-F., *Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens,* Paris, 1827. 23.0×15.2cm (894.2-C32)

『古代エジプト人の聖刻文字体系提要』

1824年、フランス人エジプト学者ジャン・フランソワ・シャンポリオンによって刊行。この2年前に、ヒエログリフで記された人名の解読に成功したと発表していた彼は、続いて古代エジプト語の文法体系を明らかにすべく研究を進めた。この成果として出版されたのが本書である。コプト語を手がかりとし、性・数・人称、時制などを表わす文字が本書において解明された。サインリストなども付されており、初期エジプト学者にとって古代エジプト語習得の教本となった。

シャンポリオン、ジャン・フランソワ
Champollion, Jean-François（1790-1832）

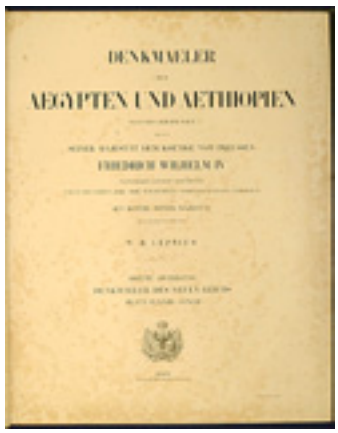
南仏ロット県フィジャック生まれ。幼い頃から古代史や古代語に興味を持ち、11歳頃には当時まだ未解読であった古代エジプト語の解読を志したと言われている。その基礎として、12歳でグルノーブルのリセに入学以降様々な言語を習得していった。特にコプト語に関する知識が解読への大きな布石となったといえる。ロゼッタ・ストーンに記されたギリシア語を、古代エジプト語の最終形態を留めるコプト語に翻訳し、デモティックとヒエログリフに対応させる作業を行っていった。1822年、ヒエログリフは表音文字と表意文字の混合であることをつきとめ、さらにロゼッタ・ストーン中の人名プトレマイオスとクレオパトラや、ほかの遺物に記されていた70人以上の王名の解読に成功した。1824年に*Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens*を刊行し、古代エジプト語の文法機能の一端を明らかにした。1830年にコレージュ・ド・フランスの考古学教授に任命されたが間もなく病臥し、翌31年、41歳の若さで死去した。彼の死後、兄の手によって発表されたシャンポリオンの研究成果は、現在に至るまでエジプト学の基となっている。

ロゼッタ・ストーン

縦114cm、横72cm、厚さ約30cm、玄武岩質。1799年、ナポレオン率いるフランス軍のエジプト遠征の際、ナイル河河口の西部デルタにあるエル＝ラシード村近郊の要塞修復中に発見された石碑。エル＝ラシード村のフランス名に因んでロゼッタ・ストーンと呼ばれた。表面には、プトレマイオス5世(B.C.205-180)の様々な業績の記録としてB.C.196年に出された「メンフィス勅令」が、3種の文字で記されている。上から、古代エジプト語であるヒエログリフ(聖刻文字・14行)とデモティック(民衆文字・32行)、そしてギリシア文字(54行)である。ヨハン・ダヴィド・オーケルブラド、トーマス・ヤングなど多くの学者がこの石碑を用いて古代エジプト語の解読を進め、最終的にシャンポリオンによってその突破口が開かれた。

1801年に締結されたアレキサンドリア条約第16条によって、所有権がフランスからイギリスに委譲され、現在はロンドンの大英博物館の至宝となっている。(M. Y.)

25 Lepsius,C.R., *Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien,* 12Bde., Berlin, 1849-59. 79.0×65.0cm (H120-l38)



『エジプトとエチオピアの記念物』

1849-59年刊行。レプシウス（Lepsius,C.R.）が、エジプトでの3年間に及ぶ調査旅行で集めた碑文や建造物の記録を整理して出版したもの。レプシウスが刊行した12巻と、彼の死後にナヴィル(Naville,E.)、ゼーテ(Sethe,K.)、ボルヒャルト(Borchardt,R.)らによって作成された5巻本の解説テキストから成っている。レプシウスが刊行した全12巻の概要は以下の通りである。第1・2巻は地誌と建築物の図版。第3・4巻は古王国時代。第5・6・7・8巻は新王国時代。第9巻はギリシア・ローマ時代。第10巻はエチオピア地域。そして第11・12巻には碑文がまとめられている。計894葉に及ぶ図版が載せられており、遺跡・遺物の精緻な描写と、碑文の正確な転写は、後進のエジプト学者にとって貴重な資料となった。

解説テキストの5巻本の概要は以下の通りである。第1巻は下エジプトおよびメンフィス周辺、第2巻は中エジプト地域のメディネト・エル＝ファイユーム、第3巻はテーベ、第4巻は上エジプト、第5巻は第2巻と同じくメディネト・エル＝ファイユーム地域についての言及である。解説テキストは生前のレプシウスが製作を意図していたものであったが、遺業を継いだ3人の学者達の手によって完成し、今日のエジプト学の発展に寄与する秀作となった。

レプシウス、カール・リヒャルト
Lepsius, Carl Richard（1810-1884）

1810年ナンブルグ・アム・ザレ生まれのドイツ人エジプト学者。1842年、31歳でベルリン大学講師の職にあったとき、プロイセン王ヴィルヘルム4世の命を受け、調査団を率いてエジプトで3年間の調査を行った。この調査旅行が成功した理由には、彼がエジプト語を学んでいたことと、ヨーロッパ各地のエジプト遺物を訪ね歩いて予備調査を行っていたことがあった。一行には画家や建築家が含まれており、主要な考古学遺跡を巡って、碑文や建造物の正確な記録をとった。その際にエジプトから持ち帰った15,000点に及ぶ遺物は、ベルリンにあるエジプト考古学博物館の主要収蔵物となっている。調査旅行の政府補助金を基にして出版された*Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien*『エジプトとエチオピアの記念物』は、彼の代表的著作物である。

アブ・シンベル神殿

ナイル河上流のアスワンから更に約250km南東に位置する岩窟神殿。新王国時代の第19王朝ラメセス2世(位前1279頃-1213頃)によって造営された神殿であるが、正確な建造年代は不明。アメン・ラー神、ラー＝ホルアクティ神、プタハ神と神格化されたラメセス2世を祀る大神殿と、ハトホル女神と王妃ネフェルタリのための小神殿から成る。砂に埋もれていたこの神殿は1813年に発見され、1817年にジョアンニ・ベルツォーニによって発掘された。1956年、アスワン・ハイダムの建設によって水没の危機に陥った際、ユネスコが主催するヌビア地域の遺跡救済キャンペーンにより、エジプト学者と各国が協力して移築を行ったことで世界中の注目を浴びた。
（M. Y.）

26 The Finding of Tut-Ankh-Amen's Tomb, 38.5×27.5cm (H120-e)

本書は、1922年に世界的なセンセーションを巻き起こしたツタンカーメン王墓の発見当時の様子を報道した*The Illustrated London News*のスクラップである。イギリスの考古学者であるハワード・カーターは、16年の歳月にのぼる発掘調査の末、1922年11月4日についにツタンカーメンの王墓をテーベの王家の谷で発見した。本書におさめられているもっとも古い記事は同年12月9日のものである。このとき、ツタンカーメンの黄金の棺が納められた最奥の部屋には、その存在が知られていながら発掘調査の手は及んでいなかった。本書には、1926年までの記事が収められており、当時の人々を魅了し続けた歴史的発見の経過を知ることができる。

東京高等師範学校は、1922年の9月から*The Illustrated London News*を定期講読している。本書表紙カバーに東京高等師範学校付属中学校図書という貼付が確認されることから、この新聞は同校の教材として高等師範から寄贈されたようである。その中でも、特にツタンカーメン王墓発見に関する記事をスクラップにした理由は判らないが、当時の日本においても人々の関心を大いに集めたことを物語っているのではないだろうか。本書には学術的な価値よりはむしろ、当時の世相を垣間見ることのできる面白さがあるといえよう。（M. F.）

27 Erman,A., *Neuaegyptische Grammatik*, 2. Aufl., Leipzig, 1933. 32.0×23.8cm (E700-e2)

『新エジプト語文法』

古代エジプト語の解読がシャンポリオンの研究（1822）に帰せられるとしても、古代エジプト語文法の体系的記述は19世紀末のエルマンの出現まで待たねばならなかった。エルマンの最大の功績は、ヒエログリフ書体で書かれた資料を古エジプト語（エルマンの古エジプト語には中エジプト語が含まれる）と新エジプト語とに二分したことである。古エジプト語文法の初版が1894年であるのに対して新エジプト語文法の初版が1880年であるから、エルマンの古代エジプト語研究の端緒は新エジプト語の発見と記述にあった。シャンポリオンが新しい時代の古代エジプト語（コプト語）の特徴を利用して古い時代の古代エジプト語（古典エジプト語）の研究を進めたように、エルマンも新しい時代のエジプト語を研究の基礎に据えていたのである。本学が所蔵する新エジプト語文法は1933 年に刊行された第二版である。初版は全400セクションであったが第二版は全847セクションから成り、内容が大きく増補されている。
（M. N.）

28 Gardiner, Alan Henderson, *Egyptian Grammar : Being introduction to the study of hieroglyphs*, London, 1957. 28.7×23.0cm (E700-g7)

『エジプト語文法』

エルマンに始まる近代的古代エジプト語文法の到達点がガーディナー卿の著した『エジプト語文法』である。初版（1927）から既に511ものセクションを持つ大著であり，その内容は第二版（1950）や第三版（1957）へと構成上の大きな変更点のないままに受け継がれた。『エジプト語文法』の第三版は現在でも古代エジプト語研究の必須文献として世界各地で読み継がれている。

このように本書は現在でも金字塔としての価値を有しているが，しかしながら古代エジプト語研究の学史を考える際に，第二版と第三版に付加されている若干の変更点を見過ごしてはならない。ガーディナー卿が提示した動詞述語文の主文のうち動詞語根が畳音する形態（いわゆる未完了形）があるが，それらの動詞形が通常の主文ではないとの学説を1944年に言語学者ポロツキーが発表した。ガーディナー卿はポロツキー論文に対する徹底的な反論を展開し（1944），2人の間で大きな学術論争へと発展した。だがガーディナー卿は，ポロツキー説に反論を示しつつも，ポロツキー説の一部を受け入れ，動詞語根が畳音する形態が通常の動詞文とはならない事例を認めるに至り，その部分に関する自説の変更を第二版で追加した（§440.5）。本学が所有するのは第三版であるが，第三版にも自説への訂正・追加が示されている。

ガーディナー　Gardiner, A. H. Sir（1879-1963）

イギリスのエジプト学者。早熟した研究者であり，十代の頃からバッジ，クラム，ペトリー，グリフィスらに感化され，教育を受けていた。最初の論文は15歳のときに著され，以後，古代エジプト語の文献学的や言語学を中心に，歴史学や考古学の研究をも行い，30冊ほどの著作と200本以上の論文を残した。主な著作には『エジプト語文法』（1927，1950，1957），『シナイの碑文』（1917），『古代エジプト語の固有名詞』（1947），『SpeechとLanguage』（1932）がある。（M. N.）

29 Polotsky, H. J., *Etude syntax Copte*, Cairo, 1944. 27.8×18.2cm (E700-p2)

『コプト語統語論研究』

コプト語の完了形，現在形，未来形，アオリスト形には，形態上有標なものと無標なものの二種類が存在し，前者は第一時制，後者は第二時制と呼ばれている。第一時制が通常の主文であることは多くの研究者が認めていたことであるが，有標な形態を持つ第二時制の機能が如何なるものであるのかは長いこと不明であった。この謎を解明したのがエルサレムの言語学者ポロツキーであり，それが本学所有のこの論文で提示された。ポロツキーの見解によれば第二時制は副詞要素に焦点を当てた「副詞焦点化構文」となるが，彼は同じテキストのギリシャ語版とコプト語版を対比させることによってコプト語の第二時制の謎を解明した。更に彼はコプト語の第二時制の起源が中エジプト語の畳音を呈する動詞形（ガーディナー卿の未完了形）であることを主張した。この見解がガーディナー卿との論争へと発展したが，ガーディナー卿の死後，畳音形に関するポロツキー説が世界各地で受け入れられるようになった。従ってポロツキーによるこの論考は，コプト語ばかりではなく，より古い時代の古代エジプト語に新たな時制を導入した学史上重要な論文として位置付けられる。

ポロツキー　Polotsky, H. J.（1905-1991）

チューリッヒ生まれのユダヤ人言語学者。ベルリンおよびゲッティンゲンのエジプト学科で教育を受け，23歳の時にエジプト第11王朝時代資料の文献学的研究で博士号を授与されている（1928）。彼の博士論文にはガーディナー卿から提供された未公開資料が含まれているなど，二人は私的に交流を持っていたが，後に両者は「副詞焦点化構文」の是非を巡り，大きな学術論争を展開した。1934年にイスラエルに移住し，ヘブライ大学言語学科の主任教授を務めるに至る。専門言語は古代エジプト語（コプト語を含む）やセム諸語を中心とするが，印欧語，アルタイ語の研究も手掛けており，特にコプト語とグラゲ語で優れた研究を残した。代表的な研究には『コプト語統語論研究』（1944），『グラゲ語についての覚え書』（1952），「古代エジプト語の時制」（1965）などがある。主な研究は『論文集』（1971）に収められている。（M. N.）

古代エジプト文明の発掘史および解読史の黎明と発展

山　中　美　知

ナイル河に抱かれた肥沃な土地に文明が築かれてから数千年、現代のエジプトには古代の繁栄を伝える遺跡や遺構が数多く残されている。そして、文明の一端を再現すべく各国の研究者達が研究を続けているのである。本稿では、発掘史と古代エジプト語解読史の黎明期を概観し、今日に至るエジプト学の命脈を辿ってみたい。

古代エジプト文明に関心を持ち、当地を訪れた旅行者の中で、まとまった記述を最初に残したのはヘロドトスであろう。彼は紀元前5世紀にエジプトを訪れ、遺跡や生活様式、宗教などを見聞し「河(ナイル)の賜物」(『歴史』II,5）というあまりに有名な言葉を残した。この頃のエジプトはすでに往時の勢いをなくしていたが、神殿などには豊富な史料が保管されていたと思われる。ヘレニズム時代の紀元前3世紀、エジプト人神官マネトは、このような史料をもとにエジプトの歴史を記述した。残念ながら彼の歴史書は現存しておらず、後世の著述家達の著作に断片的に引用されているだけだが、エジプトの王朝を30に分けるというマネトの方法は近代以後も受け入れられ、現在も採用されている。紀元前30年、女王クレオパトラ7世の自殺によってローマの支配下に入って以降、古代エジプトの文化は歴史の表舞台から徐々に消えていくことになる。神殿や居住跡は砂に埋もれ、古代エジプト語はコプト語の中に名残を留めるのみとなっていった。

その後の十字軍遠征や、イエズス会やドミニコ会などの修道士による東方への布教活動、ミイラや古代の装飾品などの流入により、ヨーロッパでエジプトへの関心が高まっていった。旧約聖書に登場するヨセフやモーゼが活躍した地であるエジプトは、キリスト教徒にとって想像力と興味をかきたてられるものであったのかもしれない。18世紀末頃からヨーロッパ各国の旅行家や外交官たちが数多くエジプトを訪れ、古物収集に熱中していった。

彼らは様々な場所を探検し、現代の我々から見ると発掘というより略奪に近い作業を行った。無論、中にはこのような状況に眉を顰める者もいたが、その嘆きの声は余りに小さく、遺物のエジプト国外への流出が止まることはなかった。

このような中で初めて学術的な調査を行ったのが、1798年のナポレオン率いるエジプト遠征隊に同行した調査団であったのは周知のことであろう。調査対象は地理、遺跡、動植物などの広範囲におよび、その記録は『エジプト誌』*Description de l'Egypte*（1809-22)にまとめられ刊行された。また、このナポレオン遠征での収穫にロゼッタ・ストーンの発見がある。これはプトレマイオス5世(B.C.205-180)時代の碑文であるが、3段に分けられた同一内容の銘文がそれぞれヒエログリフ（聖刻文字）・デモティック（民衆文字）・ギリシア文字で記されていたことに価値があった。この碑文を手がかりとして、古代エジプト語の解読という新たな試みが始まったからである。これ以前にも古代エジプト語に関する言及が皆無だったわけではない。しかしながら、紀元後3世紀以降忘れられたヒエログリフの正確な読み方を再構築することは容易ではなかった。まず、ロゼッタ・ストーンのギリシア語部分が翻訳され、次いで、古代エジプト語の部分の解読作業が始まった。フランスのドゥ・サシ（de Sacy, S.）やスウェーデンのオーケルブラド（Åkerblad, D.）らがギリシア語部分とデモティックの部分を比較する手法で解読に取り掛かったが、際立った成果は上げられなかった。続いてイギリスの物理学者トーマス・ヤング（Young, T.）が解読に着手した。彼は、デモティックはヒエログリフの変化した形であると考え、王名がカルトゥーシュと呼ばれる楕円形の枠の中に書かれていると発表した。そして、彼らの後にシャンポリオン(Champollion, J.-F.）が登場する。彼はコプト語の知識を生かして研究を進めていった。古代エジプト語では母音を表記せず子音のみを書き表していることをつきとめ、また、事象を区別する決定詞を発見していたことも特筆すべきであろう。シャンポリオンはロゼッタ・ストーンのみならず他の史料に記された王名を次々に解読し、さらに前述のような研究成果から古代エジプト語の文法体系を明らかにしようと試みた。これらの業績により、古代の文献を直接読むための門戸が開かれたのである。

ヨーロッパにおいて古代エジプト語の解読作業が進められていた当時､エジプトには各国の大規模な調査隊が先を争うようにして入国していた｡シャンポリオンも1828年から1829年にかけてロセッリーニ（Rosellini, N. F. I.）らと共にフランス・トスカーナ共同調査隊の一員としてエジプトに赴いている。プロイセンのレプシウス(Lepsius, C. R.）が1842年から1845年にかけて行った調査では、地図の作成や遺跡調査が行われた。彼はこれを『エジプトとヌビアの記念物』*Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien*（1849-59)にまとめあげた。この著作は多くのエジプト研究者にとってきわめて貴重な資料として用いられた。時期は前後するがイギリスのウィルキンソン（Wilkinson, Sir J. G.）にも触れておこう。彼は1821年から12年間エジプトとヌビアを旅行して多くの遺跡を発見し、テーベ周辺や王家の谷などで学術調査を行った。『古代エジプト人の風俗と習慣』*The Manners and Customs of Ancient Egypt*（1837)は彼の代表著作である。レプシウスをドイツにおけるエジプト学の祖とするならば、ウィルキンソンはイギリスにおけるエジプト学の祖であろう。フランス人では、マリエット（Mariette, A.）が1851年にセラペウムを発見し、1858年にはエジプト考古局の初代局長に任命され、次いでカイロ近郊のブーラークに自

身が収集した遺物を納める博物館を開館した。これが現在のカイロ博物館の前身である。マリエットの跡を継いだマスペロ（Maspero, G.）はブーラーク博物館館長とエジプト考古局局長を務めた人物で、「ピラミッド・テキスト」の刊行や1881年のデイル・エル＝バハリにおける王のミイラの隠し場所の発見などで知られている。

初めて科学的な発掘を行った考古学者としては、イギリスのピートリ（Petrie,W.M.F.）があげられる。エジプト考古学に寄与した彼の功績はきわめて大きい。先王朝時代から初期王朝時代の遺跡を発掘したほか、テル・エル＝アマルナを調査したことでも知られる。またS.D.法（継起編年法）と呼ばれる独自の編年法を考案して、先王朝時代の枠組みを作った。マスペロやピートリなどに師事したカーター（Carter, H.）は、1922年のツタンカーメン王墓発見によってエジプト学史に永く名を残すことになった。ほとんど手付かずだった少年王の墓の発見は、世界中の耳目をエジプトに集めた。今回の展示品の一つである*The Illustrated London News*の記事からも当時の熱狂ぶりが読み取れるであろう。

このようにエジプトで科学的な発掘調査が行われ、遺跡や遺物の略奪から学術調査・保存・修復へと関心が移っていった頃、古代エジプト語の解読は新たな段階を迎えていた。前述のレプシウスによるシャンポリオンの文法体系の改訂に始まり、幾人もの学者達が解読を進めていった。そして、エルマン（Erman, A.）、ガーディナー（Gardiner, Sir A. H.）、ポロツキー（Polotsky, H. J.）によって近代的な文法体系が大成されるに至る。彼らの業績に関する具体的な言語学的考察や代表著書の解説は、展示貴重書のコラムを参照して頂きたいが、彼らの努力によって、多くの史料が正確に解読できるようになったことと、初学者にとっても古代エジプト語の習得を目指すことが身近になったことは、繰り返し述べても許されるだろう。

ツタンカーメン王墓のように黄金で埋め尽くされたセンセーショナルな発見はないものの、各地で重要な調査や記録は行われていった。ドイツ考古学研究所やフランス東洋考古学研究所、シカゴ大学東洋学研究所など、緻密で高度な研究は我々に更なる刺激を与えてくれる。わが国でも戦後、大学や研究機関を中心にして、エジプトでの発掘作業が進められており、筑波大学も中エジプトのアコリスにおける発掘で高い評価を得ている。

本稿で取り上げた研究者やその活動は非常に概観的であり、この他にも多数の優れた研究者達がエジプト学にその足跡を残していることは言うまでもない。現在も、世界中で多くの研究者達がより専門的で高度な研究を行っている。そして、最先端の技術や知識を使いながら目指すのは、エジプトに魅せられた先達と同じように、古代エジプト文明との対話なのではないだろうか。今では遺跡となった神殿や居住区、墓を発掘し、そこで生きていた古代エジプト人の生活を再現すること、または、文献を紐解き、残された記録から再現を試みること、これらの作業を行なう時、我々は年月の隔たりを越えて古代との対話をしているように思う。今回の貴重本展示にあたって発掘史と解読史の一端を紹介することが、少しでも多くの方々にとって、その対話に耳を傾けて頂くための一助になれば幸いである。

古代エジプトの神殿に残る図像史料とその研究について

深　谷　雅　嗣

歴史研究において我々がイメージする古代文明の姿は、文字史料に加えて図像史料を目にすることでより鮮明なものとなる。古代エジプト研究者は、この点において他のオリエント地域の研究者よりも恵まれているといえるだろう。とういうのも、エジプトの乾燥した気候風土よって、多くの神殿や墓は現在まで良好な状態で保存されているからである。カイロ郊外のギザ台地にそびえるピラミッド以外にもエジプト中部のルクソール（古代名：テーベ）には、新王国時代（BC1550-1070年）に建造された神殿群や王家の谷に代表される岩窟墓群が現存している。また、ルクソールからスーダン北部にかけてギリシャ・ローマ支配時代（BC332-AD395年）に建造された神殿が多く現存しており、アスワン・ハイダムの建造による水没から神殿遺構を救出したユネスコの事業は有名である。日干しれんがで造られた居住家屋や宮殿と異なり、古代エジプトの神殿は耐久性のある石で建造されたために、良好な状態で現存する結果となった。

古代エジプトの神殿のすべての壁面は、彫刻が施されて彩色がなされた。装飾のテーマは主に戦闘場面、神殿儀礼場面、祭礼場面の3つに分類できるだろう。神殿の正面にそびえる塔門や神殿を囲む外壁には、外国への遠征の様子や敵に勝利する王の姿が描写されることが一般的である。訪問者や民衆が目にすることのできる外壁面には、対外的に支配者としての王の権力を誇示する装飾が施されたといえる。特に好まれた主題は、王が馬に牽かれた戦車に乗りながら、矢を放つ場面である。また、戦闘で拘束した捕虜の一団を王が率いる場面や彼らをこん棒で打ち据える場面も多く描かれ、その場合、征服した国や都市国家の名前のリストが付随することもある。ルクソールに現存するカルナク神殿の大列柱室の外壁（セティ1世とラムセス2世）やラムセス3世葬祭殿の外壁は、非常に規模が大きいことで有名である。

これに対し、神殿内部の壁面は、神殿内で行なわれた数々の儀礼の場面によって埋め尽くされている。個々の儀礼場面は、神殿の内部で日常的に行なわれた儀礼を表現したもの以外にも、祭礼などの特別な機会に行なわれた神殿儀礼なども含まれている。日常儀礼として知られているのは、神殿の最奥域に安置されている神像が神官によって毎朝、清めと着替えを受ける儀礼である。しかし、これらの儀礼の存在や式次第は文字史料でのみ確認されるもので、神殿レリーフに具体的な手順や儀礼を受ける神像が描写されることはない。

古代エジプト人は、神体に直接関わる儀礼を秘儀として隠し、描写することを好まなかったと考えられるが、儀礼執行が滞りなく行なわれていることを表現するために、王が神に供物を献納する場面を描写することは、必要不可欠であった。神殿内部のレリーフの大部分は、献納場面で埋め尽くされており、この場合、神は神殿の奥域に対して背を向ける格好で描写され、王は神に対峙する姿で表現されるのが通常である。日常的な儀礼を王が実際に行使することは難しかったため、レリーフに王が登場していても実際の儀礼は代行の神官が行ったものと考えられている。また、神の姿は必ず人格化して描写され、王を迎え入れて祝福する姿が表現される。このため、献納場面を描いたレリーフは、理想的な神殿儀礼の姿を象徴的に表現しているといえる。

図像を神殿の壁面に残す意味に関して、王の死後も神殿が存在する限り、儀礼が継承されて恒久的に執行されることを願う結果、レリーフに儀礼場面を表現すること自体が、儀礼執行の現実化と同一視されたと解釈する研究者もいる。このことは、ほとんどの儀礼執行の場面がその主題を特定されることなく繰り返し描写されていることを説明してくれるかもしれない。しかし、これらの場面は、いかなる場合にも適用できるように普遍化されて描写されたのみならず、付随する銘文は短く形式的なものが多いため、1つ1つを詳細に解釈することは非常に困難である。また、古代エジプト人は各儀礼を式次第に則って詳述することよりも、左右対称に配列するなどの美的価値に注意を払ったとみられ、ほとんどの場面は無秩序に反復して羅列されているように見えるため、研究者の頭を長い間、悩ませてきている。

神殿のレリーフのほとんどが献納場面であり、王が神殿内部に向かって神に対峙するという表現原則があることは先に述べたが、例外も存在する。特に、大きな祭礼を描いたレリーフは、興味深い事例を我々に示してくれる。それは、祭礼における行列が向かった方向が、優先的かつ象徴的にレリーフの場面の向きを決定するということである。古代エジプトの祭礼において、祭事は神殿内での一連の儀礼のみならず、神殿の外部での神輿行列も伴ったことが多くの文字史料からも知られている。神像を載せた神輿を神官が担いで練り歩く行列行進は、ある神殿からその外にある別の聖域へ定期的に神が訪れて宗教的目的を遂行するために行なわれた。普段は、外界から隔離されて神殿の奥域に安置されていた神の像は、王と特別な職能を持つ神官しか目撃することができなかったが、祭礼の場合は例外であった。このとき、神の像は神輿の厨子内部に安置されていたため、依然として衆人の目にさらされることはなかったが、民衆にとって神にもっとも接近することができる機会であった。レリーフに祭礼の場面が描写されるとき、選ばれる主題はこのような神輿行列がほとんどであり、神殿内での儀礼の場面はやはり描かれることが非常に少ない。

例えば、毎年挙行されたエジプトの祭礼のうち、もっとも大きなオペト祭は、ルクソールの北にあるカルナク

神殿から、南に位置するルクソール神殿をアメン神が訪れるという祭礼であった。この祭を描写したレリーフは両神殿に複数、現存しており、すべてが南北軸線上に配置されていることが知られている。行列がルクソール神殿を訪れる場面は、南に向かって展開し、逆にカルナク神殿に帰還する場面は北に向かって展開するのである。つまり、神殿のレリーフには、儀礼における目的地までの方向が象徴されて表現されているということである。

これらの事実から、エジプトに現存する神殿の多くの図像史料をある特定の文脈で理解する試みは、全く閉ざされていると言い切れず、しかもパピルス文書などの多くの文字史料から確認されている様々な事象を再証明し、鮮明なイメージを我々に与えてくれる可能性があるのである。今後の古代エジプト研究にとって図像史料の価値は未知数であり、ユネスコが手がけたように世界的な遺跡・環境保全の気運の中で、失われつつある遺跡の保存や記録の事業は継続して行なわれてきている。学術的な観点からエジプトの遺跡を初めて調査・記録したのは、ナポレオンによるエジプト遠征であることは有名であるが、探検家ベルツォーニ（イタリア）や今回の展示貴重書の1つでもある、R. レプシウス（プロイセン）の *Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien* (1849-1859)など、エジプト学の黎明期から大掛かりな記録は行なわれてきた。

現代の考古学的技術を導入した記録調査において、主導的な役割を果たしてきたのは、1924年にJ. ブレステッドによって設立されたシカゴ大学東洋研究所のEpigraphic Surveyのチームである。記録調査を精密にこなしていくには、多くの時間と人員を費やす必要があるため、遺跡が失われていく速度に追いつくことができず、記録作業は写真記録から開始されてきた。このような写真アーカイブはシカゴ大学のみならず、ニューヨーク・メトロポリタン博物館やオックスフォード大学のグリフィス研究所に存在し、研究者が個人的に収集したまとまった写真資料なども知られている。シカゴ大学によって、東洋研究所出版シリーズとして1930年から刊行されてきた古代エジプトの図版集は、これまで主にラムセス朝（第19、20王朝：BC1307-1070）の建造物を中心に出版されてきた。また、ドイツ考古学研究所もヌビア地方の神殿遺構の保存活動を契機にA*rchaeologische Veroeffentlichungen*というシリーズ（1970年から）で、古代エジプトからコプト、イスラム時代までの重要な遺跡の記録・研究に力を注いでいる。そして、エジプトに現存または、エジプトから出土した遺物のなかで、とりわけ神殿レリーフや墓の壁画などの図像史料を図面と参考資料とともに網羅的に記述したB. ポーターとR. モスの共著（*Topographical bibliography of ancient Egyptian hieroglyphic texts, statues, reliefs and paintings,* 1927年から現在も版を重ねている）は、図像史料を扱うエジプト学者にとって不可欠な研究書と位置づけされている。

このように、史料の記録は実際の遺物の保存と切り離して語ることができない。現在、エジプト政府は、神殿遺構や墓への観光客の入場を順次、制限しており、観光産業と共存を模索しながらも、遺跡の保存を優先してきている。観光客として、また研究者として遺跡を実際に目の当たりにするとき、各人のモラルがますます問われることになるだろう。このことは、コピーとしての記録図版を取り扱うときも同様である。特に19世紀に出版された書籍は紙の劣化が進んでいるものもあるため、書籍の修繕・保存に務めるだけではなく、利用する研究者や学生も恒久的財産として扱う自覚を常に持っていたいものである。努力の末、収集・整理して記録されてきた図像史料や研究資料の蓄積がある欧米の大学・研究機関と異なり、日本ではその収集が遅れてきた。そのような状況のなか、東京教育大学時代に収集した非常に貴重な文献資料が、本学図書館に所蔵されていることは研究者や学生にとって何にも代え難い財産である。

象形文字の表音性：ヒエログリフ解読の鍵

永　井　正　勝

はじめに

ヒエログリフを解読した人物としてフランスのシャンポリオンが有名であるが、では一体、シャンポリオンはヒエログリフ（象形文字）のどのような側面を解明したのであろうか。本稿ではこの問題について日本語の表記を参考にしながら考えてみたい。

1. 日本語の音と表記

読者諸氏は次の表記を読むことができるであろうか。

「宇良々々尓　照流春日尓　比婆理安我里　情悲毛　比〈登〉里志於母倍婆」

これは『万葉集』に収められた大伴家持の歌であり、ここには鳥の「ひばり」を「比婆理」と書くように、漢字を表音的に使用した万葉仮名（音仮名）が用いられている。ちなみに先の歌を現代語に書き改めると「うらうらに、照れる春日に、ひばり上がり、心悲しも、独し思へば」となる。

漢字は意味を持った文字であるというイメージが一般には先行しているし、実際、多くの場合そのイメージは正しい。しかしながら漢字と意味について考えるとき、漢字という字形が意味を持つと同時に音を持つということにも留意する必要がある。実際、万葉仮名は漢字の音を借りた表記法である。

象形文字の代表である漢字は「六書」で言うところの「象形」が造字の根源であるかもしれない。しかしながら「象形」を代表とする表意的な造字法だけでは表現しきれない語が存在しているし、更には「象形」だけでは文字数が多くなってしまう。そこで、語の持つ音に頼る表記法が発達することになった。それが「仮借」や「形声」という造字法であり、万葉仮名のような「仮借」の例は中国で既に考案されていた。

「仮借」では漢字の音が重要な役割を果たすわけであるが、そもそも言語の基本は音にあり、日常会話において我々は音を介して意味の伝達を行っている。このことを端的に物語っているのが次の文である。これは一体、何語で書かれた表記であろうか。

Hareta Sora ni susamajii Oto wo tatete, hagesii Nisi-kaze ga huki areta.

使用されている文字は表音文字の代表格のローマ字である。では言語は何かと言えば、語彙と語順の上で紛れも無い日本語である。この一文は石川啄木が記した『ローマ字日記』の冒頭部分であり、その内容を現代仮名遣いで「晴れた空にすさまじい音をたてて、激しい西風が吹き荒れた。」と表記することも出来る。このように表記が異なっても、つまりローマ字表記であろうと漢字仮名交じり表記であろうと、あるいは万葉仮名のような漢字の表音的使用であろうと、同じ言語内容を表現することができる。これが文字表記の特徴である。

2. 古代エジプト語の変遷と文字

古代エジプト語はエジプト文明が成立する遥か以前から話され、エジプト文明が消滅した後の現在でも、コプト教会の典礼の中で用いられている言語である。話し言葉として長い歴史を持つ古代エジプト語が書き言葉として出現するのは文明成立直前のことであり、文字化された古代エジプト語は概略次のように分類されている。

Ⅰ：古エジプト語　B.C.3000年～B.C.2100年
（初期王朝～第１中間期）
Ⅱ：中エジプト語　B.C.2100年～B.C.1350年
（第１中間期～18王朝前半）
Ⅲ：新エジプト語　B.C.1350年～B.C.700年
（第18王朝後半～第26王朝）
Ⅳ：民衆語　B.C.700年～A.D.450年
（第26王朝～東ローマ帝国時代）
Ⅴ：コプト語　A.D.１世紀末～A.D.16世紀
（ローマ帝国時代～イスラーム時代）＋現在

これらの段階のうち、民衆語とコプト語には「エジプト」という名称が付されていないが、それらは独立した言語ではなく、あくまでも古代エジプト語の一段階を示している。

話し言葉としての古代エジプト語は1つの言語であり続けたが、それを表記する文字は幾つかあった。それは①ヒエログリフ（象形文字）、②ヒエラティック（象形文字に対応する筆記体）、③デモティック（筆記体が更に線文字化したもの。象形文字と対応しないものが多い）、④ギリシャ文字（エジプト固有のギリシャ文字を含む。コプト文字とも呼ぶ）の4種類である（表１）。ちなみに表１の左欄にはそれぞれの文字の実例が挙がっているが、どの表記も「エジプト」という単語を示したものである。

ヒエログリフを使用した古代エジプト語（古エジプト語・中エジプト語・新エジプト語）とギリシャ文字を使用した古代エジプト語（コプト語）とでは、外見がまったく異なる。しかしながら、それらは同じ言語内容に対する異表記なのであって、音と意味はおよそ同じである。日本語に喩えるならば、ヒエログリフが漢字仮名交じり表記であるのに対して、ギリシャ文字がローマ字表記と

なる。この対比は啄木の『ローマ字日記』にあるローマ字表記と漢字仮名交じり表記の関係を考えると分かり易いであろう。つまり表記が異なっていても、指している対象や読み方は同じである。

表１　古代エジプト語の諸段階と文字の種類

文字の種類	古代エジプト語	中エジプト語	新エジプト語	民 衆 語	コプト語
ヒエログリフ	＋	＋	＋		
ヒエラティック	＋	＋	＋		
デモティック				＋	
ギリシャ文字 KHME					＋

3. シャンポリオンの解読とは何であったのか？

シャンポリオンはヒエログリフの解読に先立ってコプト語を習得した。シャンポリオンがコプト語に取り組んだ当時、アラビア語の対訳によってコプト語原典の意味が理解できる状態であった。ということは、話者こそ失っていたものの、古代エジプト語の最終段階は未解読ではなかった。

コプト語で＜太陽＞という意味の語は/re/という音を持ち、「ⲣⲉ」と表記された（コプト語のⲣの文字は/r/の音価を持つ）。また＜生む＞という意味の語は/mise/という音を持ち、「ⲙⲓⲥⲉ」と表記された（コプト語のⲥの文字は/s/の音価を持つ）。このようなコプト語の知識がヒエログリフ解読に役立つことになる。

ある日シャンポリオンは𓇳𓋴𓋴という語を見ていた。このうち最後の𓋴が/ss/という音であることは今までの研究で既に知られていた。問題は最初とその次の文字である。シャンポリオンは最初の文字𓇳が＜太陽＞を意味する語となる場合があることと、次の文字𓋴が＜生む＞を意味する場合があることとを突き止めていた。またシャンポリオンはヒエログリフが母音を表記しないことも承知していた。その上で彼はコプト語の音を先のヒエログリフに当てはめてみた。すると/r-ms-ss/という子音表記が現れる。これはかの有名な「ラメセス」大王の名前であった。

𓋴の文字は「束ねられた狐の皮」の象形文字であるが、「束ねられた狐の皮」の意味とは関係なく、単に/ms/という音を示す場合がある。ところがシャンポリオンは、研究の当初から解読直前まで、象形文字が意味や観念を表す表語文字（シャンポリオンは「純粋象形文字」と呼んでいた）であると考えていた。しかしながらエジプトの象形文字であるヒエログリフは、その主な造字法が「象形」であるとしても、用法としての「仮借」を併せ持つ。シャンポリオンがヒエログリフの解読に成功したのは、そのことを理解したときであった。

おわりに

シャンポリオンはヒエログリフの解読以前から古代エジプト語を知っていたのであり、従って厳密に言えば彼は古代エジプト語を解読したのではない。ならば彼の業績は何かと言えば、それは古代エジプト語の知識（単語の音と意味）を利用して、表記法としてのヒエログリフの体系、つまり単語の中の文字の役割と造字法の違いとを解明したことにある。ヒエログリフは写実的な象形文字であるため、一見するとすべてが表語文字（表意文字）であるかのように思われる。しかしながら実際には表音文字としての用法（つまり「仮借」）が重要な役割を果たしていた。

30 *Codices Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis* ; vol. 1, 8-12, Copenhagen, 1931-44. 32.8×24.4cm (E680-c6)

『コペンハーゲン大学図書館所蔵　アヴェスター語・パフラヴィー語写本　第1，8-12巻』

コペンハーゲン大学図書館に所蔵されているゾロアスター教の聖典『アヴェスター』、その註釈（ザンド）、そしてパフラヴィー語書の写本を、ファクシミリ版全12巻として、1931年から1944年にかけて発行したもの。第16回国際東洋学会議（1912年4月、アテネ）において指摘されているように、ゾロアスター教研究もしくは古代・中世ペルシア語文献学において、コペンハーゲン写本の持つ重要性は高く、ファクシミリ版作成の意義は大きい。第1巻および第8巻から第12巻までには、K20、K20b、K5の約4分の3、K3a、K3b、K7a、K7b、K1、K25（総葉（フォリオ）数はあわせて約1,000にのぼる）が掲載されている。

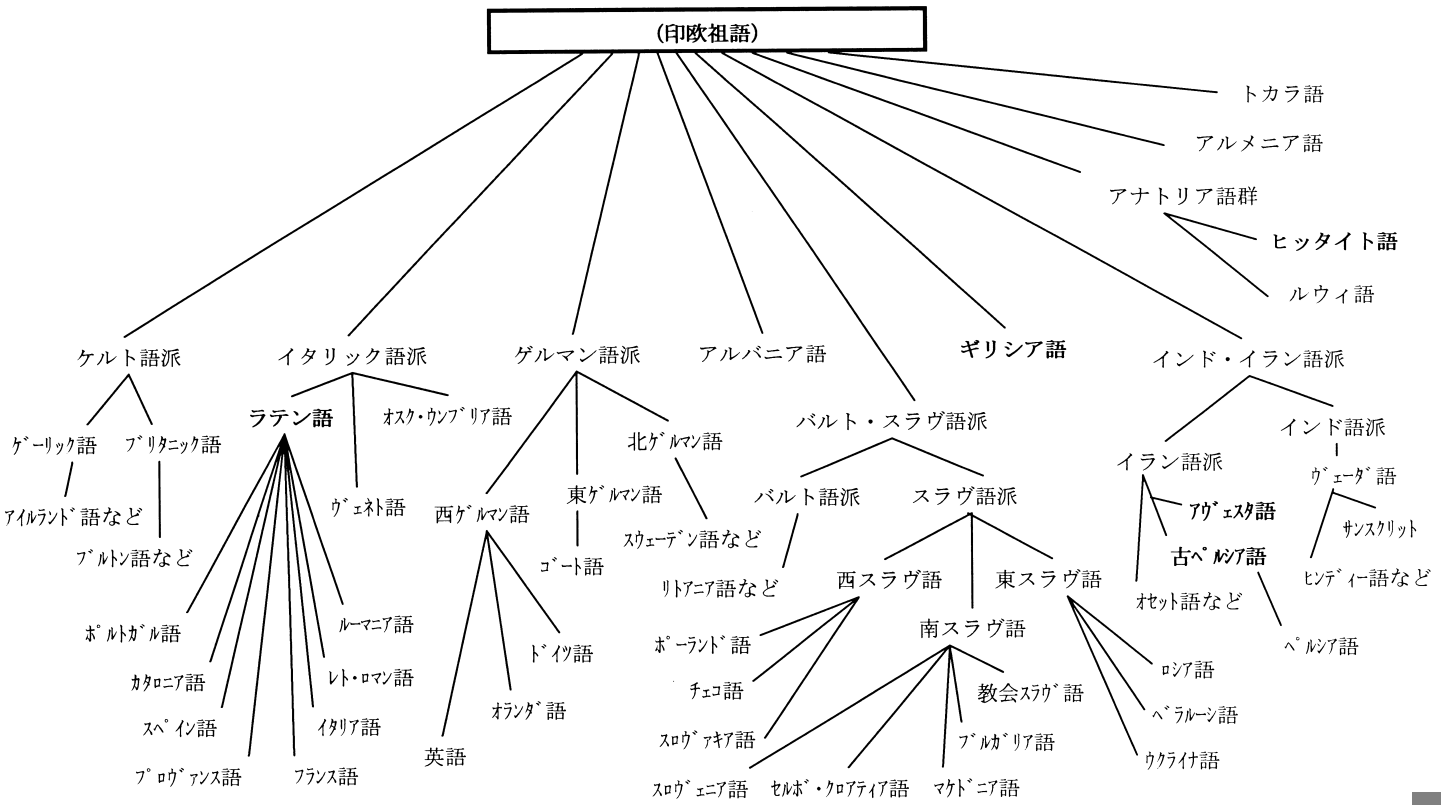
クリステンセン, アルトゥル　Christensen, Arthur (1875-1945)

コペンハーゲン出身のイラン学者であり、上記ファクシミリ版の編纂責任者。1919年以降、コペンハーゲン大学教授として活躍し、近世ペルシア研究として『ルバイヤート』で知られるオマル・ハイヤームについてのものを残しているほか、イラン滞在のなかでクルド語やオセット語などの採録も行っている。中世ペルシア研究においても多数の論文を発表しており、とくに『サーサーン朝治下のイラン』（1936）はサーサーン朝における文化、宗教、司法、芸術、科学といった様々な分野を政治史とともに叙述した大作である。また、古代ペルシア研究としてはゾロアスター教やハカーマニシュ（アケメネス）朝研究を手掛けている。

ゾロアスター（正しくはザラスシュトラ）

異説も多数存在するが、おおむね前7世紀半ばにシースターン地方（現アフガニスタン）で生まれ、前6世紀後半に没したとされ、活動域は東イランであったと見なされている。ゾロアスターの教えは、古くは主として口承において伝持され、紀元後3世紀以降にアヴェスター文字の創案と中世ペルシア語による訳註を経て、21巻本へと編纂され、書物としての『アヴェスター』の体裁が整えられたとされる。紀元後9世紀にはまだ21巻全てが存していたとされるが、現在に伝わっているのはその4分の1に相当すると見られている。『アヴェスター』の最古層に位置づけられるのが「ガーサー（詩頌）」と呼ばれる部分であり、『ヴェーダ』との対比においてインド・イラン的宗教の性格を見る上で、不可欠な資料とされている。（S. G.）

インド・ヨーロッパ語族の系統図



ゾロアスター教の聖典写本伝承

後　藤　信　介

「ゾロアスター教」として成立している宗教体系の内には歴史的・地域的に多種多様な要素が包含されている。というのも、ザラスシュトラによって前7世紀半ばに現在のイラン東部において説かれた教えは、現在に至る約2600年の時を経て伝承され、多くの要素が付加／変形されたからである。

ザラスシュトラの名が広くゾロアスターという形で知られるようになったことも、そうした付加／変形の一端を示していると言えよう。ゾロアスター Zoroasterという形は、多くの古代オリエントの人物名と同様、ギリシアの著述家たちの叙述に由来しており[1]、古代の呼び方に従えばザラスシュトラ Zaraθuštraという形になる。

また、聖典『アヴェスター』の中にザラスシュトラが用いた以外の言語や彼が説いた以外の思想・教義が含まれていることも、伝承過程における付加／変化の結果に他ならない。聖典『アヴェスター』のヤシュト（頌神讃歌）には、ザラスシュトラ本人の教えとは食い違う諸章、いわゆる古体ヤシュトが含まれており、ザラスシュトラが排斥した古代イランの思想が混入しているものとして注目されている[2]。

このように、ゾロアスターという名称や古体ヤシュトの存在が示すように、ザラスシュトラによって説かれた教義は、時を経て付加／変形され、現在の私たちに受け入れられている。そうした混交を認めるがゆえに、ザラスシュトラ教とは呼ばず、一般的にはゾロアスター教という名称が用いられているのである。

この小論では、以下に、ゾロアスター教の聖典写本伝承の過程について簡単に述べてみたい。

聖典『アヴェスター』と古代イラン諸語世界における聖典伝承

はじめに、現在に伝わる聖典『アヴェスター』の構成と、その聖典に含まれている言語について見てみたい。内容は、ヤスナ（神事書）、ウィスプ・ラト（ヤスナの補遺）、ウィーデーウ・ダート（除魔書）、ヤシュト（頌神讃歌）、クワルタク・アパスターク（小祈祷書）、その他から成っている。そのうちヤスナ、ウィスプ・ラト、ウィーデーウ・ダートは、あわせてウィーデーウ・ダート・サダーフと呼ばれ、大祭儀において用いられる。また、ヤスナの28章から34章、43章から51章、および53章はガーサーと呼ばれており、ザラスシュトラ自身の教義とされている。それらの内容は、本文とザンド（註解）とに分けられている。

言語的には、ガーサー、ガーサー以外の本文、ザンドにおいて用いられているものは異なり、それぞれガーサー・アヴェスター語、新体アヴェスター語、パフラヴィー語と呼ばれている。前二者は古代ペルシア諸語に、後一者は中世ペルシア語に属する。

聖典『アヴェスター』における最も古層の言語はガーサー・アヴェスター語であるが、その使用年代決定は、ザラスシュトラの生と活動の年代決定と一体であり、異説は多々あるのだが、前7世紀半ばから前6世紀初頭までイラン東部において使用されていたと推定されている。ゾロアスター教徒の伝承によると、ザラスシュトラは教えを自ら記すことはなかった。後に弟子によって書き留められたものがあったというが、現在にそうした資料は伝わっておらず、主としてザラスシュトラの教義は口承によって伝持されたものと見なされている[3]。

一方、新体アヴェスター語は、前述したようにガーサー・アヴェスター語と区別されるのだが、その差異は時代的なものに由来し、前5世紀から前4世紀に使用されていたと推定されている。その言語のなかにもいくつかの方言の混在が指摘されており、ひとつの言語として括ることには異論も唱えられているが、イラン東部方言に属するという点は変わらない。

聖典『アヴェスター』を構成する言語からは外れるのだが、ガーサー・アヴェスター語、新体アヴェスター語とともに、古代イラン諸語に含まれる古代ペルシア語についても触れておきたい。古代ペルシア語は、ハカーマニシュ（アケメネス）朝期に残された楔形文字表記の言語であり、紀元前6世紀後半から紀元前4世紀半ばにかけてハカーマニシュ朝諸王によって用いられた。この言語は、イラン東部のアヴェスター語とは異なり、イラン南西部のものとして位置づけられている。

このように地域的・時代的に隔たりのあるアヴェスター語世界と古代ペルシア語世界とは、ゾロアスター教の伝承によって結ばれているといってもよいだろう。ザラスシュトラの教えにおいては、アフラ・マズダーが最高神として崇められ、森羅万象を統べる法としてアシャ（天則）が位置づけられ、この天則にかなうものは義者、反するものは不義者とみなされるのだが、こうした世界観がビーソトゥーン碑文に一貫して表現されている精神と類似することはすでに指摘されている[4]。ビーソトゥーン碑文には、「王ダーラヤワウは告げる。アウラマズダーの御意によって余は王である。アウラマズダーは王国を余に授け給うた」といった文句が記されているのだが、この古代ペルシア語世界におけるアウラマズダーが、アヴェスター語世界のアフラ・マズダーを引いてきたものであることは明らかである。

このように、イラン東部のザラスシュトラの教えがイラン南西部のハカーマニシュ朝へ伝わる契機は、クル（キュロス）2世による紀元前529年のマッサゲタイ討伐にあった。マッサゲタイというのはイラン北方のサカ

（スキュタイ）のうち、東方、つまり現在のカザフスタン共和国南部、ウズベキスタン共和国西部あたりにいた人々を指す。その遠征に際して、ダーラヤワウ1世の父ウィシュタースパが、イラン東部において伝承されていたザラスシュトラの教えに触れ、イランの西方へと伝えたのだという[5]。

だが、ザラスシュトラの教えと、ダーラヤワウ1世治下の宗教とを、同一視することには注意しなければならない。ハカーマニシュ朝においては、ザラスシュトラ本人の存在が軽視される傾向にあった。それは、あくまでもダーラヤワウ1世の権力がアウラマズダーによって支えられているという関係が必要だったためであり、第三者であるザラスシュトラの存在は余計なものであったと解釈される。つまり、王権を支えるという第一目的のもとに、ザラスシュトラの教えは、部分的に、もしくは歪められて受け入れられたと捉えられるのである[6]。

7世紀半ばのイラン東部においてザラスシュトラは教えを説き、その教えは主として口承によって伝持されていった。そのなかで、マッサゲタイ討伐を契機として、ハカーマニシュ朝へと教えは伝わった。こうして、ザラスシュトラの教えは付加／変化を加えられるという形で、古代イラン諸語世界に広がっていったのである。

聖典『アヴェスター』の成立と写本伝承からヨーロッパにおけるゾロアスター研究の誕生・発展

ハカーマニシュ朝より時代を下ると、弟子がザラスシュトラの教義を記した書があったと伝えられているが、前330年、アレクサンドロス大王がペルセポリスを焼いたときに失われてしまったという。また、マーニー（216-277）の時代には文字で書かれたゾロアスター教のテキストがあったということが伝えられており、このテキストがアラム文字によって書かれ、アルサケス（アルシャク）朝の大王の宝蔵に納められていた書と関係することが指摘されている[7]。

そして、正確な年代を特定することはできないが、4世紀から6世紀にかけて、ザラスシュトラの教義の伝承において、重大な意味を持つ出来事が起こる。それはアヴェスター文字の創案である。アヴェスター文字はパフラヴィー文字を基に考案された。教義の伝持は、口承から書承へと移行することになり、ここに“聖典”成立の契機が生まれたのである。

サーサーン朝期の人々の大多数はアヴェスター語への理解を失っていたために、ザラスシュトラの教義はパフラヴィー語による翻訳・註解が加えられ、21巻本の聖典『アヴェスター』へと編纂された。現在、21巻本は残存していないのだが、パフラヴィー語書『デーンカルド』において明らかにされていることから、おそらく9世紀には21巻全てが存していた[8]。この聖典編纂が、イラン民族の固有性の復興を掲げるサーサーン朝にとって、一大事業であったことを付言しておきたい。

こうした伝承・編纂の結果、聖典『アヴェスター』は幾層にもなる複雑な言語状況を内包して成立することとなったのである。

その後は、写本によって伝持された。写本制作者としては、1185年にK1の底本となる写本を作成したアルデシーリ・ワフマニ・ローズベーヒ・シャーブルゼーニ・シャーマルド、K7bやM51bにおいて知られるロスタミ・ミフラバーニ・マルズバーニ・ダヒシュナヤール、14世紀にK1、K5、L4などを作成したミフラワーニ・カイ・ホスロウらが知られている。彼らが残した写本は、以降に述べるように18世紀前半にヨーロッパへともたらされることとなる。

ヨーロッパにおいて、東方の聖賢ザラスシュトラの実像を明らかにしようとする学問的基盤の萌芽が見られたのは、18世紀後半のことであった。1700年、オクスフォードのトマス・ハイドによってアヴェスターの字母は紹介されていたが、イギリス人ジョージ・ブアシャーが「ヴェンディダード・サーデ（ウィーデーウ・ダート・サダーフ）」の写本を入手し、1723年にイギリスへと持ち帰ったとき、彼自身はおろか、ヨーロッパにその写本を解読・翻訳できる者はいなかったという。後にその写本はフランス人アンクティーユ・デュペロン（1731-1805）によって見出され、写本の言語を学ぶため、1754年にインドとペルシアへ渡った。8年の滞在を経てパリへ戻り、1771年、『ゼンド=アヴェスター』として、ヨーロッパで初めてゾロアスター教関連の写本が翻訳・刊行された[9]。

19世紀前半、古代・中世ペルシア語文献学の基盤は急速に築かれていった。デュペロンの業績は彼の生前には評価されなかったのだが、彼の他界から20年後、デンマーク人ラスムス・ラスクの手によってデュペロンの翻訳が見直された[10]。ラスク自身、1816年から1823年にかけての7年間、インドとイランを旅し、数多くの写本をデンマークへと持ち帰っていた。また、1841年から1844年にかけてインドとイランに滞在した、コペンハーゲン大学インド哲学教授N. L. ヴェスターガートによって、さらなる写本がデンマークへともたらされた[11]。

『コペンハーゲン大学図書館所蔵　アヴェスター語・パフラヴィー語写本』に掲載されている写本の大部分は、ラスクとヴェスターガートによって19世紀前半に蒐集されたものである。ファクシミリ版発行に至るまでには以下のような経緯があった。写本の重要性を認めるヨーロッパの多くのイラン学・東洋学研究者がコペンハーゲン大学図書館を訪れるようになったが、ヴェスターガートによってもたらされた写本のうち、カタログにおいて整理されていたのは一部であり、さらに、写本の中には大きく欠損しているものがあり、整理・保存が求められて

いた。それは第16回国際東洋学会議（1912年4月、アテネ）において、ヨハン・アイザーやアダルベルト・ベッツェンベルガーらによって認められ、指摘・要請されたとおりで、ファクシミリ版の作成が急務とされた。第一次世界大戦によって作成は中断せざるをえなく、大戦後、まずはフーゴ・イプシャーの手によって写本は復元され、そのうえでアルトゥル・クリステンセンがファクシミリ版作成のための編纂責任を負い、1931年以降13年にわたって刊行されることとなる[12)]。

こうした古代・中世ペルシア語写本は、コペンハーゲンのみでなく、ボンベイ、ミュンヘン、パリ、ロンドンなどといった各地に保存されている[13)]。そうした写本を利用して、19世紀後半、K. F. ゲルドナーやE. W. ウェスト、Fr. シュピーゲル、J. ダルメステターといった諸学者が、翻訳・研究を進めた。さらに、それらの研究の成果は、20世紀初頭、クリスチャン・バルトロメーの手によって『古代イラン語辞典』として結実する。こうして現在に至る古代・中世イラン学の礎が築かれたのである。

紀元前6世紀に東イランにおいて説かれたザラスシュトラの教義は、付加／変形を経てハカーマニシュ朝へと広まり、サーサーン朝において聖典『アヴェスター』へと編纂された。また、その後の写本伝承において聖典の大部は散逸したが、全体の約4分の1が現在へと伝えられた。この写本が学問的俎上に乗せられるようになったのは18世紀のことであり、以来、幾多の研究が積み重ねられ、現在へと至るのである。

以上に、簡単にゾロアスター教の聖典写本伝承の過程を見てきたが、その流れを、もうひとつの大きな流れである英雄叙事詩の伝承と合わせて見るならば、より幅広いイランの伝承のあり方を感じることができるであろうことを、最後に付言しておきたい。

参考文献一覧

伊藤義教「アルトゥル・クリステンセンの人と業績」『西南アジア研究』No.7、1961.

――――「アヴェスター」、辻直四郎編『ヴェーダ／アヴェスター』筑摩書房、1967.

――――『古代ペルシア　―碑文と文学―』岩波書店、1974.

――――『ゾロアスター研究』岩波書店、1979.

岡田明憲『ゾロアスター教　神々への讃歌』平河出版社

Anquetil-Duperron, A. H., *Zend-Avesta,* Vol.1-3, New York, Garland Publisher, 1984.

Christensen, Arthur, *Codices Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis,* Vol.1, 8-12, Copenhagen, Einer Munksgaard, 1931.

Geiger, W., Kuhn, E., *Grundriss der Iranischen philologie,* 2. Bd., 1974.

Jackson, A. V. Williams, *Zoroaster : the prophet of ancient Iran,* New York, AMS Press, 1965.

1）Jackson, A. V. Williams, *Zoroaster : The Prophet of Ancient Iran,* New York, AMS Press, 1965. pp.147-149.

2）伊藤義教「アヴェスター」、辻直四郎編『ヴェーダ／アヴェスター』筑摩書房、1967. pp.419-420.

3）ibid., p.418.

4）伊藤義教『古代ペルシア　―碑文と文学―』岩波書店、1974. を参照.

5）ibid., p.145 ; pp.272-274.

6）ibid., pp.146-147.

7）伊藤義教「アヴェスター」、辻直四郎編『ヴェーダ／アヴェスター』筑摩書房、1967. p.418.

8）ibid., p.418.

9）Anquetil-Duperron, A. H., *Zend-Avesta,* Vol.1, p.v.

10）伊藤義教『ゾロアスター研究』、岩波書店、1979、p.x.

11）Christensen, Arthur, *Codices Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis,* Vol.1, p.9.

12）ibid. Vol.1, pp.7-10 ; Vol.12, pp.VII-X.

13）West, E. W., “Pahlavi Literature”, Geiger, W., Kuhn, E., *Grundriss der Iranischen Philologie,* pp.75-129. 参照.

31 *Bibliorum Codex Sinaiticus Petropolitanus*, 4Bde., Hildesheim, 1969. 25.4×21.8cm (193-Ti7)

『シナイ写本』（Codex Sinaiticus, ℵ）

ギリシア語アンシャル体（丸みを帯びた大文字体）の聖書写本。紀元後4世紀後半にエジプトもしくはパレスチナで作成されたものと推測される。1844年と59年の二回にわたり、モーゼが十戒を授かったとされるシナイ山の麓、聖カタリナ修道院において、プロテスタント神学者のコンスタンティン・フォン・ティッシェンドルフ（1815-1874）により発見された。その主要部分は、1869年より以降サンクト・ペテルブルグの国立図書館に所蔵されていたが、1933年大英博物館に売却され、現在も同博物館に所蔵されている。羊皮紙製で形状は冊子体、縦43×横37.8cm、１頁には4欄、各欄は48行で、全体は346 1/2葉より成る。旧約聖書の約半分と新約聖書の全て、そして末尾には聖書外の二文書、『バルナバ書』のすべてと『ヘルマスの牧者』の一部が収められている。この写本中、新約聖書の配列は興味深く、パウロの書簡が『使徒行録』に先行し、『ヘブル人への手紙』が『テサロニケ第二書簡』に続く。ほかに紀元後４世紀頃に製作されたと推定されるギリシア語聖書写本には、ヴァチカン図書館所蔵のヴァチカン写本（B、羊皮紙製冊子体）があるが、新約部分に大きな欠損を含んでいる。

ギリシア語写本の字体について

ギリシア語の写本に用いられているギリシア文字の字体は、ほぼ4種類、すなわち(1)キャピタル体、(2)アンシャル体、(3)草書体、(4)小文字体に大別される。これらは時代を経るにつれ、次第に(1)から(4)に移行した。(1)のキャピタル体は古代、主に碑文等に用いられ、石版や金属の素材に彫り込まれた。その後パピルスや羊皮紙などが普及すると、キャピタル体はより書きやすい自由な曲線を帯びた楷書体に変形してゆく。これが(2)のアンシャル体である。ギリシア語聖書写本のうち「大文字体」と分類されているものは、概ねこのアンシャル体に当たり、3世紀から5世紀頃にかけて用いられた。しかし、記述に時間がかかる楷書体は次第に姿を消し、代わって(3)の草書体が頻用されるようになる。草書体はいわゆる小文字体の原型であり、筆写者がペンを持ち上げずに複数の文字を記入できるように工夫されている。この字体がさらに洗練され、9、10世紀頃に一般主流となったものが(4)の小文字体である。大文字のアンシャル体に比べて形状はよりコンパクトであり、迅速な筆記が可能となった。このように大文字から小文字への世代交代がなされたが、客観的に確認できる移行の時期は、ほぼ10世紀頃と推測されている。現在確認されている5,000を超えるギリシア語新約聖書写本のうち、ほぼ9割は小文字体写本である。

七十人訳聖書（ＬＸＸ）

ラテン語で「70」を意味する「セプトゥアギンタ」という別名でも呼ばれる、旧約聖書の古いギリシア語訳と、ヘブライ語聖典以外のギリシア語で記された諸書（いわゆる「第二正典」）を含む文書の集成。伝承では、エジプト王プトレマイオス2世フィラデルフォス（在位前283－246）の命により、アレクサンドリアにおいて、七十二人のユダヤ人学者によりこの翻訳が進められたと伝えられる。この種のギリシア語訳事業は、ヘレニズム時代、アレクサンドリアをはじめとするヘレニズム都市に居住するユダヤ人が増加し、彼らがヘブル語を解さなくなっていったために急務とされた。新約聖書において旧約聖書テキストが引用される際には、たいていの場合、この七十人訳聖書テキストが用いられている。また旧約聖書の本文校訂に際しては、旧約のヘブル語マソラ・テキストは中世以前には遡り得ず、この七十人訳聖書のほうがより原型に近い本文を底本にしていると考えられる場合も多く、文献学的価値は高い。同訳はのちの古ラテン語訳（「イタラ」）や、聖ヒエロニュムス（340-420）による聖書ラテン語訳（「ウルガータ」）などにも援用されることになった。（C. Y.）

32 *Ilias Ambrosiana*: Cod.F.205 P. Inf. Bibliothecae Ambrosianae Mediolanensis, facsimile edition, Berna, 1953. 36.8×27.6cm (F400-h24)

（ホメロス）『イリアス・アンブロジアーナ』

ミラノ・アンブロジアーナ図書館所蔵（整理番号Cod.F.205 P.Inf.)の彩色画入り大文字手写本。紀元後5世紀頃、おそらく地中海東部地域において制作されたと考えられる。『イリアス』の一手写本をめぐり、両面書きテクストの随所に挿入された彩色画（ミニアチュール）部分のみが切り取られて残された結果、ミニアチュールの裏側にたまたま存在する『イリアス』の箇所と、彩色画だけが伝わったものである。切り取られた部分は計52葉であるが、1葉に連続する2つの絵が収められている場合があり、絵の総

数は計58点となっている。所蔵カラーファクシミリ版は、ミニアチュールと裏側のテクスト部分とを個々に印刷し、収録している。なお筑波大学図書館では伝統的に、分類上古典ギリシア語文献あるいは後出のラテン語文献をも「オリエント資料」として一括し、分類整理している。

ボッロメオ、フェデリーコ　Borromeo, F.（1564-1631）

1609年、ミラノの守護聖人聖アンブロスィウス（340-397）の名をとって、同市にアンブロージオ図書館を建立した人物。従兄に聖人のカルロ・ボッロメオ（1538-84）を持つ。1587年に枢機卿、のち1595年にミラノ大司教に叙せられている。アンブロージオ図書館の蔵書は、ジェノヴァ人の人文主義者ジャン・ヴィンツェンツォ・ピネッリ（1535-1601）が遺したコレクションなどを中心に構成されており、この「イリアス・アンブロジアーナ」もその一つである。1819年、この秘蔵本を当時の図書館司書アンジェロ・マイ（1782-1854；後にヴァチカン図書館館長、1838年に枢機卿）がスケッチし、その銅版画が公刊された。その後1905年にはモノクロの、さらに1953年にはカラー版による800部限定のファクシミリ本が公刊され、本学にはその一つが所蔵されている。古典文献学、古代美術史の両分野において、このファクシミリ版が持つ意義は大きい。なおボッロメオ枢機卿は、1627～28年にミラノをペストが襲った際、市民たちに対して献身的に尽くしたことでも記憶され、近代イタリア小説の最高傑作、アレッサンドロ・マンゾーニ（1785-1873）の『婚約者』中に登場する。

ホメロス　Homerus

紀元前8世紀頃に活躍した古代ギリシア随一の叙事詩人。『イリアス』（全24巻、15683行）および『オデュッセイア』（全24巻、12110行）という、トロイア戦争を題材にした叙事詩韻律による二作品の原作者として伝えられる。現今の学界では、その核となる物語を最初に創作した口承詩人を想定して「ホメロス」の名を冠し、それを拡充しつつ歌い継いでいった一群の吟遊詩人たちの存在を推定している。現在伝わる『イリアス』および『オデュッセイア』は、こうして長期にわたって形成され、さらに文字化による本文の確定を通じて完成された共同体的産物である。現存する手写本は、両作品とも、紀元後10/11頃に写された小文字写本が作品全体におよぶ最古のものであるが、部分的にはこの「イリアス・アンブロジアーナ」のように、さらに古代に遡る大文字写本やパピルスが存在し、大文字本の価値は高い。なお「ホメロス」の名を（　）に入れたのは、彼が口承詩人として伝えられるためであり、「イリアス・アンブロジアーナ」を「筆記」した人物ではないことを明記したものである。（M. A.）

33　Lowe,E.A., *Codices Latini antiquiores : a palaeographical guide to Latin manuscripts prior to the ninth century* ; Pt.3, 6, 7, Oxford, 1938 ,1953, 1956. 44.5×31.3cm (H100-l5)

『古期ラテン語写本』

古文書学の上で、ラテン語写本の変遷は前掲のギリシア語手写本が辿ったのときわめて類似した現象を呈する。古代末期の大文字体からその変形であるアンシャル体を経て、最終的に小文字体が発明されるのも８世紀末から9世紀にかけてである。その後地中海･ヨーロッパ世界では、東･西の各々でそれぞれ「マケドニア朝ルネッサンス」「カロリング朝ルネッサンス」と呼ばれる文芸復興の時期を迎える。その直前、地中海東域を席巻した「聖画像破壊運動」（イコノクラスム）の結果、教義関係書等を速写する必要性から小文字体が多用され、それが西方にも及んで結果的に文化水準が高められた。こうしてラテン語写本は9世紀、カロリング朝ルネッサンスの時期に急増する。これに先立つA.D.800年以前の手写本を、すべて字体のサンプル写真と解説等を添えて通覧したのが、このロウ編『古期ラテン語写本』（全11巻、1934-71）である。この叢書は略号CLAの記号で各方面に頻繁に引用され、ラテン語古文書学の金字塔として規範的かつ不朽の価値を誇る。編者Elias Avery Lowe（1879-1969）は、オックスフォード大学古文書学講座で1913年から1948年まで教鞭を執った。各巻の内容は、第1巻「バチカン」、第2巻「イギリス、アイルランド」、第3巻「イタリアⅠ」、第4巻「イタリアⅡ」、 第5巻「パリ」、第6巻「フランス」、第7巻「スイス」、第8巻「ドイツⅠ」、第9巻「ドイツⅡ」、第10巻「その他Ⅰ（オーストリア～オランダ)」、第11巻「その他Ⅱ（ハンガリー～ユーゴスラビア、米国を含む)」となっている。これは写本を所蔵するヨーロッパ（およびアメリカ）の図書館所在地に従ったものであり、さらに第3/4巻、第8/9巻、第10/11巻の内容は、市･国名のアルファベット順で掲載されている。この叢書は、版型のやや小さな縮刷版で復刊されており、これも本学既蔵の3、6、7巻と併せて展示した。

アウグスティヌスの古写本について

今回展示した『古期ラテン語写本』の中から、ラテン教父アウグスティヌス（354-430）の古写本をサンプルに取ってみよう。アウグスティヌスの3大著作（『告白』(397-400)『三位一体論』(400-421)および『神の国』(413-427)）に関して、最古の手写本としてはいずれも9世紀以前のものが伝存しており、すべてこのCLAに収められている。すなわち『神の国』が6世紀のもの(Cod. Lugdunensis 607,リヨン；CLA VI.784〔半アンシャル体〕、全２２巻中１～５巻を収録)、『告白』が７世紀のもの(Cod.Sessorianus 55,ローマ；CLA IV.420a〔半アンシャル体〕)、『三位一体論』が8世紀のもの2点（Cod.Bodleianus Laud Misc. 126,オックスフォード；CLA II.252〔アンシャル／半アンシャル体〕およびCod.Cambercensis 300,フランス・カンブレ；CLA VI.739〔カロリング風／混合小文字体〕）である。またこれら3著作のうち中世初期の伝承が最も豊かな『神の国』については、ほかの主要写本2点に関してもこのCLAが収録している（6世紀のCod.Veronensis 28,イタリア・ヴェローナ；CLA IV.491〔アンシャル体〕、１１～１６巻を収録、および７世紀の

Cod.Parisinus12214,パリ；CLA V.635〔半アンシャル体〕、1～9巻を収録＋Cod.Petropolitanus Q.v.I.4,サンクト・ペテルブルグ；CLA XI.**635〔同〕、10巻を収録)。このほか、もちろんアウグスティヌスの他の著作の手写本も、数多くこのCLAに収められている。それにより、字体の特徴を通して筆写された地域・修道院が識別され、写本伝承の経緯が浮かび上がる。西洋古典（ギリシア・ラテン）文献の伝承は、聖書と並んで教父たちあるいは典礼文書の写本が古典文学の類を数的に圧倒するが、ラテン教父の代表者アウグスティヌスひとりを取り上げてみても、このことは如実に実証されている。

ラテン教父

「教父」とは「教会の父」の意味であり、紀元後１世紀に始まるキリスト教の発展に際して、教義の確立、教会制度の整備、異端の論駁などに関して功績のあった神学者たちの総称である。彼らは、地中海世界の地域区分および使用言語の観点から、ギリシア教父、ラテン教父、オリエント教父に大別される。歴史的には、西洋古典（ギリシア・ラテン）文学史の最後を飾るとともに、西洋世界とオリエント世界とをつなぐ役割を果たした人々だとも言える。彼らのうち、後世への影響その他の点で教父の代表者として挙げられるのが、北アフリカ・ヒッポ市の司教を務めたラテン教父、アウグスティヌス(354-430)である。生前から彼の著作は、ラテン語キリスト教圏･西方地中海地域に普及していた。もっとも彼は、古代末期に起こった民族大移動の渦中、北アフリカを猛襲したヴァンダル族がヒッポ市を包囲する中で死を迎える。アウグスティヌスの著作は、その死後広くヨーロッパ大陸に伝えられ、中世を通じて豊かな写本伝承を見ることになる。これはひとえに、彼の周囲にいた弟子･友人たちが、決死の覚悟で師の写本を保護し伝えたことによるものである。他のラテン教父としては、旧新約聖書の全ラテン語訳（ウルガータ訳）で知られるヒエロニュムス(340-420)、アウグスティヌスの師でミラノの守護聖人アンブロスィウス（前掲）らが挙げられる。(M. A.)

34 *Clavis Patrum Latinorum*, (Sacris Erudiri), 2nd ed., Steenbrugis, 1961. 25.3×17.8cm (190.31-D54)
Clavis Patrum Graecorum, 5 vols. (Sacris Erudiri), Turnhout, 1974-1987. 25.3×15.7cm (190.3-G31)

『ラテン教父学必携』『ギリシア教父学必携』

ベルギーの西北部、ブリュッヘ近郊ステーンブリュッヘにあるベネディクト会聖ペーテルス修道院の修道士Eligius Dekkers(1915-98)が、1947年に、テルトゥリアヌス(160-220)からベダ・ウェネラービリス(673-735)までのラテン教父たちに関して、新しい校訂原典テキストの出版計画を立案した。このプランは1953年、現在なお継続公刊中の叢書『キリスト教著作家全集・ラテン篇』(Corpus Christianorum Series Latina;CCSL)として実現され、のちにギリシア教父にまで拡大される（『キリスト教著作家全集・ギリシア篇』Corpus Christianorum Series Graeca;CCSG)。それに先立ち、校訂作業にともなう教父学研究の成果を順次公にすべく、年刊学術雑誌として企画されたのが『聖父研究』(Sacris Erudiri)であり、1948年に創刊号が公刊された。その第3巻として1951年、Dekkers自身により刊行されるのが『ラテン教父学必携』*Clavis Patrum Latinorum*であり、これは絶賛のうちに1961年、第2版を迎える（本学所蔵版はこの版)。内容は、古代から中世初期までのラテン教父たちによるすべての著作に関して、順にナンバリングを行い、著作名、既刊標準テキスト、解題に関わる研究論文等を網羅したもので、「奥深き森」とも評される教父たちの沃野に分け入る研究者たちにとって、必携の「鍵」(Clavis)となっている。ラテン教父篇が好評を博したのに続き、同じ趣旨で編纂されたのが『ギリシア教父学必携』*Clavis Patrum Graecorum*である。こちらは全5分冊からなり、このうちまず第2分冊が1974年、Maurice Geerardの手によって公刊された。各巻の内容は順に、第1巻「ニケア公会議(325)以前のギリシア教父」(1983)、第2巻「アタナシオス(295-373)からクリュソストモス(347-407)まで」、第3巻「アレクサンドリアのキュリロス(378-444)からダマスコスのヨアンネス(650-750)まで」(1979)、第4巻「公会議文書・教父著作抜粋集」(1980)、第5巻「索引等」(1987)となっている。さらに1998年、補巻が刊行された。

ギリシア教父

新約聖書がギリシア語で記されたのに続き、初期キリスト教の発展は主として、ギリシア語で叙述を行ったギリシア教父たちによって担われることになる。この間、イエス・キリストの直弟子（およびパウロ）は「使徒」と呼ばれ、彼らによる書簡や福音書等を中心に新約聖書が編纂された。時代的にこの使徒たちに続く教父たちは「使徒教父」と呼ばれ、その著作は「使徒教父文書」と名づけられる。この「使徒教父」たちに始まるギリシア語教会著作家たちが「ギリシア教父」であり、ほぼ8世紀までの著作家が含まれる。彼らは時代別に3期、すなわち1「初期」（使徒教父を含む)、2「盛期」、3「後期」に区分されるが、この分類は『ギリシア教父学必携』1～3巻の区分に一致するといってよい。このうち「盛期教父」の中には、東方教会のイコンにしばしば3人そろって描かれる、大バシレイオス(330-379)、ナジアンゾスの神学者グレゴリオス(329-390)、前掲のヨアンネス・クリュソストモス、あるいはバシレイオスの弟で哲学的観想に長けたニュッサのグレゴリオス(335-394)らが含まれる。

近代教父学の展開

教父学の研究は、17世紀中葉に中世スコラ哲学的な方法を脱し、歴史神学の一環として飛躍的進展を遂げ、文献実証的な方法を確立する。ベルギーに拠点を置き、聖人伝の本格的編纂を志したイエズス会士Jean Bolland (1596-1665)に始まる「ボランディスト」たちと時期をほぼ同じくして、同様に文献学的方法を用いて教父や修道院文書の原典テキストの編纂に取り掛かったのは、パリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院に本拠を置き「サン・モール学派」と呼ばれたベネディクト修道会士たちである（1618年～）。この会派は、ジャン・マビヨン（1632-1707）やベルナール・モンフォーコン（1655-1741）といった一群の優れた文献学的教父学者を輩出する。19世紀に入ると前掲のアンジェロ・マイ（1782-1854）らに続き、フランスにジャック・ポール・ミーニュ（1800-1875）Jacques Paul Migneが出た。ミーニュは、現在に至るまでギリシア・ラテン教父の原典の集大成として意義を持つ『ラテン教父集成』(Patrologia Latina全222巻；テルトゥリアーヌス(前掲)からインノケンティウスⅢ世(1160-1216；1198より第176代教皇)まで)、および『ギリシア教父集成』(Patrologia Graeca全168巻；ローマのクレメンス（88-97第3代教皇）からフィレンツェ公会議（1439）まで）の編者としてその名を留めている。「ミーニュ版」として知られるこの叢書は、多くのミスプリントを含み、現代的な文献批判の方法を採り入れた新しい教父叢書の類（たとえば前掲のCCSLやCCSGなど）によって凌駕されつつあるが、多くの著作テキストは今なお価値を失っていない。(M. A.)

35 Quatremere, Stephanus M., Payne Smith, R., *Thesaurus Syriacus*, 2vols., Oxford, 1879-1901. 33.8×31.3cm (E100-s121)

『シリア語－ラテン語大辞典』

現在われわれが入手しうる最も簡便なシリア語辞典は、Oxford大学出版局から刊行されている*A Compendious Syriac Dictionary*(1903)であろう。これはカンタベリー大聖堂の首席司祭（Dean）であったR.ペイン・スミス（Robert Payne Smith 1818-1895)による遺稿を、次女のJessica Payne Margoliouthが夫のDavid S. Margoliouthと協力して整理編纂したものである。遡って、同じようにこの*Thesaurus Syriacus*も、そのうち第1巻はQuatremère（次項）が収集した資料をペイン・スミスが整理出版したものである(1879年)。しかしながら第2巻公刊前にペイン・スミスが他界し、やはり次女のジェシカが夫と協力して出版した旨、この*Thesaurus*第2巻のラテン語序文には記されている。先の『シリア語－英語辞典』が実用向けの簡易版であるのに対して、この『シリア語－ラテン語大辞典』は超大型の2巻本であり、語義も例文の訳もラテン語で記され、19世紀の古代学の性格を象徴するかのようであるが、『宝典』(Thesaurus)の名にふさわしく、豊富な例文ゆえに今なお辞書としての価値を保っている。

キャトルメール，エティエンヌ・マルク

Quatremère, Etienne Marc（1782-1857）

フランスのオリエント学者。商人の子として生まれる。天成の語学力を活かし、1807年フランス帝国図書館手写本部門に採用され、1809年にはルーアンの大学ギリシア語講座主任となる。1815年には碑文学士院に入り、1819年からはコレージュ・ド・フランスにてヘブライ語とアラム語を担当、1827年には東洋語学院のペルシア語教授の座に就く。 1837～41年には、中世アラビアの史家アル・マクリズィ（1364-1442）によるマムルーク朝（1250年以降）スルタンの歴史を訳出、出版している。シリア語を含め、オリエント諸語に対しては一貫して辞書学的なアプローチを保ち、資料を博捜してメモを蓄積していた。このシリア語大辞典は、キャトルメールの没後二十年以上の後、ペイン・スミスの手で出版されたものであるが、その根底を成す基本資料がキャトルメールの手によって採集されたものであることは動かない。なお辞書タイトル頁の姓名はラテン語形で記されている。

シリア語

「シリア語」とは、北西セム語群の一つアラム語の一方言であり、古代のエデッサ（現在のトルコ東南部ウルファ）を中心に話されていた。イエス･キリストが宣教の際に用いた言語はアラム語であったとの説が有力であるが、シリア語はこれと非常に近く、また旧約聖書の主要言語であるヘブル語とも親縁関係にある。エデッサはティグリス、ユーフラテス両河川の中間域すなわちメソポタミア地方に位置し、初期キリスト教の重要な拠点となったため、シリア語は教会そして典礼の言語として大いに用いられるようになった。シリア語により、聖書の翻訳（400年頃完成の「ペシッタ」が著名）や優れた神学文献、詩歌文学が生まれたばかりでなく、ギリシアの哲学・科学・医学が多数シリア語に翻訳され、その後636年にアラビア人がシリアを支配下に置いた後、ギリシア文化がイスラム教に影響を及ぼす下地を形成した。シリア教会は、5世紀に東域のネストリオス派と西部のヤコブ派に分かれるが、シリア語の筆記字体としては、それ以前の古い形態である「エストランゲラ」、それ以降東部で用いられる「ネストリアン」、西部で用いられる「ジャコバイト」（セルトー）の３種がある。シリア語の字母は基本的に子音字であるが、音読の便宜をはかる母音符号の打ち方についても、東部と西部とで異なる方法が用いられるようになった。イスラム勢力の台頭とともにシリア語は少しずつ衰退してゆくが、教会での典礼語として今なお重要な役割を果たしている。(M. A.)

36 Bedjan, P., *Acta martyrum et sanctorum*, 7vols., Parisiis, 1890-1897. 20.7×14.4cm (C160-*5)

ベジャン編『殉教者・聖人行伝』（シリア語版）

紀元後1世紀に始まるキリスト教迫害の時期に、己の生命を賭してキリスト教信仰を証しした人々は「殉教者」とされ、聖人のなかでも高い位に挙げられて、その伝記が伝えられ広く流布した。本叢書『殉教者・聖人行伝』は、シリア語で記された殉教者や聖人の伝記について、編者が英仏国や中近東諸地域の図書館に写本を求めて渉猟し、全7巻に編纂した貴重な資料であり、本学が特に誇るシリア語テキストの一つである。第1巻は「聖ペトロとパウロの生涯」に始まり、ギリシア教父で教会史家のエウセビオス（263-340）による「パレスティナの殉教者列伝」のシリア語訳などを含む。第2巻は「カルデアとペルシアの殉教者」の巻であり、第3巻では、シリア地域のみ独自の伝承を伝える「聖十字架の発見」などが注目される。第4巻にはティグリス川上流域に勢力を持ったシリア教会の隆盛を伝える諸殉教者伝が続き、第5巻には一転してエジプト地域の諸聖人伝が収められている。第6巻は、主として英国の図書館の諸写本から起こした使徒教父時代の聖人伝、第7巻はギリシア教父パラディオス（363-431）とラテン教父ヒエロニュムス（前掲）の著作からシリア語訳された『聖父たちの楽園』（*Paradisus Patrum*）である。

ベジャン，ポール Bedjan, Paul（1838-1920）

ラザリスト宣教会（ヴァンサン・ド・ポール会）の修道士でオリエント学者。1838年、ペルシアのウルミエ湖畔シャープール（ホスロワ）に生まれ、1920年ドイツのケルンに死去。郷里において、ラザリスト会宣教師たちが援助するカルデア教会の神学校で教育を受け、1856年パリに渡来、故郷に戻って1861年カトリック司祭に叙階される。ペルシアで司祭として勤めたのち、1880年再びパリに呼ばれ、以後フランス、ベルギー、そしてドイツで生活した。『キリストにならいて』（トマス・ア・ケンピス著）をカルデア語（現代シリア語）に訳すなど（1885）、カルデア・カトリック教徒の教化に努めたほか、カルデア典礼（後述）聖務日課書の整備(Breviarium Chaldaicum 全3巻、1886-7)、中世のシリア語による大著作家バル・ヘブラエウス(1226-86)の年代記や倫理書などの編纂(1890-98)、そして本展示による『(シリア)殉教者・聖人行伝』編纂(全7巻,1890-1897)など、古代シリア語テキストの公刊を精力的に行った。

シリア教会史

キリスト教がシリア・メソポタミア地域に広まったのは紀元後150年頃とされる。それに先立ち、地中海沿岸のアンティオキアでは、イエスの教えに従う者たちがすでに「キリスト教徒」と呼ばれていた（使徒行録11.26）。その後アフラアテス(280-345)やエフレム(306-373)などの正統教父たちが教義・教会組織の基礎を築き、教勢は隆盛を迎えた。だが、①431年のエフェソス公会議において、「完全な神にして完全な人」であるイエスの神性に疑義を唱えるネストリオス派が異端とされると、彼らは東シリアへと展開し、226年に建国していたササン朝ペルシア領内に地歩を固め、さらには中国にまで教勢を及ぼして景教と呼ばれた（後に衰退）。②その後451年のカルケドン公会議において、今度はキリストの人性を否定的に捉える西シリアの単性論教会が異端とされた。彼らは、ヤコブ・バラダイオス(500-578)の下で強力に再組織され、以降「ヤコブ派」と呼ばれることになる。③これにくみせず、正統派内に留まったシリア教会の一部は、地中海沿岸都市を中心に「メルキト（「ビザンティン皇帝」の意）派」と呼ばれた。④その後681年の第3コンスタンティノポリス公会議では、キリストにおける神的意志と人的意志をめぐり、後者を否定する「単意論」が異端とされるが、その主流を形成していたのは、かつてのシリア人修道士マロン(350-433)の名を奉じて「マロン派」と呼ばれる一派であった。

上記①②③④は近代初頭以降、各々ローマ教皇との一致を回復するカトリック教徒をその内部に生み、旧来の組織と分離した。すなわち①からは「カルデア教会」が誕生し(1552)、現在もイラクを中心に展開する一方、旧来の組織は「アッシリア東方教会」と呼ばれる。②からは「シリア・カトリック」教会が成立(1781)、旧来のヤコブ派は「シリア正教会」を名乗る。③は7世紀以降ビザンツの影響下に入り、典礼様式もビザンティン典礼に改めた。1054年以降、彼らはギリシア正教会のアンティオキア総司教区となるが、ここから「メルキト・カトリック」が分立する(1729)。④のマロン派教会は、その後十字軍との接触などを通じて1182年にローマとの一致を回復、「マロン・カトリック」となる。このほか①と②は早くからインド西岸に宣教活動を行い、これらも同様にローマとの一致を復す派との分離を生んだ。すなわち①からは1599年に「シリア・マラバール」教会が分立、②からは1653年に「シリア・マランカラ」教会が成立した。旧来のヤコブ派（②）はインドに多数の信徒を持つが、ここから「マランカラ正教会」も分立する。このほかシリア典礼に拠るプロテスタント諸教会も見られる。現在これらの教会の典礼では現地語が用いられることが多いが、一部シリア語の唱句が残されている。また欧米などの移住民たちの間にも各シリア系統の教会組織が形成され、シリア起源の典礼が行われている。（M. A.）

37 Graffin R., *Patrologia Syriaca*, 3 vols., Parisiis, 1894. 28.8×20.1cm (C600-g10)
Graffin R., Nau, F.N., *Patrologia Orientalis*, 27 vols., Paris, 1900-. 27.9×19.5cm (C150-p3-PO-1/27)

グラッファン編『シリア教父学』およびグラッファン／ノー編『オリエント教父学』

まず、叢書『シリア教父学』*Patrologia Syriaca*(PS)はRené Graffin(1858-1941)の手で発刊が開始されたが、アフラアテス（前掲）の『論証』など、3巻分を刊行したところで新企画の*Patrologia Orientalis*(PO)へと移行した。新叢書ではグラッファンとともに、偉大な数学者でもあったFrançois Nicolas Nau(1864-1931；次項)の名が共編者として加えられ、ルネの没後は甥でイエズス会士のFrançois Graffin(1905-2002)が編集を継続し、1992年以降はローマにあるPIO(Pontificio Istituto Orientale；教皇庁立東方研究学院）がこれを引き継いでいる。本学にはPSの全3巻、およびPOの初期の27巻までが所蔵されている。

本展示では、『オリエント教父学』叢書からアッダイ・シェール大司教（次々項）の校訂による、ネストリオス派に属すハルワンのMar Barhadbeschabba‘Arbaya（6/7世紀）著『学派創設の由来』を挙げておく。シェール師はこのように、ネストリオス派～アッシリア教会／カルデア教会の学統・教会史を専門領域とした。

ノー，フランソワ・ニコラ　Nau, François Nicolas (1864-1931)

数学者・物理学者にして、20世紀初頭のフランスを代表する優れたオリエント学者でもあった人物。1864年,フランス東北部モーゼル川流域のティル村に生まれる。1887年司祭に叙階されたのち、1894年までパリのカトリック学院で数学と物理学を研究、ソルボンヌにて1889年に数学の教授資格、翌年物理学の教授資格、1897年には数学の博士号を取得する。1890年から没年の1931年までパリのカトリック学院で教鞭を執り、1894年からは「一般数学」の教授を務めた。やはり同学院で教えていたルネ・グラッファンによりシリア学への強い関心を呼び覚まされ、1892年から95年まで高等研究学院でシリア学研究に専念、1895年にはバル・ヘブラエウス(1226-86)による天文学的著作『理性の上昇の書』(1279年)の校訂と翻訳を行い、課程を修了する。1896年にはパリのアジア協会の一員に加えられ、1906年からはグラッファンとともに叢書『オリエント教父学』（前項）の編集に参画、数学正教授の激務をこなしながら、1927年には高等学院のキリスト教アラム語講師にも任命され,没年までこれを果たした。この間、1903年にはマロン派教会（前掲）の司教代理にも任じられた。彼は、自然科学に対する専門的知識が、関連するオリエント学文献の校訂作業等にも豊かな実りをもたらした稀有な証例だと言えるだろう。

シェール，アッダイ　Scher, Addai（1867-1915）

偉大なオリエント文献学者であるとともに、「現代の殉教者」として誉れある一生を終えた人物。1867年、カルデア教会司祭の子としてキルクーク(現イラク領)教区(当時)のシャクラワに生まれる。1879年、モスルの聖ヨハネ神学校に入学、ドミニコ会士の下で教育を受ける。1889年司祭に叙階され、東方の使徒「アッダイ」の名を得る。生地で司牧に従事した後、1902年、カルデア教会のスィイルト（現トルコ領南東部の町）大司教に叙せられ、没年まで務めた。この間、シリア語やアラビア語の古写本校訂において多くの業績を遺している。

第一次世界大戦勃発後、連合国とくにロシアからの圧迫により苦戦を強いられた落日のオスマン・トルコ帝国は、国内のキリスト教徒たちに対し、ロシアと密通しているとの嫌疑をかけ、彼らが居住する区域の焼き討ちと住民の惨殺を、自暴自棄的に容赦なく行っていた。1915年6月、尋問を受けて生きる道がないことを察したシェール大司教は脱走を計画、2人の従僕だけを連れ、変装して付近の山地に隠れたが、これを知ったトルコ軍はスィイルト一帯の焼き討ちを激化させた。1915年7月20日、大司教の隠れ場はついに発覚し、即刻処刑を言い渡された。大司教は最期、変装衣の下から胸の十字架を露にし、司教指輪をはめ直して胸に当て、静かに祈ったという。8発の銃弾が彼を射抜き、その後1922年には、貴重な写本を蔵するスィイルト大司教図書館が再度略奪された。これによる文献学的な損失としては、1905年にシェール自身が同図書館で発見し、校訂版発刊を企図していたモプスエスティアのテオドロス（350-428、後述）の主著『受肉について』のシリア語訳写本が失われ、同著作が永劫にこの世から姿を消したということが挙げられる。

このアッダイ・シェール師惨殺事件は、オリエント地域の人々が今日もなお、生命を賭けて自らの伝承を生き抜いていることを証しするものである。(M. A.)

38 Chabot,J.B., Guidi,I., *Corpus scriptorum Christianorum Orientalium* (CSCO), vol. 1, 2. 1903-. 25.0×16.5cm (C150-c5)

シャボー／グイディ編『オリエント教会著作家集成』

19世紀末、すでにシリア教父たちについては前述のような校訂テキスト叢書が発刊されていたが、1903年、ジャン・バプティスト・シャボーやイグナツィオ・グイディ（次項）らにより、このプランがオリエント教父の全般へと拡大された。この企画が『オリエント教会著作家集成』であり、使用言語に基づきシリア語、コプト語、エチオピア語、アラビア語、アルメニア語、グルジア語の6部門から構成されている。各原典テキスト1巻につき、当初は必ずラテン語訳が1巻付されていたが、翻訳言語は次第に西洋近代諸国語へと移行しつつある。またしばしば、オリエント教父学に関するモノグラフが叢書中の一巻として刊行される。創刊後10年目以降は、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学とワシントン・カトリック大学が編集と管理を担当してきた。現在既刊分は600巻を越え、なお継続中である。

シャボー，ジャン・バプティスト Chabot, Jean Baptiste (1860-1948)

フランスのオリエント学者。フランス西部トゥール近郊の町ヴヴレに生まれ、1885年司祭に叙階された。高等教育学校とルーヴァンで教育を受け、ニネヴェのイサク（7世紀半ばに活躍）に関する論文で神学博士号を取得（1892）。のち、コレージュ・ド・フランスでシリア学の研究を続け、1903年には他の学者の協力を得て『オリエント教会著作家集成』を発刊した。

グイディ，イグナツィオ Guidi, Ignazio（1844-1935）

一方イグナツィオ・グイディはイタリアのオリエント学者。ローマに生まれ、同地に死す。東方典礼に従う聖職者の薫陶を受け、アラビア、シリア、アラム、コプト、エチオピアなど諸語を習得。1876-1919、ローマ・サピエンツァ大学にて教鞭を執り、1885年以降比較セム語学講座の正教授を務めた。CSCOの発刊に際し、シャボーとともに主幹として参画する。セム語全般を幅広く研究領域とし、南アラビア語碑文の研究にも及ぶだけでなく、ハム語族に属すコプト語の研究にも造詣が深い。

シリア教父

シリア語を用いて著述したキリスト教著作家としては、アフラアテス（前述）やエフレム（306-373；後述）など、431年エフェソス公会議におけるネストリオス派分離以前の正統教父たちや、ナルサイ（399-503）やニネヴェのイサク（前掲）などネストリオス派の神学者、マッブーグのフィロクセノス（440-523）やエフェソスのヨアンネス（558-586）、エデッサのヤコブ（633-708）など単性論ヤコブ派教会の師父たち、中世にあってはシリア正教会の大著述家バル・ヘブラエウス（1226-86）などが挙げられる。彼らは、総じて旧約聖書の伝承を色濃く受け継ぎながら神学を展開した。このほか、ギリシア教父の一人モプスエスティアのテオドロス（350-428）は、没後その著作がネストリオス派異端の嫌疑を懸けられて焚書に遭ったために、主著の一つ『教理教育講話』を含む多くの著作が東シリア教会内で保存され、シリア語訳で伝存する。

『オリエント教会著作家集成』の既刊分冊中、最も高い比率を占めるのがシリア語のものであるが、その中でも圧倒的に多くの巻数を占めているシリア教父が聖エフレム（306-373）である（CSCO中には現在彼の著作が三十数冊収められているほか、彼を著者と仮構する偽作も数冊を数える）。エフレムは北部メソポタミアのニシビス（現トルコ領ヌサイビン）に生まれ、若くして当地の教理学校で教鞭を執った。ローマ皇帝ヨウィアヌス（在位363-64）がペルシア王シャープールⅡ世と敗戦の和議を結び（363）、ニシビスを放棄したことに伴い、エフレムはエデッサ（前掲）に移ってここで教授活動を続けた。彼は「聖霊の竪琴」「教会の柱石」「シリア人の預言者」と呼ばれて敬愛されたが、彼の著作が豊かな伝承を持つことは、この崇敬をよく物語っている。ニケア公会議（325）から第1コンスタンティノポリス公会議（381）までの間に生きたエフレムは、後に東・西シリア教会が分岐する以前の教父であるため、シリア教会のみならず、オーソドックス教会やローマ・カトリック教会にあっても聖人の一人である。カトリック教会は1920年、彼に正式な「教会博士」の称号を贈った。エフレムは音曲に秀で、多数の聖歌を作ったことでも知られる。（M. A.）

オリエント世界のキリスト教会について

秋　山　　学

キリスト教が西洋世界の産物であるというのはまったくの誤解である。前掲の600巻を越すCSCOが如実に示すように、教会は東部地中海地方から内陸域に向け、シリア語やアルメニア語、あるいはグルジア語（コーカサス諸語に含まれる）により、下ってはアラビア語を用い、南進してはコプト語やエチオピア語を通じて宣教活動を行い、聖書翻訳や祈祷書、多数の神学書などを生んだ。こうしてオリエント地方一帯に、それぞれの地域の特徴を備えた多くの典礼様式が生まれていった。これまで展示により紹介してきたように、筑波大学附属図書館は、これらのオリエント・キリスト教関係の文献に関しても優れたコレクションを所蔵している。そのうち旧東京教育大学の蔵書は、通常１Ｆ「東京教育大学旧蔵書」コーナーの一角を占める「オリエント・コーナー」に集中的に配架されている。

オリエントのキリスト教会は、典礼の様式、使用言語、教会史や教義などからいくつかに分類される。その際、基準となるのは5つの「総大司教（総大主教）座」で、これを中心に形成されるのが「総大司教区」である。これはローマを含め、コンスタンティノポリス、アレクサンドリア、アンティオキア、そしてイェルサレムの5つより成り、このうちローマを除く4総大司教区が「東方」に属する。その中で、典礼様式の基盤となったのはアレクサンドリアとアンティオキアの2都市のものである。さらにこれらは、次の5タイプの典礼へと展開・収斂していった。それは

Ⅰアレクサンドリア典礼　Ⅱアンティオキア典礼　Ⅲカルデア典礼　Ⅳアルメニア典礼　Ⅴビザンティン典礼

の5種である。

このうちⅢカルデア典礼はⅡのアンティオキア典礼から分岐し、東シリア教会（＝ネストリオス派）の展開とともにペルシア地域に広まったものであり、現在もカルデア教会、アッシリア東方教会、インドのシリア・マラバール教会がこれに拠っている。一方Ⅳアルメニア典礼は、イェルサレム、アンティオキアの様式を基盤に、カッパドキア（小アジア中部）の影響が加わったものである。またⅤのビザンティン典礼は、アンティオキア、イェルサレム、カッパドキアなどさまざまな地域の要素が首都コンスタンティノポリスにおいて混在し、形成された様式であり、正統派に留まった教会が用いることになった。こうしてⅠアレクサンドリア典礼は、以降コプト（エジプトの古名）およびエチオピアの教会で伝承されてゆく一方、Ⅱアンティオキア典礼は、後にビザンティン典礼を導入したメルキト教会を除く西シリア教会の教会、つまりヤコブ派とマロン派教会において（多少の変異を伴いながら）受け継がれてゆくことになる（以上「シリア教会史」の項をも参照）。

次に、遺された文献で用いられた言語から見ると、先の『オリエント教会著作家集成』で採用されていたように、

aシリア　bアルメニア　cコプト　dエチオピア
eアラビア　fグルジア

という分類が可能である。このうち、シリア次いでアルメニアが、ギリシア･ラテンの教父たちと並んで独創的な神学を展開した文化圏として名高い。また、これらの言語は旧新約聖書の翻訳に用いられた言語でもある（後には、ゲルマン民族宣教のためにゴート語が、スラヴ民族宣教のために古代教会スラヴ語が聖書翻訳に用いられた）。

さらに教会史や教義史を参考に考えれば、公会議で異端とされた順に、

①反エフェソス派（431年～。ネストリオス派＝東シリア教会。後にローマとの一致を遂げたものは「カルデア教会」を名乗る。インドにも伝存。「シリア教会史」の項を参照）

②反カルケドン派（451年～、単性論派諸教会。すなわち西シリア教会（⇒ヤコブ派）およびコプト教会、アルメニア教会、エチオピア教会）

③単意論派（681年～、＝マロン派。後にすべてローマと一致）

④正統教会（＝オーソドックス教会。ビザンティン教会、メルキト教会、グルジア教会ほか。1054年にローマと分離し、「正教会」と訳される。典礼の上ではいずれもビザンティン典礼）

というふうに分類できよう。そして④の「正統教会」の中にもローマと再一致を遂げるものがあり、それらは中・東欧を中心に「ギリシア･カトリック」を名乗って展開している。一方正教会は、各国ごとに教会組織を形成するのが原則となり、ロシアに展開した「ロシア正教会」をはじめ、「ギリシア正教会」「日本ハリストス正教会」などの名称を得て今日に至っている。

以上に挙げられた諸教会を総称し、西のキリスト教会と対比する意味で「オリエントのキリスト教会」という名称を与えることが可能であろう（典礼学上、ビザンティン典礼に拠る諸教会も「東」のキリスト教に分類される）。これらの諸教会は、いわゆる欧米の教会と異なり、総じて異教文化（イスラム教や仏教など）と共生し、それとの協働・対峙関係において伝承を生きている点が特徴的である。その際、古代末期の教父たちに象徴されたように、オリエントの諸教会は、輝かしい古代東方の伝承文化を常に聖化しつつ継承するという役割を担っているのである。

項目索引

『アヴェスター』 22, 47 - 50； ――― 語　47 - 49
アッカド語　13, 18, 23, 26 - 28, 35f
アッシリア　7, 9f, 13 - 16, 18 - 21, 24 - 26, 36f, 56f
アフロアジア語　34
アララハ　13, 20
イドリミ　20
『イリアス』 37, 51, 52；『 ――・ アンブロジアーナ』 37, 51, 52
インド・ヨーロッパ語　7, 21, 47
ウガリト　7, 13, 19, 25 - 28； 35　―― 語　13, 19, 23, 27f, 35f
ウル(地名)　13, 17, 21； ――(国)　16, 17
エジプト語　28, 34f, 37 - 42, 45f
エヌマ・エリシュ　15f
旧約聖書　7, 10, 13f, 17, 20f, 24f, 29f, 33, 35, 37, 41, 51, 55, 58f
教父　7, 9, 11, 37, 52 - 54, 56 - 59
グデア　13, 17f
クムラン　29, 33
コプト語　34f, 37 - 41, 45f, 58f
死海文書　5, 7, 29, 31 - 34
写本　7, 29f, 32f, 37, 47 - 53, 55 - 57
シュメール語　13, 17f, 27f, 36
象形文字　5, 7, 13, 21, 28, 37, 45f
シリア(語)　36f, 55 - 59； ――(教会)　55f, 58f
新約聖書　29, 33, 37, 51, 53, 59
楔形文字　5, 7, 10, 13 - 16, 18 - 23, 26 - 28, 48
創世叙事詩　15
ゾロアスター教　7, 22, 37, 47 - 50
タルムード　29, 32
ニネヴェ　14f, 20, 23, 25, 58
ニムルド　13f, 20, 25
バビロニア　13, 15f, 19f, 25, 32, 36
バビロン(地名)　13 - 16, 19, 24；(国)　16, 19
バベル　15
ハンムラビ(王・法典)　13, 15f, 19
ビーソトゥーン碑文　23, 48
ヒッタイト　13, 16, 21； ――(語)　13, 28, 47
ベヒストゥーン碑文⇒ビーソトゥーン碑文
ヘブライ語　26, 28, 30 - 36, 51, 55
ペルシア語　13, 22f, 47 - 50
ベン・アシェル家　30
マソラ　30, 34, 51
マリ　13, 17 - 19
マルドゥク神　15f
ミシュナ　29, 32
ユダヤ教　7, 10, 29, 32f
ラス・シャムラ　19, 26f
ルウィ語　13, 21, 47
ロゼッタ・ストーン　38, 41

人名索引

アウグスティヌス(Augustinus)　52f
ベジャン(Bedjan, P.)　56
ベルクマン(Bergman, E.)　10, 16
シャボー(Chabot, J.B.)　58
シャンポリオン(Champollion, J.F.)　11, 38f, 41f, 45f
クリステンセン(Christensen, A.)　47, 50
デッカー(Dekkers, E.)　53
デリッチ(Delitzsch, F.)　10, 15
ドサン(Dossin, G.)　10, 18
エルマン(Erman, A.)　11, 39f, 42
フリードマン(Freedman, D.N.)　30
ガーディナー(Gardiner, A.H.)　11, 40, 42
グラッファン(Graffin, R.)　11, 57
グローテフェント(Grotefend, G.F.)　22f
グイディ(Guidi, I.)　58
ホーキンス(Hawkins, D.)　10, 21
ホメロス(Homerus)　37, 51f
コルデウェイ(Koldewey, R.)　10, 15
ランズバーガー(Landsberger, B.)　10, 18
ラングドン(Langdon, S.)　10, 15
レヤード(Layard, A.H.)　10, 14
レプシウス(Lepsius, C.R.)　11, 38, 41f, 44
ロウ(Lowe, E.A.)　11, 52
マロワン(Mallowan, M.E.L.)　10, 20f
モーセ(Moshe, H.)　30
ノー(Nau, F.N.)　57
ポロツキー(Polotsky, H.J.)　11, 40, 42
キャトルメール(Quatremère, E.M.)　55
ローリンソン(Rawlinson, H.C.)　14, 22f
シェイファー(Schaeffer, C.F.A.)　10, 19, 26, 28
シェール(Scher, A.)　57
スミス，ジョージ(Smith, G.)　10, 14f
スミス，ロバート・ペイン(Smith, R.P.)　55
スミス，シドニー(Smith, S.)　10, 20
スケーニク(Sukenik, E.L.)　31 - 34
テュロー・ダンジャン (Thureau-Dangin, F.)　10, 17
ヴィロロー(Virolleaud, C.)　26 - 28
ウーリー(Woolley, C.L.)　10, 17, 20f
ヤディン(Yadin, Y.)　31f, 34
杉勇(すぎ　いさむ)　5, 9
原田慶吉(はらだ　けいきち)　10, 13, 16

本図録の構想および第３部の執筆に際しては、ハンガリー国立セイチェーニー図書館関係の資料、同国立西洋美術館のカタログ、オーストリア・ウィーン美術史博物館カタログ、ドイツ（ベルリン）・ペルガモン博物館カタログ等を一部参考にした。シリア関係の事項については、中央大学の高橋英海氏よりご教示をいただいた。

また本図録の公刊促進にあたっては、平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究C(2)「東欧・スラブ諸国における西洋古典学の継承と展開」（研究代表者秋山　学、課題番号15520148）、および平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究C(2)「非主我的愛の成立基盤としての修道院霊性に関する研究」（研究代表者桑原直己、課題番号15520004）より一部交付を受けた。

筑波大学附属図書館特別展

オリエントの歴史と文化　－古代学の形成と展開－

特別展企画　山田　重郎（S.Y.）：大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻助教授（西洋史）
池田　　潤（J.I.）：大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻助教授（一般言語学）
秋山　　学（M.A.）：大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻助教授（総合文学）
桑原　直己（中世哲学会関係調整）：大学院人文社会科学研究科哲学･思想専攻助教授（倫理学）

図録編集
統括責任　植松　貞夫（附属図書館長）
執筆・編集　山中　美知（M.Y.）：博士課程文芸・言語研究科５年
永井　正勝（M.N.）：博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻４年
有賀　　望（N.A.）：博士課程人文社会科学研究科歴史・人類学専攻３年
杉江　拓磨（T.S.）：博士課程人文社会科学研究科歴史・人類学専攻３年
長谷川敦章（A.H.）：博士課程人文社会科学研究科歴史・人類学専攻３年
深谷　雅嗣（M.F.）：博士課程人文社会科学研究科哲学・思想専攻２年
伊藤　早苗（S.I.）：修士課程地域研究研究科2年
後藤　信介（S.G.）：博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻１年
二ノ宮崇司（T.N.）：博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻１年
吉村知恵子（C.Y.）：博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻１年
岡田　晴子（H.O.）：修士課程地域研究研究科1年

池田　　裕：歴史・人類学系名誉教授（西洋史）

附属図書館特別展ワーキング・グループ
気谷陽子（主査）　大久保明美　山中真代　岡部幸祐
上原由紀　大山　淳　村尾真由子　嶋田　晋　船山桂子

平成16年10月25日
発　行　筑波大学附属図書館（館長　植松貞夫）
〒　305-8577　茨城県つくば市天王台1-1-1
Tel　029-853-2376
印　刷　(株) イセブ
〒　305-0005　茨城県つくば市天久保2-11-20
Tel　029-851-2515

ORIENT

筑波大学附属図書館